

令和4年度 文部科学省指定事業

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」
報告書



広がる学び、多様な未来



兵庫県立御影高等学校
Hyogo Prefectural Mikage Senior High School



巻頭言

兵庫県立御影高等学校 校長 森本 成己

本校はこれまで各学年1クラス設置されている総合人文コースにおいて、特に探究的な学びを展開してきた。このコースにおける学びの中心は文系的なものであったが、デジタル化が急速に進展している現在の社会は文系、理系を問わずデータサイエンスの学びが必要となっている。また、SDGsの実現や温暖化をはじめとした地球規模の問題など、複雑化する現実社会の問題を考えると、文系的なアプローチだけでは多面的に考えることが不足していることへの課題意識があった。こうした中、現在の総合人文コースを、文系、理系にとらわれずに広く学びを深めることのできる「学際領域に関する普通科新学科（以下、学際領域学科）」への改編を目指すこととした。

今年度（令和4年度）、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、これからの社会において、多彩な力を発揮し、新たな価値を創造できる人材を育成するための学際領域学科について、運営指導委員会・カリキュラム開発会議・コンソーシアムの3つの組織・会議を設置し検討を続けてきた。

コンソーシアムでは実社会の問題との関連について様々なご意見をいただいた。また、運営指導委員会においていただいた学びの方向性に対する指導・助言をもとに、カリキュラム開発会議で新学科のカリキュラムを検討してきた。特に、学際領域学科の肝となる探究活動をどのように考え、展開していくのか、といったことに2人の専門家から指導・助言をいただきながら議論を交わしてきた。この課程を通して、生徒個人がどのように探究に取り組み、学びを豊かにしていくのか、これまでとの違いを本校職員を含む委員全員で共有していくことができた。

また、探究的な学びが楽しいものであること、現実社会の問題に触れること、本物に出会うこと等を考え、学校外での学びとしてSTEAM教育を意識したクリエイション講座を先行実施している。取組の詳細は本文に譲るとして、参加した生徒たちは座学では出会えない学びを経験し、参加して良かったとの感想を述べている。今後も、生徒の好奇心に火をつけ、卒業後も学びを自走できる生徒を育成するためにも、クリエイション講座の充実を目指していきたい。

さて、今回の事業において本校では2人のコーディネーターを配置している。一人は会議のコーディネートと主に研究機関・大学等との連携、もう一人は主に企業との連携に力を発揮していただいている。大学や行政との連携やクリエイション講座に欠かせない企業との連携について、コーディネーターが果たす役割は大きかった。

今年度からスタートした普通科改革支援事業であるが、全国から複数の教育委員会や高等学校などからの視察来校があり、情報交換や意見交流を行うことができた。全国の関係高等学校で検討されている学際領域学科のフロントランナーとなれるように今後も検討を続け、先行実施の内容を充実させていきたい。

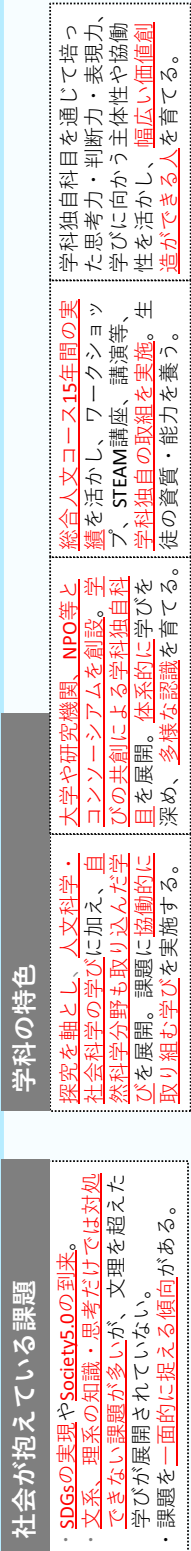
最後に、運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアムで御支援・御指導を賜りました委員の皆様をはじめ、お世話になりました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、2年目となる来年度も引き続き御支援・御指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和4年度 文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」報告書
目次

・ 巻頭言	1
・ 目次	2
I ビジュアル資料	3
概要図 ①実施計画概要	
②実施報告概要	
新学科の概要スライド	
令和4年度 高校コーディネーター 全国フォーラム発表資料	
新時代に対応した高等学校教育改革推進事業 普通科改革支援事業 進捗報告資料【抜粋】	
クリエイション講座	
II 研究開発の概要（事業実施計画書(抄)・事業結果説明書(抄)）	11
①事業の実実施計画	
②事業の実実施日程	
③実施の概要	
1 カリキュラムの検討内容	
2 コーディネーターの活動状況	
3 管理機関による事業の実実施体制や管理方法	
4 管理機関による支援体制（予算・人的配置等）	
5 高等学校における事業の実実施体制や管理方法	
6 運営指導委員会の体制および取組	
7 コンソーシアムの体制および取組	
8 管理機関における事業全体の成果検証、評価	
9 新学科の設置及び設置に向けた検討の関係者への説明の実施	
10 成果普及のための取組	
III 研究開発の内容	40
①3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）	
②先行実施事業（クリエイション講座）	
③課題研究成果発表会（校内発表会、校外での課題研究発表、県外高等学校との交流発表会）	
④目標の達成状況、成果、評価	
IV 参考資料	76
①クリエイション講座募集案内	
②新聞などでの報道	
1 神戸新聞	
2 ネスレ日本株式会社	

【兵庫県立御影高等学校】学際領域学科

文理の枠を超えた学びを通し、広い価値を創造する“Society5.0の時代に求められる生徒”を育てる学際領域学科の創設



ビジュアル資料

育てたい力

- 主体性**
価値を見つけ生み出す感性
価値を見出す力・好奇心・発想力
- 協働性**
リーダー性・フォローワーシップ
- 課題解決能力**
読解力・データリテラシー
数学的思考力・科学的思考力
現状分析力・実行力
- 言語表現スキル**
発信力・対話力・創造性・構成力
- 多様な認識**
文・理の枠組を超えた高次の認識
多面的な認識・メタ認知能力



連携機関 (★はMIKAGEコンソーシアム参加機関)

- 国際NPO** ★Colorbath
- 行政・地域NPO** ★神戸市東灘区役所 ★コミュニティ・サポートセンター神戸 ★コミュニケーション 外国人留学生とのワークショップ グローバル/ローカルリーダー論講座
- 大学** ★神戸大学・甲南大学 京都大学・関西学院大学
- 研究機関・博物館** ★兵庫県人と自然の博物館 兵庫県立大学自然・環境学研究所 神戸市立森林植物園
- 企業等** ★株式会社ウェルアールップ ライフデザイン研究所FLAP ★株式会社ISA

3ヶ年実施計画

【令和4年度】学設置準備

- 新学科学カリキュラム開発
- 関係機関と連携体制構築
- 連携協力のもと、学科の特色ある学びの先行実施

【令和5年度】学設置準備

- カリキュラム開発会議
- 連携強化
- 特色ある学びの先行実施
- 関係機関との発表会
- 関係機関との発表会

【令和6年度】学設置初年度

- 関係機関の連携協力による教育活動実施
- 新カリキュラム実施に向けた校内体制の整備

年3回の事業指導委員会による成果の検証・助言のフィードバック 他校・他地域に向けた成果発信

育てたい生徒像

これからの社会で活躍できる生徒

未来の自分を早掘え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができ
る生徒

価値観の多様性を認め、誰とも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒

現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しく知り、見つけた課題をもとに解決できる生徒

力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもつて踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

スクールミッション 達成

【兵庫県立御影高等学校】学際領域学科（令和6年度設置予定）

学科設置の目的・特色

広がる学び、多様な未来

予測不能な今後の社会において、多様な価値を創造しながら活躍できる人を育成することを目標とする。その目標を実現させるため、**校外機関とも連携**をとりつつ、生徒の学びのフィールドを校外に広げ、**学際独自の開講科目**を軸に、多様な認識や高次の認識を育てながら、学際的に**取組む探究活動**を展開することで、生徒の知的好奇心を高めるとともに、主体性や協働性、課題解決能力、言語表現スキルの伸長をはかる。

校外機関との連携

コーディネーターを活用し、新たな思考や新たな価値観、知的好奇心を育てるために、大学や行政、研究機関、企業や社会貢献を行う団体等と連携した教育活動を実施

学際独自の開講科目

教科の専門知識を幅広く受講を可能とするとともに、実社会で活かすことができる「読解力」や「論理的思考力」「対話力」「表現力」等を磨くための科目を設置

学際的に取組む探究活動

探究のプロセスを体系的に学び、自らの興味関心に応じた課題研究や、地域に関する課題研究に学際的に取組む授業を設定し、生徒個々が主体的に探究を実施

主体性 協働性 課題解決能力

言語表現スキル

多様な認識

育てたい生徒像

地域や国際社会のありようによりしっかりと目を向け、社会に貢献しようという志をもち、さまざまな事象の解決や是正、および、原因の追究に粘り強く挑戦し続けることができる生徒

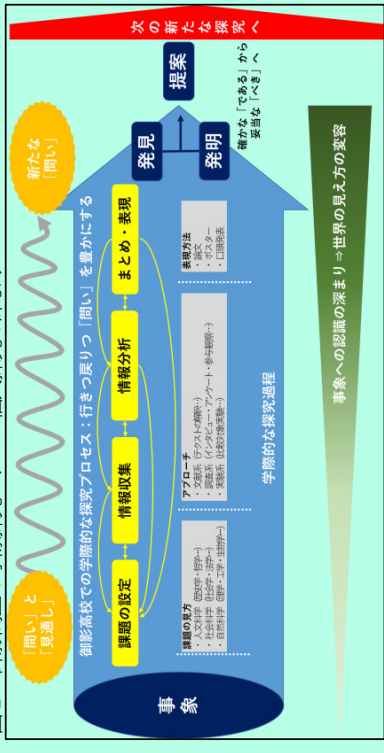
人文・社会・自然科学の専門知識を深め、事象を多面的に認識ができるようになることにも自ら読解力や論理的思考力を磨き、新たな価値を見出したそうとする好奇心をもつ生徒

地域や国際社会に生き生きとさまざまな方と対話を重ねつつ、自ら学び、考えて行動できる主体性や、周囲の仲間と協働しながら物事に取り組む中で、リーダーシップが発揮できる生徒

令和4年度の取組・成果

カリキュラム開発

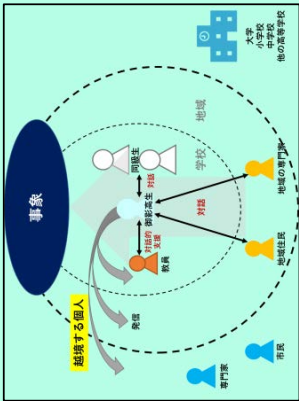
図1：御影高生の学際探究モデル：個人探究の深まり



7回開催したカリキュラム開発会議で、2つのモデル図を開発・共有し、体系的な探究カリキュラムを検討

→令和5年度より先行実施

図2：多層的な探究コミュニティのモデル



学びの先行実施

- 学年を越えた探究発表会
- 県外高校との探究発表会
- 11回のクリエーション講座 等



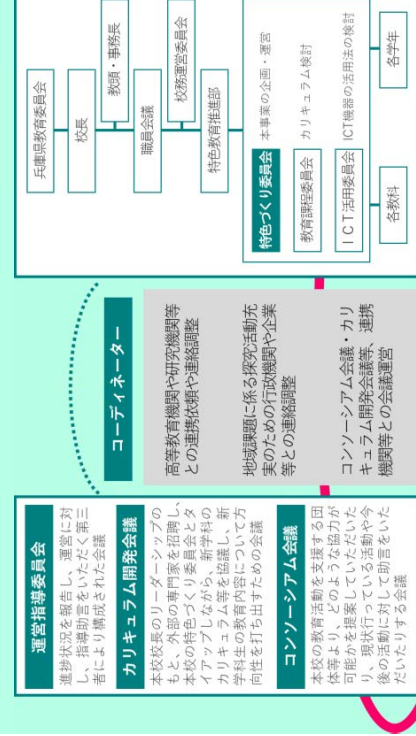
2年生が1年担当探訪課発表 県外高校との探究発表会

NPO法の方を招聘した授業

企業の方を招聘した授業

関係機関との連携・協働体制の構築

2名のコーディネーターを中心に、協働体制を構築



関係機関との連携・協働体制の構築

関係機関との連携・協働体制の構築

令和5年度の課題

- カリキュラム
- 先行実施の成果検証
- 新たなカリキュラムの開発

学科開設準備最終年度

- 関係機関との連携強化
- クリエーション講座の拡充
- 連携協定の締結

広報活動の充実

- 中学生や保護者への周知
- 地域内外に向けた取組の発信

校内体制の整備

- 学科準備委員会の設置
- 新たなカリキュラムの実践準備

入学選抜方法の検討

- 最適な方法の検討
- 入学選抜方法の周知



普通科・新学科とは

「普通教育を主とする学科」の弾力化－普通科改革の意義・概要

○普通科には高校生の約7割が在籍する一方で、生徒の能力・適性・興味・関心を踏まえた学びの実現に課題があるとの指摘もなされてあり、「普通科」の名称から一貫した学びの印象を持たれず、どこぞ、普通科においても、生徒や地域の実情に応じた特色・魅力ある教育を実施する。
○普通科において特色・魅力ある教育を行うにあたって、従来の文系・理系の類型分けを普遍的なものとして位置付けるのではなく、総合的な探究の時間を軸として、生徒が社会の技術的発展に寄与するために必要な資質・能力を育成するための多様な分野の学びに課することができるようになる。



- 学際領域学科**
現代的な課題のうち、SDGsの実現やSociety5.0の到達に向けた課題に対応するために、学際的・総合的な学際分野や新たな学際領域に照らし最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科
- 地域社会学科**
現代的な課題のうち、高等学校が担う地元自治体を中心とする地域社会が抱える課題に対応し、地域や社会の発展を促す人材の育成を図るために、現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目し、実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科
- その他普通科**
その他普通教育として求められる教育内容であって当該高等学校のスタイル・モデルに基づく特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

1

本校の学際領域学科

■ 育てたい生徒像

未来の自分を見据え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができる生徒
価値観の多様性を認め、誰とも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒
現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しい知識や情報をもとに解決できる生徒
力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもって踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

■ 育てたい資質・能力

- 主体性** 自ら課題を見つける力・主体的に取り組む力・継続的に取り組む力
- 協働性** 多様な価値観を受容する力・協働的に取り組む力・リーダーシップ
- 課題解決能力** 正確に事象を把握し分析する力・課題の解決策を見出す力
- 言語表現スキル** 熱意・好奇心・挑戦しようとする力・発信力
- 多様な認識** 文・理の枠組を超えた高次の認識・多面的な認識・メタ認知能力

Copyright(C) Hyogo prefectural Mikage senior high school.

2

本校の学際領域学科

■ 学科の特色 広がる学び、多様な未来

予測不能な今後の社会において、多彩な力を発揮し、新たな価値を創造しながら活躍できる人を育成することを目標とする。その目標を実現させるため、校外機関とも連携をとりつつ、生徒の学びのフィールドを校外に広げ、多様な認識や高次の認識をもととし、学際的に取り組む探究活動を展開することで、生徒の知的好奇心を高めるとともに、主体性や協働性、課題解決能力、言語表現スキルの伸長をはかる。

■ 新学科のキャッチコピー、理念

- 探究を軸とし、人文科学・社会科学の学びに加え、自然科学分野も取り込んだ学びを展開。課題に協働的に取り組む学びを実施する。
- 大学や研究機関、NPO等とコンソーシアムを創設。学びの共創による学科独自科目を展開。体系的に学びを深め、多様な認識を育てる。
- 総合人文コース15年間の実績を活かし、ワークショップ、STEAM講座、講演等、学科独自の取組を実施。生徒の資質・能力を養う。
- 学科独自科目を通じて培った思考力・判断力・表現力、学びに向かう主体性や協働性を活かし、幅広い価値創造ができる人を育てる。

Copyright(C) Hyogo prefectural Mikage senior high school.

3

本校の学際領域学科

■ 目指す生徒像、教育目標、グラデュエーションポリシー

- 地域や国際社会のありようにしっかり目を向け、社会に貢献しようという思いをもち、さまざまな事象の解決や正、および、原因の追究に粘り強く挑戦し続けることができる生徒を育成する。
- 人文・社会・自然科学の専門知識を深め、事象を多面的に認識ができるようになるとともに、自らの読解力や論理的思考力を磨き、新たな価値を見出そうとする好奇心をもつ生徒を育成する。
- 地域や国際社会に生きるさまざまな方と対話を重ねつつ、自ら学び、考えて行動できる主体性や、周囲の仲間と協働しながら物事に取り組む中で、リーダーシップが発揮できる生徒を育成する。



Copyright(C) Hyogo prefectural Mikage senior high school.

4

本校の学際領域学科

■ カリキュラムポリシー

- 探究のプロセスを体系的に学び、実践を行う授業を設定する。
- 自らの興味関心に応じた課題研究や地域に関する探究活動に学際的に取り組む授業を設定する。
- 人文・社会・自然科学の専門知識を幅広く学ぶ教科・科目を受講できる教育課程を設定する。
- 実社会で活かすことができる「読解力」や「論理的思考力」、「対話力」、「表現力」等を磨くために、学科独自の科目を設置する。
- 学びのフィールドを校外にも広げ、社会の実状を知る機会を設定する。
- 新たな思考や新たな価値観、知的好奇心を育てるために、大学や行政、研究機関、企業や団体等と連携した教育活動を実践する。
- 生徒が主体的に進路選択できるよう、学びの振り返りを行う機会を設けたり、生徒の興味関心や、進路希望に応じた選択科目を設置したりし、きめ細やかな支援を行う。

■ アドミッションポリシー

- 社会の諸事象に対して、興味関心を持っている生徒
- 仲間と協力し合い、答えのない課題に取り組むことに前向きな生徒
- 「学際的な学び」に対し、好奇心をもって取り組もうとする生徒

Copyright(C) Hyogo prefectural Mikage senior high school.

5

本校の学際領域学科

■ 実施教育課程

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	
1年	現代の国語	英語文化	歴史総合	公共	数学Ⅰ	数学Ⅱ	数学Ⅲ	化学基礎	生物基礎	体育	保健	音楽Ⅰ	美術Ⅰ	書道Ⅰ	英語CⅠ	情報Ⅰ	CROSSⅠ	HSⅠ	HR															
2年	グローバルシンキング	古典探究	文学探検	地理総合	日本史探究	世界史探究	化学	数学Ⅱ・数学C	数学Ⅲ	数学Ⅳ	物理基礎	体育	保健	英語CⅡ	現代英語(探究英語)	家庭基礎	CROSSⅡ	HSⅡ	HR															
3年	国際交流と探究実践	古典探究	文学探検	数学C	日本史探究	世界史探究	化学	数学Ⅲ	数学Ⅳ	情報(学校設定)	理科に関する学校設定科目(物理)	体育	英語CⅢ	現代英語(探究英語)	家庭基礎	CROSSⅢ	HSⅢ	HR																

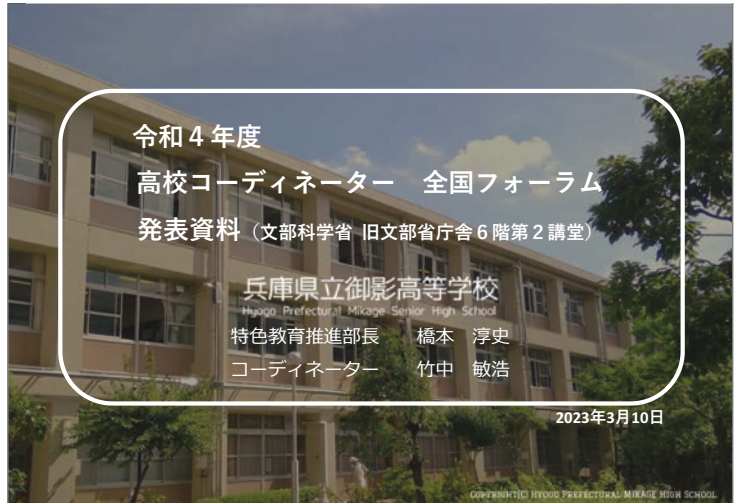
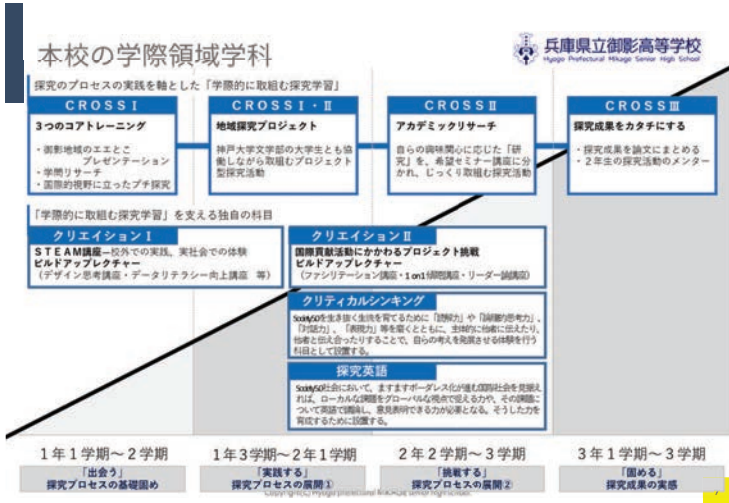
※00: e604日 倫理、政治・経済、世界文化(学校設定)、日本文化(学校設定)、数学探究(学校設定)
● 選択科目・専任教員等は、変更される可能性があります。

■ 学科独自の実施科目

- CROSSⅠⅡⅢ
- クリエイションⅠⅡ
- 探究英語
- クリティカルシンキング

Copyright(C) Hyogo prefectural Mikage senior high school.

6



自己紹介

特色教育推進部長 橋本 淳史

- 総合人文コース
- 総合的な探究の時間
- 文部科学省 指定事業
- 兵庫県教委 指定事業

コーディネーター 竹中 敏浩

- 高校におけるコーディネート
- 協働体制におけるコーディネート

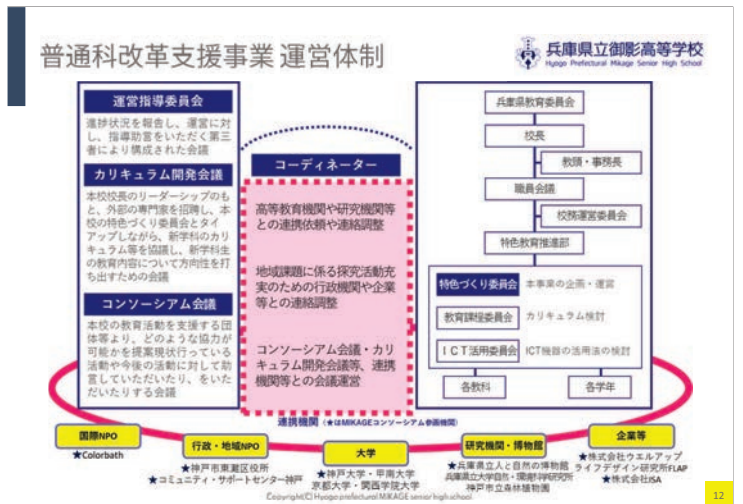
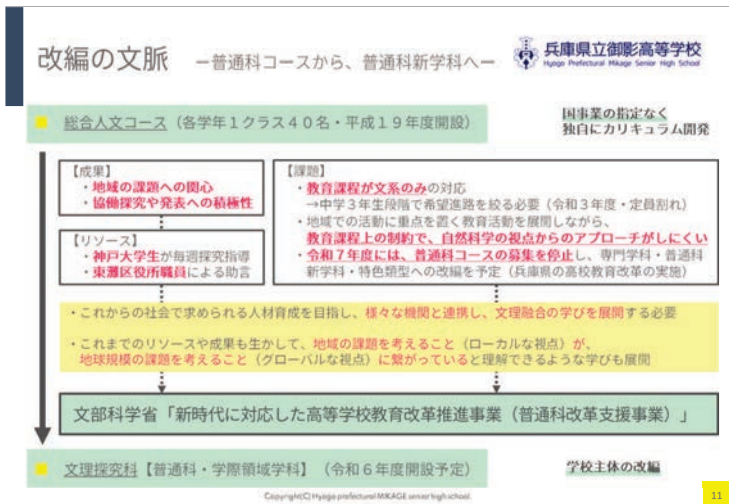
学校概要

創立80周年を迎えた伝統校
神戸市の中心、神戸三宮駅から徒歩15分で本校正門にアクセス可能な交通至便な位置にある伝統校。地域からの信頼も厚く、3万人を超える卒業生を輩出し、令和3年度には創立80周年を迎えた。平成19年度には総合人文コースを創設。設置から15年が経過し、次年度入学生から新たに理系進路へも対応可能なカリキュラムとなる。

国公立大学現役合格者約4割
何事にも真面目に取り組む生徒が多く、10～15年ほど前に比べると、近年は国公立大学に現役で合格する生徒数が倍増。いよいよ現役で国公立大学に合格する生徒が全卒業生の約4割程度に。特に、長期休業中の補習や、国公立大学の2次試験対策、小論文・面接対策等、本校の教員が一丸となり、生徒の進路実現の支援にあたっている。

勉強も、行事も、部活も
令和2年度卒業生を対象とした学校生活に関するアンケートで、本校での生活の満足度は95%との結果が得られた。勉強にも、行事にも、そして、部活動にも熱心な生徒が多く、日々の高校生活は大変充実している。クラスや部活動で得られた友人とともに目標を迎える雰囲気も、いつでも質問に応じてくれる経験豊富な教員の雰囲気も高評価。

みかげ魅力化プロジェクト
半世紀続いた御影高校伝統の制服が、多様性を鑑み、令和5年度入学生から変更となる。また、生徒からも要望があったトイレの改修工事を現在実施しており、ホームルームに近いトイレはすべて改修され、令和4年度中に最新の設備が整う。そして、令和4年度には、文部科学省の普通科改革支援事業に指定され、新たな取り組みにも挑戦。



普通科改革支援事業 チームスタッフ



コーディネーター



兵庫県立人と自然の博物館幹任研究員。専門は地学。県立三木東高校・北摂三田高校長を歴任し、定年退職後、同博物館専門員を経て現職。博物館の生涯学習講座や大学・研究機関等とのコーディネーター業務を担当。武庫川女子大学薬学部の非常勤講師も兼任。

担当コーディネーター機能(*)と具体的な仕事

- 学校におけるコーディネーター機能**
 - ・ビルドアッププロジェクトの計画、運営
- 協働体制におけるコーディネーター機能**
 - ・ネットの会議のコーディネーター、ファシリテーション
 - ・本事業や特色づくり委員会等での積極的なコミットメント



合同会社コブネ共同代表。神戸・奈良・鳥根を拠点とし、地域プロジェクトの企画運営を担う。近年は神戸市西区のイベントの企画運営、兵庫県立大学通信の編集、奈良県宇陀市の地域プロジェクト「NCL奥大和」のコーディネーターを担当。

- 学校におけるコーディネーター機能**
 - ・クリエイション推進 (TEAM推進) のコーディネーター
 - ・クリエイション推進業内作成
- ※本事業に関わるメンバーの連絡ツールの整備、運用

*1「高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」報告書（文部科学省,2019）

スタッフ



校長 森本 成己



教頭 野原 由里子



教頭 橋口 徹



特色教育推進部

部長 橋本

副部長 船川

担当 真下

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

13

本校のコーディネーターの勤務実態



- 県教委から「週1日の非常勤」・「カリキュラム開発等専門家」としての委嘱
→両コーディネーターは別の仕事との兼務。週1回の出勤。年間280時間（週あたり7時間程度）の勤務。
- 担当教員との打合せ
→週ごとに担当教員と打合せをし、出張等の予定も含め、あらかじめ勤務計画を提出。
→会議や講座に関するイメージは、可能な限り言語化・可視化し、齟齬がないように双方とも努めている。
→県教委からの連絡は、本校管理職から担当教員に伝えられた後、担当教員から両コーディネーターへ。
- 情報共有の工夫
→県コーディネーターからの提案で、slackを用いることとし、打合せ内容、進捗状況や勤務状況を共有。
- 職場環境と、校内にもたらされているよい影響
→職員室に両コーディネーターの個人席と、専用プリンターを設置。勤務日に実施する諸会議にも出席。
→さまざまな経験をもとに、関連する事業だけでなく、校内の動きについても相談し、提案いただく。
→既存の在り方に固執することなく、フラットな意見がいただけるので、新たな取組導入のきっかけに。

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

14

本校のコーディネーターの勤務実態



■ 特にご活躍いただいた場面

■竹中コーディネーター

会議におけるファシリテーション
→教員の立場からではない議事進行
既存の概念を超えた意見の引き出し

■東コーディネーター

教員ではつなげない企業との連携達成
→教員の誰もが「無理だろう」と考えていた企業との連携
柔軟な発想に基づく授業計画・指導案づくり

■ 今後の課題

■竹中コーディネーター

急速発生する事態への対応（常勤化検討を）
新たな事業づくり（国際交流・校外発信…）
次代のコーディネーターへの継承

■東コーディネーター

校内職員との連絡法（担当教員の授業時間割調整）
手当の在り方の検討（時間労働→価値労働）
講座講師と教員との振り返りに関する意見交換実施

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

15

竹中コーディネーターより



- 上手くいった場面
 - ・退職校長でもあり、校内に既知の先生が多く、円滑に意思疎通
 - ・博物館で高校・大学との博学連携に携わってきたため、大学の考えも理解した上で、コーディネート
 - ・（個人的には）これまで携わってきた自然科学系の課題研究に、社会科学系・文学系が加わった探究活動をどのように指導すべきか、多くの示唆をもらっている
- 今後の課題
 - ・生徒の立場に立って、探究活動をどのように「学際」として形成するか
→この学科としての本質につながり、他の学科との差別化にもつながると考える

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

16

教員の役割

—コーディネーターとの「すみ分け」—



教員の役割



コーディネーター(非常勤)の役割



事業全体のデザイン
ゴールに向けた事業マネジメント
→プレイヤーが活躍できる場をつくる

割当てられた個別案件のデザイン
プレイヤーとして協働体制を構築、講座や会議を計画
→学校既存の価値観にとらわれず、独自性も大切に

授業や講座のまとめ 一生涯に学びの実感を—
→授業や講座の意味付けをし、学びの連貫性に気づかせる

「外」の空気を、学校の中に吹き込ませる
→生徒だけでなく教員にも社会のありようを実感をこめて伝える

プレイヤーの補助
→非常勤コーディネーターのカバー業務

マネージャーの補佐（壁打ち相手）
→マネージャーと事業を創発・共創し合う関係に

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

17



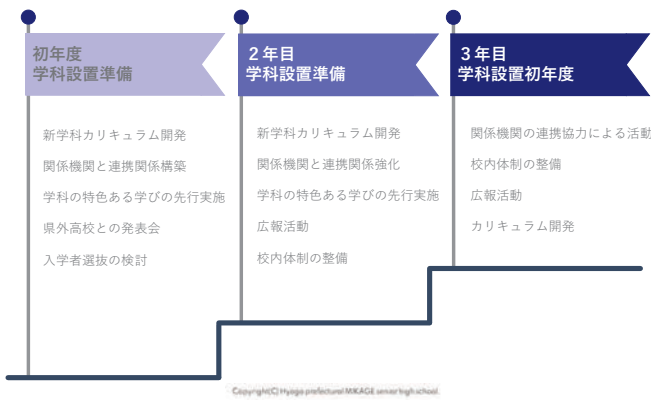
新時代に対応した高等学校教育改革推進事業
普通科改革支援事業 進捗報告資料【抜粋】
(オンライン開催)

兵庫県立御影高等学校
Hyogo Prefectural Mikage Senior High School
特色教育推進部長 橋本 淳史

2023年2月27日

COPYRIGHTED HYOGO PREFECTURAL MIKAGE HIGH SCHOOL

三ヶ年実施計画



今年度の取組

新学科カリキュラム開発や本事業運営のための仕組み・チームづくりをし、動き出す

- 新学科カリキュラム開発
→3つの会議
- 関係機関と連携関係構築
→クリエイション講座
- 学科の特色ある学びの先行実施
→クリエイション講座・生徒の探究発表会
- 県外高校との発表会
→岡山学芸館高校との課題研究交流発表会
- 入学者選抜の検討
→総合人文コース 学力検査（英語・数学）、実技検査（英語リスニング）、小論文、面接からの変更を検討【今後の課題】



普通科改革支援事業 チームスタッフ

コーディネーター



竹中 敏浩氏

兵庫県立人と自然の博物館社会教育推進専門員。専門は地学。県立三木東高校・北摂三田高校長を歴任し、定年退職後、同博物館特任研究員を経て現職。博物館の生涯学習講座や大学・研究機関等とのコーディネーター業務を担当。武庫川女子大学薬学部の非常勤講師も兼任。

- ・3つの会議のコーディネーター、ファシリテーション
- ・ビルドアッププロジェクトの計画、運営
- ・本事業や特色づくり委員会等での積極的なコミットメント



東 善仁氏

合同会社コブネ共同代表。神戸・奈良・鳥根を拠点とし、地域プロジェクトの企画運営を担う。近年は神戸市西区のイベントの企画運営、兵庫県立大学通信の編集、奈良県宇陀市の地域プロジェクト「NCL奥大和」のコーディネーターを担当。

- ・クリエイション講座（STEAM講座）のコーディネーター
- ・クリエイション講座案内文作成
- ・本事業に関わるメンバーの連絡ツールの整備、運用

スタッフ



校長 森本 成己



教頭 野原 由里子

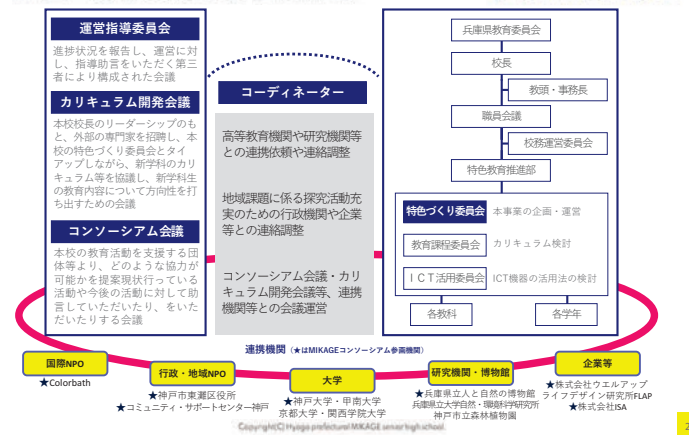


教頭 橋口 敬



特色教育推進部
部長 橋本 剛
副部長 飯川 担当 真下

普通科改革支援事業 運営体制



実践成果①

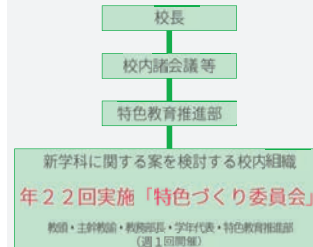
事業指定初年度で順調に議論・検討が進行
→取組の枠組みで2年先取りで先行実施する授業を実施

- 本事業において設置した「運営指導委員会」「カリキュラム開発会議」「コンソーシアム会議」
→コーディネーターが議事進行を担当・新学科に向けて新たな視野を与えていただけの場
→「特色づくり委員会」も含めて、忌憚なく意見が言い合えたり、協力を共有したりする場を設定

本事業での新たな組織

- 本事業に関する指導・助言
年3回実施「運営指導委員会」
多様な経験を有する委員より新たな可能性を示唆
- 新学科のカリキュラムに関する検討
年7回実施「カリキュラム開発会議」
新たなカリキュラムについて研究者の立場から助言
- 支援団体との意見交換
年1回実施「コンソーシアム会議」
どのような協力が可能かを提案・活動に対する助言

校内組織

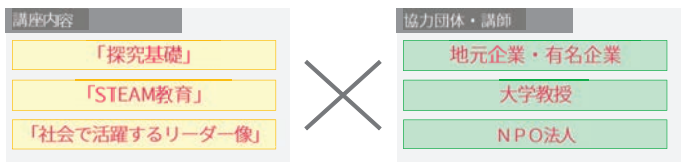


実践成果②

コーディネーターを中心とした計画・調整・運営
→事業指定初年度にして11講座を開発・実施

- 新学科の学びの先行実施「クリエイション講座」
→年11回実施（延べ16日・172名参加）

単一日程8講座・複数日程3講座
協力団体から実施の提案もあった



「クリエイション講座」に参加し、どのような力を磨きましたか。（実施後、受講生徒アンケート結果より）
ゴールイメージとして、「主体性・協調性・課題解決能力・言語表現スキル」のいずれかを強く講座展開を講師に依頼しており、ほぼすべての生徒が各講座の講師がイメージした通りの学びができています。さらに、複数回答を可としているため、上記以外にも、「物事を多面的に捉える力」「自己に対する理解」「発想力」「大きなゴールを小さく分けて考えること、段取り力、計画力」「立ち止まる壁に楽しんで挑戦する力」といった回答等、子どもたちの主体的な気づきが多々あったことも、講座の成果としてあげられる。
→「学校で学んだ学び（教員が組み立てる「授業」としての学び）」以外の学びの必要性 → 社会に開かれた教育課程の必要性

実践成果③ 同年齢・異年齢の「高校生」の発表に触れる →自らの探究活動へのさらなる動機付け

- 学年の垣根を超えた探究発表会
→緊急しながら発表する2年生・意欲的に聴講する1年生の双方にとって、大きな成果が得られる場
- 県域を超えた高等学校との探究交流発表会
→自ら実施した探究活動の成果を体温を感じる距離で発表することによって、生徒の学びを深めるだけでなく、発表スキルの向上につながったり、さらなる探究活動の動機付けになったりしている
- シンポジウムや、コンソーシアム団体の方を招いたビルドアップレクチャーの実施
→全校生徒を巻き込んだパネルディスカッションや、生徒の将来像を描かせるきっかけとなる講義の実施
- 大学等での校外探究発表会
→探究活動のコミュニティを「越境」する契機としつつ、より広い「社会」を意識する
- 視察訪問への対応
→今年度全国から10を超える団体等からの視察をいただき、有意義な意見交換が実施できている。自校の取組の独自性を確認しつつ、他校の実践例をもとに、自校の取組をより深めるきっかけになっている。

Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

25

クリエイション講座 A



Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

26

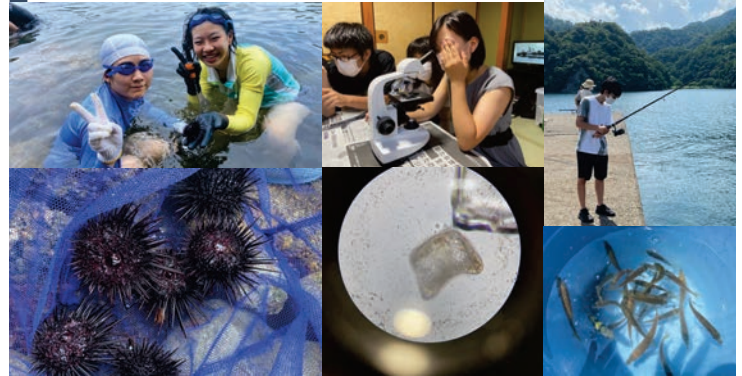
クリエイション講座 B



Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

27

クリエイション講座 C



Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

28

クリエイション講座 D



Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

29

クリエイション講座 E



Copyright© Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

30

クリエイション講座 F



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

31

クリエイション講座 G



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

32

クリエイション講座 H



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

33

クリエイション講座 I



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

34

クリエイション講座 J



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

35

クリエイション講座 K



Copyright(C) Hyogo prefectural MKAGE senior high school.

36

II 研究開発の概要（事業実施計画書(抄)・事業結果説明書(抄)）

①事業の実施計画（所属等は令和4年3月31日現在）

1 事業の概要

（1）学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の 種類	設置（予定）年度	決定
公立	兵庫県立御影高等学校 (ひょうごけんりつみかげこうとうがっこう)	学際領域 学科	令和6年度	○

（2）学校の詳細

課程別	新学科の収容定員	学年制・単位制の別	学科の名称 (決定している場合)
全日制	40人×3学年=120人	学年制	

（3）当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

- 普通科総合人文コースの学びを発展させて学際領域学科を設置
平成19年に設置した総合人文コースを改編して学際領域学科（仮称：文理探究学科）を設置する。
総合人文コースの人文科学・社会科学の学びを発展させ、自然科学の学びも取り込んだ「文理をクロスする学び」として学際的テーマでの探究活動を中心軸とした学びを展開する。
- SDGsをテーマとする文理融合の探究活動を体系的に実施【4（1）参照】
 - 〔1年〕『文理探究基礎』……探究活動の基礎固め
SDGs ミニコミ（mini communication）誌づくり、テーマ別プレゼンテーション、SDGs探究プロジェクト入門
 - 〔2年〕『文理探究実践』……スパイラルに探究活動を実践（探究のサイクルを繰り返しながら深めていく主体的で課題解決的な学び）
SDGs探究プロジェクト実践、アカデミックリサーチ
 - 〔3年〕『文理探究発展』……探究活動のまとめ
論文作成、教科横断型オムニバス授業（多角的な学び）、2年生の探究活動のメンター制（後輩に的確な助言ができる協働的な学び）
- Win-Winの関係で探究活動を支援する連携機関「MIKAGE コンソーシアム」
総合人文コースの探究活動において、神戸大学文学部や神戸市東灘区との連携においては、双方にメリットのあるWin-Winの連携関係を構築することで、今までの協働活動により良好な連携関係からさらなる発展を目指す。【4（2）参照】
新学科設置の際にも、学際領域学部である神戸大学国際人間科学部をはじめ様々な機関と双方にメリットのある連携として、生徒を中心に据えた学びの共創の形態となるように「MIKAGE コンソーシアム」を構築する。
- 学科生全員履修の先進的な学びを取り入れた学校設定科目設置【4（1）参照】
『クリエイションI』（1年1単位）
デザイン思考講座、STEAM教育講座、データリテラシー向上講座

『クリエイションⅡ』（2年1単位）

外国人留学生とのワークショップ（エンパワーメントプログラム）、ファシリテーション講座、グローバルリーダー論講座、ローカルリーダー論講座

『クリティカルシンキング』（2年2単位、3年2単位）

『探究英語』（2年2単位、3年2単位）

- 国際的な取組や企業の取組等を学ぶ機会を積極的に提供
学際的課題を国内外の広い視野で考えるため、国際 NPO による途上国支援や SDGs に積極的に取組む企業の取組を学ぶ機会を積極的に提供する。
- 独自の特色ある学校行事の実施
ことばのカシンポジウム（各界で活躍している卒業生の講演）、フィールドワーク（県外高校生との探究活動交流会）、御影セッション（学年を超えた学び合い）等

2 事業の目的等

（1）学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要性

- 本校の総合人文コースの成果と課題

本校の総合人文コースは、神戸大学文学部や神戸市東灘区役所との Win-Win の関係での連携【4(2)参照】による、地域の課題をテーマとする探究活動を特色として行ってきた。地域の課題に関心を持つことや、グループで協働して探究しその結果を発表する活動に積極的に取組むという点では、コースは十分成果を上げている。

しかし、教育課程が文系のみへの対応であり、中学3年生段階で希望進路を絞る必要があるように捉えられるためか、定員（40人）の100%を推薦で募集し、出願者数が定員に満たない事態が発生（令和3年度入学生）したことに加え、地域での活動に重点を置く教育活動を展開しながら、教育課程上の制約で、自然科学の視点からのアプローチがしにくい現コースの対応では、限界が見えつつあった。一方、広い視野に立てば、Society5.0の時代の到来に伴い、AIが進展する予測不能な今後の社会に対し、SDGsの実現に向けた地球温暖化や自然災害、食料不足問題、人口問題、貧困、感染症など、地球規模の課題を解決するためには、文系・理系を超えた幅広い視点、ものの考え方ができる人材、溢れる情報を分析・整理できる力を備えた人材の育成が必要であると考えられる。そこで、文理を超えた視点で考えることや、地域の課題から地球規模の課題に視点を広げるといった点は、現コースの大きな課題であると考えられた。

また、この課題は、昨年度コースの2年生を対象に実施した、三菱UFJリサーチ&コンサルティングによる「高校魅力化評価システム」のアンケート結果でも明確な形で示された。

〔質問項目〕	〔当てはまると答えた生徒の割合〕
・グループで協力しながら学習や調べものを行う	90.2%
・活動、学習のまとめを発表する	91.2%
・地域の課題の解決方法について考える	100.0%
・将来の <u>国や地球の担い手</u> として、 <u>積極的に政策決定に関わりたい</u>	44.1%
・ <u>国際社会の課題解決</u> に貢献したい	67.6%
・ <u>客観的な証拠</u> に基づき考え、判断する <u>科学的視点から</u> 課題解決にあたることのできる	50.0%

- 総合人文コースを学際領域学科に改編する必要性
こうした本校の総合人文コースにおける課題を解決し、これからの社会で求められる人材育成を目指すためには、学際領域学科に改編し、様々な機関と連携した文理融合の学びを展開することが必要である。

また、コースの学びを生かして、地域の課題を考えること（ローカルな視点）が地球規模の課題を考えること（グローバルな視点）に繋がっていると理解できるような学びも展開したい。

- 主体的な学びを継続させるための大学進学を目指す普通科の先進的モデルを目指す

本校は神戸市の都市部である東灘区にあり、生徒のほぼ100%が大学入試を目指す普通科高校である。全国の多くの普通科高校がそうであるように、大学入試を意識すれば、受験科目に対応した学びに力を入れがちとなる。

こうした中、生徒・保護者の学びに対する意識改革として、本校職員による講義一聴講形式だけにとどまらない幅広い学びを行い、内発的な動機・意欲を高めることにより、学際領域学科を設置し主体的な学びを継続させるための大学進学を目指す、全国にある都市部の公立普通科高校における先進的な学びを展開していきたい。

（２）学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

- スクールミッションおよびスクールポリシーで示した育成を目指す4つの力

令和3年度に本校で作成したスクールミッションおよびスクールポリシーにおいて、以下の4つの力を、グラデュエーションポリシー（本校生徒に対して育成を目指す資質・能力）としている。

『主体性』（自ら課題を見つける力・主体的に取り組む力・継続的に取り組む力）

未来の自分を見据え、自ら問いを立て、主体的に最後まで粘り強く取り組むことができる生徒

『協働性』（多様な価値観を受容する力・協働的に取り組む力・リーダーシップ）

価値観の多様性を認め、誰とでも力を合わせて協働し、社会のリーダーとして活躍できる生徒

『課題解決能力』（正確に事象を把握し分析する力・課題の解決策を見出す力）

現状について正確に把握・分析し、見つけた課題を正しい理解や情報をもとに解決できる生徒

『言語表現スキル』（熱意・好奇心・挑戦しようとする力・発信力）

力強い一歩を、情熱と知的好奇心をもって踏み出し、失敗を恐れずに挑戦・発信できる生徒

- 学際領域学科に必要な力は4つの力に加えて『多様な認識・高次の認識ができる力』

上記で示した4つの力は、「非認知能力」と言われるものであるが、学際領域学科を設置するにあたっては、これらの4つの力に加えて、「認知能力」（数値化できる知的な能力）も重要であるとする。そこで、学際領域学科において育成したい力としては、上記4つの力に加え、文理融合の学びを通して『多様な認識・高次の認識ができる力』を加え、これら5つの力の育成を目指す。

そのためには、探究活動の現状を教科の授業担当者とも共有する場面を設けるなど、探究活動と教科の授業との関わりを意識することに加え、教科の授業に限らず、探究活動や課外活動を含めた教育活動のさまざまな場面において、生徒達がグループでディスカッションしたり、初対面の方に対して自らの研究を伝えたりする活動を増やすなどの工夫をしていく。そうすることで、社会の持続可能性に関わる学際的で複雑な課題に対して、各々の知識に加え、「多様な認識」や自らの知識をもとに、「主体性」「協働性」「課題解決能力」、そして、「言語表現スキル」を生かして、その時にふさわしい適切な解を探し求めることができるような生徒を育てたい。

- 総合人文コースを改編して設置する学際領域学科の目標

こうした中、総合人文コースを改編して設置する学際領域学科の目標を、次のように定める。

大学や行政・企業など様々な機関とのコラボレーションによる探究を中心とした文理融合の学びを通して、より広い価値を創造し、多様な認識や高次の認識ができる力を持って、学際的

課題の解決に向けて、将来社会で活躍できるリーダーシップをもったクリエイティブな人材を育成する。

なお、文理融合の学びを生かすために、教育課程は生徒の主体的な学びを継続させるための多面的な編成を行うとともに、コーディネーターを中心に創設する「MIKAGE コンソーシアム」の協力のもと、生徒に将来のロールモデルとなるような社会で活躍する方々を招聘した授業を行い、生徒により具体的な将来像を思い描かせ、学び続けた後の「自分」を意識させることにより、主体的に学び続ける生徒を育てていきたいと考えている。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。

具体的には、「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、昨年度末（令和 4 年 3 月）策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとしている。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの内、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数次にわたって調整を進めてきた経緯があることから、2校を申請することとなった。

なお、普通科新学科の設置時期は、令和 4 年度中に入試方法を含めた検討を行った上で公表し、1年間の周知期間を設けることから、令和 6 年度としている。

【事業の実施体制】

- ①「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」の設置
 - ・普通科新学科の設置を目指す高等学校（10 校程度）を構成員とする「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
 - ・定期的に会議を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、課題や解決策等を共有
 - ・本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与
- ②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画
 - ・本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画
- ③本事業指定校に対する県独自の支援
 - ・探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
 - ・担当指導主事による継続的な指導助言
- ④普通科新学科に関する周知

- ・普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP等の充実）

【事業の管理方法】

- ①本事業指定期間中
 - ・運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
 - ・「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」における報告の義務化
- ②本事業指定終了後
 - ・普通科新学科設置後の成果報告を義務化
 - ・本事業終了後の人的配置の検討

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

- ①運営指導委員会での検証
 - ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導
 - ・外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
 - ・大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価
- ②コンソーシアムでの検証
 - ・高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
 - ・コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
 - ・校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価
- ③「普通科新学科設置準備委員会（仮称）」での検証
 - ・普通科新学科設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
 - ・指導主事による各校の成果に関する相対的な評価
- ④兵庫県教育基本計画にもとづく検証
 - ・「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

- ①スクール・ポリシーの適切な設定
 - ・生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
 - ・資質・能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
 - ・入学時に期待される生徒像の明確化
- ②育成すべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定
 - ・生徒の目標に対する到達度（ポートフォリオ、ルーブリック等）
 - ・生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
 - ・生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度
- ③3年間を通じた体系的なカリキュラムの設定
 - ・教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
 - ・学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定
- ④ICT等を活用した授業設定
 - ・BYODをはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
 - ・急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築
- ⑤コーディネーターの有効な活用方法の検証

- ・コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
- ・コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
- ・コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
- ・コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標(例)】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第3期ひょうご教育創造プラン指標】

区分	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	最終目標
目標	82%	83%	84%	85%	86%
実績(見込)	81.0%	82.5%	79.3%	(85%)	【R5年度】

(3) 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置検討委員会の設置

- ・普通科新学科設置に向けた準備委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回以上開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域NPO等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム運営委員会の開催

- ・コンソーシアム連絡会を定期的で開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
- ・探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びやICTを活用した海外との交流の機会を提供
- ・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
- ・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
- ・普通科専門学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
- ・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県SSH指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援等を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
- ・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

(4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

[管理機関における研究開発の実績]

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神戸 尼崎小田 宝塚北 三田祥雲館 明石北 加古川東 小野 龍野 豊岡	平成16～令和4年度 平成17～令和元年度 令和元～5年度 平成21～令和3年度 平成22～令和元年度 平成18～令和3年度 令和元～5年度 平成25～令和4年度 平成18～令和3年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫路西 兵庫 伊丹 国際	平成26～平成30年度 平成27～令和元年度 平成27～令和元年度 平成27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
生野 柏原 村岡	令和元～3年度 令和元～3年度 令和2～4年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。

[申請校（兵庫県立御影高等学校）における研究開発の実績]

- ひょうごスーパーハイスクール指定（平成30・令和元年度）
本校の研究テーマ：持続可能な国際社会をつくるリーダー育成
- 三菱みらい育成財団助成事業指定（令和3～5年度）
カテゴリ1「心のエンジンを駆動させるプログラム」で指定
本校のプログラム名
伸ばせ！『みかげ力』外部連携を活かした生涯学び続ける生徒を育てる探究活動
- 近年の課題研究などの外部発表等での受賞
関西学院大学リサーチフェア 2018 実行委員会特別賞
関西学院大学リサーチフェア 2019 奨励賞

関西学院大学リサーチフェア 2021 実行委員会特別賞
「地域×おもちゃー想いをつなぐおもちゃのバトン」
(家にある使わなくなったおもちゃを保育所に寄付しようという取組)
甲南大学リサーチフェスタ 2021 クリエイティブテーマ賞
「ナラ枯れに迫る」
(神戸市北区の再度公園のナラ枯れの現状調査)
神戸市東灘区 青少年を地域でたたえる賞
課題研究食品ロス研究チーム
(廃棄する野菜を使ったスープレシピを考案。神戸市作成のレシピ集に掲載)

(5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
関西国際大学国際コミュニケーション学部	准教授 前田 哲男	専門は英語教授法。兵庫県教育委員会勤務を経て、県立生野高校・三木高校・小野高校の校長を歴任。令和3年4月から現職。令和4年4月から同大学高大連携センター長
神戸大学文学部	准教授 菊地 真	専門は地理学。現在は災害と文化財保存を研究。本校と神戸大学文学部の高大連携（神戸大学生が本校生徒の課題研究を指導）の担当者も経験
甲南大学フロンティアサイエンス学部	教授 甲元 一也	専門は生命科学。現在は産学連携によるバイオテクノロジーを研究。SSH校等での特別講義も実施
NPO 法人 Colorbath	ディレクター 椎木 睦美	JICA 青年海外協力隊員としてアフリカ（マウイ）に赴任。現在は「途上国と日本の共成長」をテーマに国際的なWeb交流事業等を実施。令和2年度に世界経済フォーラム（ダボス会議）Global Shapers の日本代表に選出
(株) マルヤナギ小倉屋	副社長 柳本 勇次	神戸市東灘区にある佃煮等を製造する食品メーカー。食品ロス問題や有機物を含んだ排水を利用した最先端の発電にも取り組んでいる。
神戸市東灘区まちづくり課	課長 永野 喜久	本校と神戸市東灘区が連携協定を結び、まちづくり課の若手職員が本校の地域課題研究を助言
兵庫県教育委員会高校教育課	課長 新谷 浩一	設置者代表

(6) 運営指導委員会が取り組む内容

校長経験のある大学教授、文系と理系の専門性のある大学教授、国際 NPO、企業、地元行政機関等、学際領域学科設置に向け専門的な指導・助言が可能な方に委員を委嘱する。
年間3回程度運営委員会を開催し、各委員の専門性を活かして、令和4・5年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発、校内の体制整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報等の進捗状況、中学校等への広報活動等について助言を行う。令和6年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、カリキュラムの実施や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。

4 学際領域学科又は地域社会学科における取組

(1) 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容(学校設定教科・科目の詳細は別添1「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。)

- 「総合的な探究の時間」による探究活動(学科生全員履修、3年間で4単位)
 - ◇ 『文理探究基礎』(1年1単位)：探究の基礎作りと2年の探究のテーマ設定を行う。
 - ・ SDGs ミニコミ誌づくり……SDGsをテーマに地域の課題についてのミニコミ誌を作成
 - ・ テーマプレゼンテーション……決められたテーマについて自分たちの提案を作成
 - ・ SDGs 探究プロジェクト入門……2年1学期に行う探究プロジェクトのテーマ設定
 - ◇ 『文理探究実践』(2年2単位)：探究活動(課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現)をスパイラルに繰り返し、学びを深める。
 - ・ SDGs 探究プロジェクト実践：神戸大学と協働して課題解決策を見つける探究活動
 - ・ アカデミックリサーチ：関係機関と連携して文理融合の学際的テーマについて探究
 - ◇ 『文理探究発展』(3年1単位)：探究活動のまとめと多角的視点の学びを行う。
 - ・ 論文作成：1・2年の探究活動の内容を論文としてまとめる。
 - ・ 教科横断型オムニバス授業：教科横断的で学際的なテーマについて複数の教員が専門性を生かしたりレー講義を行い、多角的な視点から学ぶ。
 - ・ 2年生の探究活動のメンター：2年生の探究活動にアドバイザーとして参加
- 特色ある学校設定教科・科目(学科生全員履修、3年間で8単位)

学校設定教科『クリエイション』を置き、その中に以下の学校設定科目を設置する

 - ◇ 『クリエイションⅠ』(1年1単位、長期休業中等に実施)
 - ・ デザイン思考講座……未知の課題に対して最適な解決を図るための思考法を学ぶ
 - ・ STEAM教育講座……外部の機関と連携して校外の実習等も交えた教科横断型の講座
 - ・ データリテラシー向上講座……データを正しく読み取り分析・活用するための講座
 - ◇ 『クリエイションⅡ』(2年1単位、長期休業中等に実施)
 - ・ 外国人留学生とのワークショップ……外国人留学生と英語でディスカッションを行う中でグローバルリーダーとしての素養を学ぶ。
 - ・ ファシリテーション講座……グループ活動のファシリテートの手法を学ぶ。
 - ・ グローバルリーダー論講座……地球規模の課題や国際的な活動を学ぶ。
 - ・ ローカルリーダー論講座……地域活動の取組や課題について学ぶ。
 - ◇ 『クリティカルシンキングA』『クリティカルシンキングB』(2・3年各2単位)

世相や文化等に関する様々な文章を客観的かつ分析的に読み解き、論理的な正しさや物事の妥当性を含めて考える。また、振り返り活動を通してメタ認知力を高める。
 - ◇ 『探究英語A』『探究英語B』(2・3年各2単位)

英語によるニュースや新聞等を活用して、社会的な話題や国際的な話題について、ディベートやディスカッションを行う。
- データサイエンスに関する学び(1年『情報Ⅰ』を中心に学科生全員が学ぶ)

『情報Ⅰ』や数学・理科の授業等で、課題研究のために必要な、エクセルの操作・データの視覚化等のデータ処理や、データリテラシー等について学ぶ。

(2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

本校の総合人文コースは、設置当初より高大連携講座や探究活動に取組んできた。そうした中で、

本校独自の Win-Win の連携関係を構築しているのが強みである。

〔双方にとってメリットのある Win-Win の連携〕

- 神戸大学文学部との連携（コース設置当初から 15 年間）
教員を希望する学生が本校の探究活動を支援（大学の教職講座にも位置づけ）
- 神戸市東灘区との連携協定（平成 31 年 3 月）
東灘区若手職員が本校生の地域探究活動を助言（区役所若手職員の研鑽の場）

総合人文コースを学際領域学科に改編するにあたり、学生が身近な環境から地球環境に至るまで文理融合型で学んでいる神戸大学国際人間科学部環境共生学科や、自然環境について学際的に学ぶことのできる県立人と自然の博物館（兵庫県立自然・環境科学研究所）等と、新たに Win-Win の関係での連携関係の構築を目指したい。

また、国際的な学びのために国際 NPO の Colorbath や (株) ISA と、地域課題の学びのために NPO コミュニティ・サポートセンター神戸や (株) ウエルアップと、コンソーシアム（「MIKAGE コンソーシアム」）を構築する。

コンソーシアム以外にも、リサーチフェアやリサーチフェスタを開催する関西学院大学や甲南大学、自然環境の研究機関としての神戸市立森林植物園等とも連携の輪を広げていく。さらに、生徒がよい意味で刺激を受けるため、県外の高校（岡山学芸館高校）との連携による合同研究発表会の開催等も実施する予定である。

（３）コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
神戸大学文学部	学部長 長坂 一郎	15 年間本校と高大連携講座を実施
神戸大学国際人間科学部環境共生学科	教授 伊藤 真之	本校との学際領域における高大連携講座を実施予定（令和 4 年度～）
県立人と自然の博物館(兵庫県立大学自然・環境科学研究所)	次長 石田 弘明	本校の環境科学部と連携して六甲山のキノコ展を開催
神戸市東灘区役所	区長 植松 賢治	本校の地域探究活動を助言
国際 NPO Colorbath	代表 吉川 雄介	本校と海外との Web 交流を実施
株式会社 I S A	社長 倉橋 勝	本校生徒対象に国内大学の留学生とのエンパワメント研修を実施
NPO コミュニティ・サポートセンター神戸	代表 中村 順子	本校で地域交流講座を実施
株式会社ウエルアップ	社長 尾花 弘教	住環境の提案をしている企業。SDGs に向けた地域貢献の取組について本校で特別講義を実施
兵庫県教育委員会高校教育課	課長 新谷 浩一	

（４）配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
兵庫県立人と自然の博物館主任専門員（令和 4 年 3 月まで）	竹中 敏浩
合同会社ユブネ共同代表	東 善仁

当該者の主な実績

竹中氏：専門：地学。県立神戸高校教頭、三木東高校・北摂三田高校校長を歴任し、定年退職後現職（5年目）。神戸高校ではSSHを経験。現在は博物館の生涯学習講座や高等教育機関・研究機関等と連携したイベント等実施に向けたコーディネーター業務を行っている。武庫川女子大学薬学部の非常勤講師も兼任されている。

東氏：合同会社ユブネは、地域や企業・学校などのプロジェクトの企画・編集や運営を担っている。最近の実績としては、兵庫県立大学通信の編集や神戸市塩屋商店街事務局のプロジェクトマネジメントの仕事をしている。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

新たな学際領域学科の設置に向けては、これまでの総合人文コースにおける地域の課題について探究活動を行う取組を充実させつつ、それに加えて、学際的な学びを充実させるための新たな連携機関を開拓してコンソーシアムを構築するとともに、校内のカリキュラム開発や体制整備、学科内容の周知・広報の検討等も行っていく必要がある。

そこで、上記2人にコーディネーターを依頼し、それぞれの強みを生かしてコーディネーターの業務を分担して頂く予定である。

竹中氏：理系及び学際的学びを新たに行うための高等教育機関や研究機関等との連携依頼や連絡調整、校内の組織体制整備

東氏：地域課題についての探究活動充実のための行政機関や企業等との連絡調整、学科内容の周知・広報の検討

上記2人は、校務分掌上で「特色教育推進部」及び「広報部」に所属してもらう。また、令和4年度の勤務形態は、それぞれ1日7時間で年間40日程度の勤務を予定している。令和5年度からは、常勤として雇用することも検討する。

なお、カリキュラム開発並びに生徒の変容をみる評価方法については、コーディネーターとは別に、専門性を有する以下の方にカリキュラム開発に係る助言をお願いし、年間数回のカリキュラム開発会議を開催して助言を受ける。

若松大輔氏 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程に在籍

令和4年4月から弘前大学教育学部助教

鎌田祥輝氏 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程に在籍

（5）学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

学際領域学科の設置は令和6年度なので、以下のような周知広報活動を令和5年度中心に行う。

- 学科の教育内容をまとめた広報用リーフレットの作成

新たに設置する学科の教育課程や特色ある行事等をまとめた広報用リーフレットを作成し、学区内の中学校(中学生)に配布する。

- 中学3年生及び保護者対象のオープンハイスクールの開催（年間5回）

第1回 5月 学校全体の説明会。学校生活の様子については在校生が説明

第2回 7月 学科のみの説明会。教育課程等の説明だけでなく本校生がファシリテーターとなって参加者のワークショップを実施

第3回 8月 学校全体の説明会。体験授業を実施。

第4回 11月 学校全体の説明会。

第5回 3月 課題研究発表会の様子の見学（中学2年生対象）

※新型コロナの状況によっては、オンラインで開催

- 本校ホームページや県教育委員会ホームページでの広報活動
本校のホームページには、広報用リーフレットや学校紹介動画を常時アップする。また、ホームページの中にある学校ブログでは、日々の学校行事の様子（写真とコメント）等をアップしている。県教育委員会のホームページでも、各県立高校の特色がアップされている。
- 本校の学校行事での広報活動
文化祭（6月）の見学（中学生や保護者）、公開授業（9月、中学3年生保護者）
- 神戸市教育委員会主催の市内の中学校教員対象説明会
神戸市内の中学校の進路指導担当教員に対して学科の内容を説明する。
- 塾等が主催する説明会への参加
塾等が中学生や保護者対象の説明会を開催する際に、出席して学校の特色を説明してほしいとの依頼がある場合は、説明会に参加して学科の内容等を説明する。

5 実施計画

（1）3ヶ年の実施計画の概要

〔令和4年度〕 新学科設置準備

- 新学科のカリキュラム開発
 - ・ カリキュラム開発会議を開催し、以下の内容について検討を行う。
- 〈検討内容〉
 - ① 探究科目（「文理探究基礎」「文理探究実践」「文理探究発展」）及び新たに設置する学校設定科目（「クリエイションⅠ」「クリエイションⅡ」「クリティカルシンキングA」「クリティカルシンキングB」「探究英語A」「探究英語B」）の具体的な教育内容、教材開発、年間指導計画、校内指導体制、評価方法
 - ② 学際的なテーマについての既存の教科の教科横断型の学びの手法
- コンソーシアムおよび関係機関との連携体制の構築
 - ・ 新たな機関への連携の依頼と連携内容の協議
 - ・ MIKAGE コンソーシアム会議の開催
- 関係機関の連携協力による学科設置に向けての特色ある学びの先行実施
 - ・ 長期休業中を利用して、先行実施可能な取組を関係機関の連携協力により先行実施
- 入学者選抜（入試科目等）の検討
 - ・ 県教育委員会と協議しながら入試科目等を検討する。
- 県外の高校と合同での課題研究発表会の開催
 - ・ 岡山学芸館高校と合同での課題研究発表会を開催し、生徒同士の議論の場を作る。

〔令和5年度〕 新学科設置準備（前年度）

- 定期的なカリキュラム開発会議の開催
 - ・ 探究科目や学校設定科目、新学科の取組等、特色ある学びの先行実施

- ・特色ある学びの先行実施の方法や内容の検証、検討
- MIKAGEコンソーシアム会議の定例化
 - ・新学科設置年度に向け、コンソーシアムによる連携体制の確認、強化を図る。
 - ・関係機関の連携協力による授業を先行実施
- 新たなカリキュラム実施（初年度：1年生）に向けての校内体制の整備
 - ・コーディネーターも含めた新学科開設準備委員会を中心に校内体制を強化する。
- 中学校等への新学科の内容の広報活動の実施
- 新たな学校設定科目の県教育委員会への届出
- 県外の高校と合同での課題研究発表会の開催

〔令和6年度〕 新学科設置初年度

- 関係機関の連携協力による新たなカリキュラム（初年度：1年生）の実施
- 新たなカリキュラム実施（2年生・3年生）に向けての校内体制の準備

（2）令和4年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
5月	■ 第1回 カリキュラム開発会議 顔合わせ ・弘前大学助教 若松大輔氏 ・京都大学大学院 鎌田祥輝氏 ・本校特色づくり委員会職員 事業展開の確認	継続する関係機関の協力による授業実施 （神戸市東灘区役所まちづくり課） コーディネーターと校内部署の打合せ 新たな関係機関への連携協力依頼
6月	神戸大学主催 探究プロジェクト発表会（現行カリキュラム生徒発表） ■ 第2回 カリキュラム開発会議 発表会を踏まえ、カリキュラム検討 1学期の先行実施事業の方針説明 委員による討議	● 第1回 運営指導委員会 顔合わせ 事業展開の確認、助言
7月	ことばのカシンプोजウム実施 先行実施事業←----- ・ファシリテーション講座 ・グローバルリーダー講座 ・外国人留学生とのワークショップ	関係機関の協力による先行実施事業 ライフデザイン研究所 FLAP・ISA・ Colorbath
8月	■ 第3回 カリキュラム開発会議 1学期先行実施事業報告、討議、助言 （指導者研修会を兼ねる）	▲ 第1回 MIKAGE コンソーシアム会議 顔合わせ 事業展開の確認

9月	カリキュラム・教育方法に関する方針の校内検討 (校内組織：特色づくり委員会 教育課程委員会)	
10月	■第4回 カリキュラム開発会議 カリキュラム・教育方法の具体の討議、決定 2学期の先行実施事業の方針説明 先行実施事業←----- ・STEAM フィールドワーク	●第2回 運営指導委員会 上半期の事業報告、助言 下半期の事業予定報告、助言 関係機関の協力による先行実施事業
11月	先行実施事業←----- ・STEAM レクチャー	関係機関の協力による先行実施事業 神戸大学 ▲第2回 MIKAGE コンソーシアム会議 先行実施事業の報告 学科の授業等への関わり方について 提案、了承
12月	先行実施事業←----- ・リーダーレクチャー ・STEAM ワークショップ ■第5回 カリキュラム開発会議 1学期先行実施事業報告、討議、助言(指導者研修会を兼ねる)	関係機関の協力による先行実施事業 Colorbath・(株)ウエルアップ
1月	令和6年度以降のカリキュラム・教育方法に関する方針の校内検討 令和5年度の授業計画完成 (校内組織：特色づくり委員会 教育課程委員会)	来年度の授業についてコーディネーターとの調整
2月	■第6回 カリキュラム開発会議 令和6年度以降のカリキュラム・教育方法の具体の討議、決定 令和5年度の授業計画に関する助言 3学期の先行実施事業の方針説明	▲第3回 MIKAGE コンソーシアム会議 令和5年度の授業計画連絡、共有
3月	先行実施事業←----- ・課題研究発表会 (岡山学芸館高校と合同開催) ・グローバルコンシャスデイ ■第7回 カリキュラム開発会議 今年度の総括、次年度への課題討議	関係機関の協力による先行実施事業 甲南大学 ●第3回 運営指導委員会 今年度の総括、次年度への課題討議

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）

○ 本事業での目標指標の設定の考え方【具体の指標は別添２】

別添２は、様式が生徒の変容に関する評価となっているため、下記の①（生徒の変容の視点）に関する成果目標を設定した。２（１）で記述した「高校魅力化評価システム」のアンケートの中で、評価が低く、本校の課題であると認識できる３項目を評価指標と設定し、本校の新学科への改編年度が令和６年度を予定していることを鑑み、特色ある学びの先行実施を通じて、３年間の事業の実施によっていかに成果を上げることができるかを検証する。

残りの②～⑤の視点については、学校評価アンケートや志願者数のデータ、連携のあり方（Win-Win の関係が構築されているか）、外部の発表会への参加状況、進路実現状況等、本校独自で評価項目や評価方法を設定し、検証を行うべく、運営指導委員会やMIKAGE コンソーシアム会議に加え、カリキュラム開発会議でも報告し、それぞれの場で助言・指導いただいた内容を、職員会議や授業担当者間の打合せ等で報告・共有することで、生徒の学びにフィードバックしたい。

○ 事業の成果をどう評価するかの視点

事業の成果をどう評価するかということについて、次の５つの視点から評価する。

① 生徒の変容の視点

２（２）で記述した５つの力、特に、５つめの力と関連して、生徒の視野の広がりや認識の深まりが進んだかを評価する必要がある。

② 教員の変容（資質向上）の視点

４（１）で記述した学際的で先進的なカリキュラムを展開するためには、教員の変容（資質向上）が不可欠であり、それがどう進んだかを評価する必要がある。

③ 中学生からの視点

新たな学際領域学科が設置者及び本校の自己満足にならず、中学生にとって魅力ある学びを展開する学科と認識されているかどうかを評価する必要がある。

④ 外部の機関との連携関係構築の視点

大学や研究機関、NPO や企業などの様々な外部機関との連携（MIKAGE コンソーシアム）がうまく構築され、生徒に学際的学びを提供できているかを評価する必要がある。

⑤ 新学科の生徒の学びのアウトプットや出口（卒業時）の視点

探究を中心に学際的な学びの成果を積極的に外部の発表会等でアウトプットしているかや、卒業時に学際的学びを生かした進路実現ができているかを評価する必要がある。

○ 事業の進捗状況の定期的な確認と改善に向けての助言の仕組み

年間３回の開催を予定している運営指導委員会やMIKAGE コンソーシアム会議で事業の進捗状況を報告し、委員からの助言・指導をもとに、随時改善策を検討する。設置者の県教育委員会は、上述の会議はもちろんのこと、課題研究発表会等の場で生徒の学びの様子や教員の指導の現状を確認し、学校訪問指導等の場でより具体的で的確な助言を行う。

6 成果の普及のための仕組み

本校の取組は、大学進学を目指す都市部の普通科高校に文理融合の学際領域系学科を設置するモデルになると考える。そこで、以下のような様々な場面で、その実践や成果を広く公表していきたい。

- 課題研究発表会の合同実施および公開
令和3年度から岡山学芸館高校と課題研究発表会を合同で実施し、生徒同士の議論もさせる取組を始める。この取組を継続・拡大していくとともに、学際領域のテーマについての課題研究発表会について、県内外の高校の教員に広く公開する。
- 学校設定科目「クリエイション」の授業公開
学校設定科目「クリエイション」で実施するSTEAM教育講座や留学生とのディスカッション、「文理探究発展」で実施する教科横断型のオムニバス授業など先進的な授業を研究授業として公開する。
- 連携機関等と連携した探究活動の取組を積極的にホームページで公開
コンソーシアムを構成している機関等との探究活動の取組の様子を、積極的に学校のホームページで公表する。加えて、県教育委員会と連携して県教育委員会のホームページでも、他校のモデルとなる取組を紹介する。

7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

- MIKAGE コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり
学際領域学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりである。4(2)に記載したように、国の指定期間内で、それぞれの機関と双方にとってWin-Winの関係になる連携のスタイルを確立し、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「共創した学び」となるよう更なる仕組みを構築する。
- コーディネーター機能の維持
指定期間後のコーディネーター機能の維持については、コンソーシアム内の大学または企業からの継続的な人員配置が行えるようWin-Winの関係の構築に取り組む。また、コンソーシアムからの人員配置が行えない場合に備え、予算の確保、教員のコーディネーター機能の移行についても検討し、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に方向性を決定する。

8 事業経費 別添3のとおり

9 再委託の有無 有 ・ 無

10 添付資料

- ① 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）申請校の概要（別添5）
- ② 令和3年度及び令和4年度入学生の3年間の教育課程票を年度ごとに作成したもの

11 管理機関の担当者

担当課・室	高校教育課	担当者 職・氏名	主任指導主事・蔭木 作幸
電話（直通）	078-362-3817	F A X	078-362-4288
担当課メールアドレス	koukouyouikuka@pref.hyogo.lg.jp		

②事業の実施日程

事業項目	実施日程（契約日～令和5年3月31日）												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
コーディネーターの活動													
コーディネート業務			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
カリキュラム開発													
校内でのカリキュラム検討		●	●		●	●	●	●	●	●	●		
カリキュラム開発会議				●	●	●		●	●	●	●		
先行実施事業													
クリエイション講座					●		●		●		●		
ビルドアップレクチャー				●					●			●	
シンポジウム				●								●	
課題研究成果発表会													
校内発表会						●						●	
校外での課題研究発表			●					●	●		●		
県外高等学校との交流発表会				●								●	
成果の周知													
本研究開発のウェブ発信								随時					
視察対応					●		●	●	●	●	●		

③実施の概要

1 カリキュラムの検討内容

本校は、現在開設している総合人文コースを、令和6年度より普通科新学科・学際領域学科として改編することを見越して、現在カリキュラム等を検討している。令和5年度も、引き続き検討を加え、現在の計画をより具体化させていきたい。

1-0 カリキュラム開発にかかわる会議の体制および取組

新学科のカリキュラムについては、校内組織である「特色づくり委員会」と、令和4年度に発足させた「カリキュラム開発会議」を中心に検討し、原案を作成した。

校内組織「特色づくり委員会」は、本校教頭2名、主幹教諭2名、特色教育推進部長、特色教育推進部副部長、教務情報システム部長、各学年担当者1名の計10名で構成される委員会とした。令和3年度も15回の会議を開催し、新学科に向けた検討や、新学習指導要領による授業開始を鑑みた探究のカリキュラムに関する協議を実施した。また、令和4年度も1月までに20回開催し、本事業に関する協議に加え、新学科開設に向けた検討や探究に関するカリキュラムの検証等を実施した。

また、上記「特色づくり委員会」のメンバーに、校長、および、校外専門家として、カリキュラム開発委員2名を招聘した会議が「カリキュラム開発会議」である。今年度発足したこの会議では、「学際的な取組みとは何か」という点から議論し、「学際的な探究プロセスとは何か」を図示したものの[図1・2]をもとに、議論を深め、「特色づくり委員会」で議論した結果も再度協議し、共有しながら、新学科のカリキュラムの原案構築を行った。

■カリキュラム開発委員

若松 大輔 氏	弘前大学 大学院 教育学研究科 助教
鎌田 祥輝 氏	京都大学 大学院 教育学研究科 博士後期課程在籍

■カリキュラム開発会議の概要

	実施日	実施内容
事前打合せ	7月15日 ※オンライン	・学際性とは何か。 ・育てたい力をどう設定するか。
第1回	8月5日	・本校設置の学際領域学科のゴールを何とするか。 ・そこに向けて必要な学びとは何か。(カリキュラム検討) ・学科の名称をどうするか。
第2回	9月22日	・御影セッションを踏まえ、今後の探究の在り方をどうするか。 ・新学科における探究について(イメージ図の協議)
第3回	9月28日 ※オンライン	・新学科における探究(イメージ図の完成) ・探究カリキュラムについて
第4回	11月2日 ※オンライン	・新学科における探究(3年間のカリキュラム大枠の完成) ・新学科の名称案、目標案について
第5回	12月7日 ※オンライン	・今年度の事業全体の進捗状況の確認 ・次年度の探究の計画
第6回	1月25日 ※オンライン	・今年度のカリキュラム開発会議に関する報告内容の共有 ・次年度の先行実施の在り方について
第7回	2月8日	・今年度のまとめ

1-1 学際的な探究プロセスにかかわるモデル図の確定

図1：御影高生の学際探究モデル：個人探究の深まり

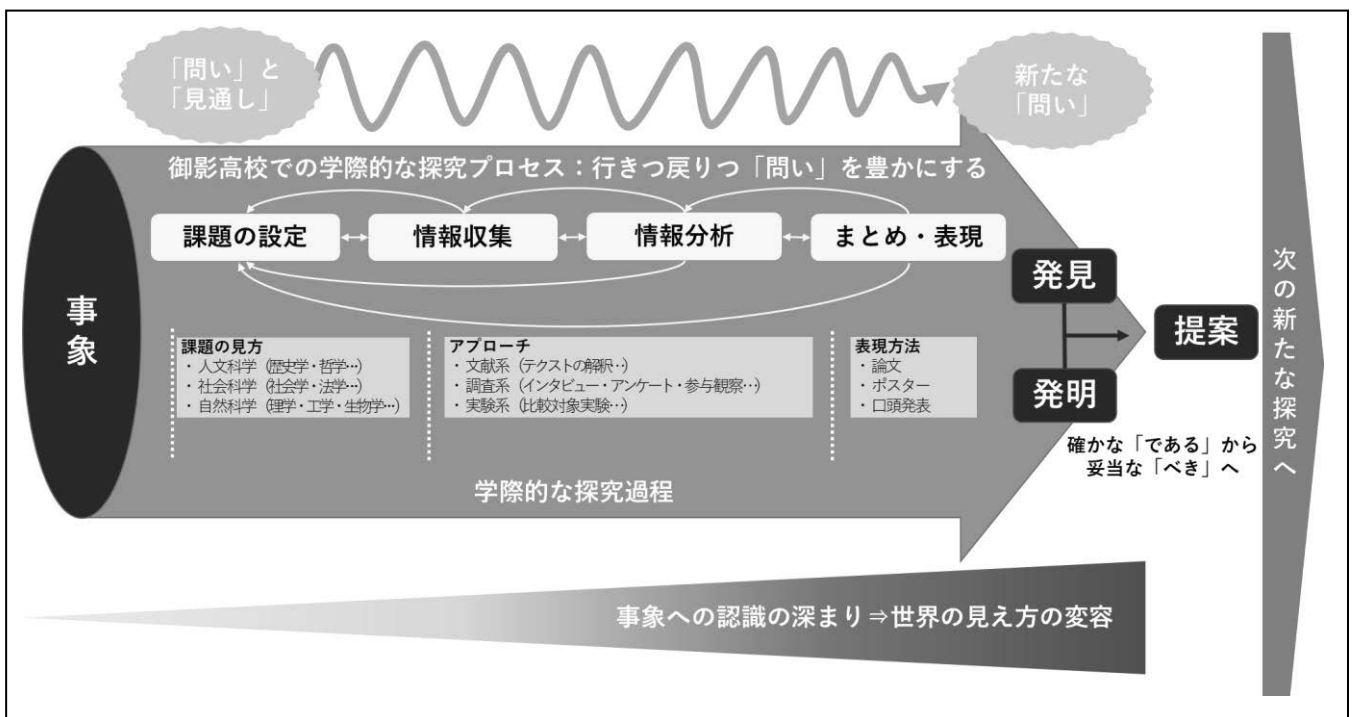
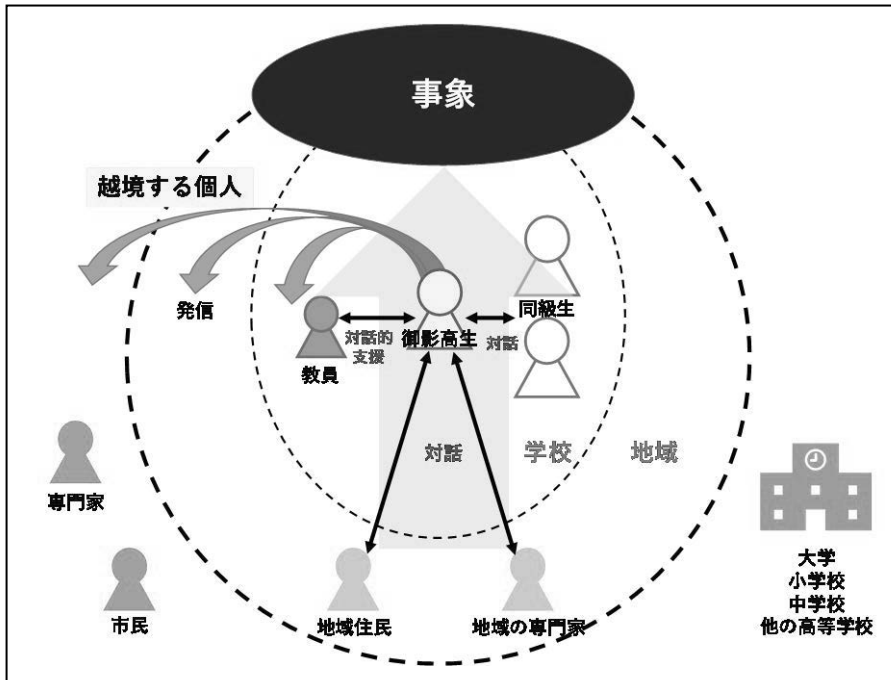
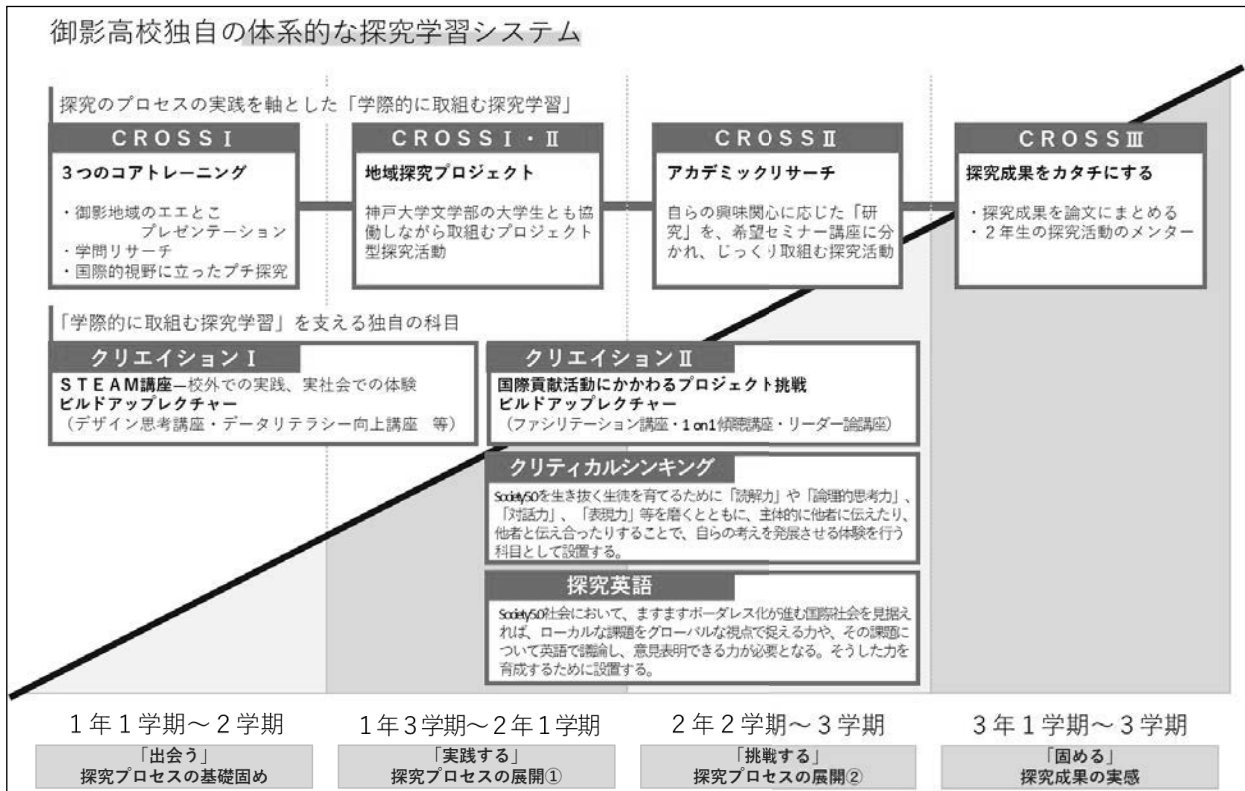


図2：多層的な探究コミュニティのモデル



1-2 学科独自科目の授業計画

学科独自科目については、令和4年度に幅広く議論し、下記のような内容での実施を検討している。なお、「CROSS I」、および、「クリティカルシンキング」の内容については、令和5年度より先行実施し、並行して成果検証を行う予定としている。また、「クリエイションI・II」の実践内容については、令和4年度に引き続き、令和5年度についても、令和6年度以降実施するプログラムを想定しながら、試行的に先行実施する。



1-3 新学科のキャッチコピー、理念

広がる学び、多様な未来

予測不能な今後の社会において、多彩な力を発揮し、新たな価値を創造しながら活躍できる人を育成することを目標とする。その目標を実現させるため、校外機関とも連携をとりつつ、生徒の学びのフィールドを校外に広げ、多様な認識や高次の認識をもととし、学際的に取組む探究活動を展開することで、生徒の知的好奇心を高めるとともに、主体性や協働性、課題解決能力、言語表現スキルの伸長をはかる。

1-4 目指す生徒像、教育目標、グラデュエーションポリシー

- ① 地域や国際社会のありようにしっかり目を向け、社会に貢献しようという志をもち、さまざまな事象の解決や是正、および、原因の追究に粘り強く挑戦し続けることができる生徒を育成する。
- ② 人文・社会・自然科学の専門知識を深め、事象を多面的に認識ができるようになるとともに、自らの読解力や論理的思考力を磨き、新たな価値を見出だそうとする好奇心をもつ生徒を育成する。
- ③ 地域や国際社会に生きるさまざまな方と対話を重ねつつ、自ら学び、考えて行動できる主体性や、周囲の仲間と協働しながら物事に取組む中で、リーダーシップが発揮できる生徒を育成する。

1-5 カリキュラムポリシー

- ① 探究のプロセスを体系的に学び、実践を行う授業を設定する。
- ② 自らの興味関心に応じた探究活動や地域に関する探究活動に学際的に取組む授業を設定する。
- ③ 人文・社会・自然科学の専門知識を幅広く学ぶ教科・科目を受講できる教育課程を設定する。
- ④ 実社会で活かすことができる「読解力」や「論理的思考力」、「対話力」、「表現力」等を磨くために、学科独自の科目を設置する。
- ⑤ 学びのフィールドを校外にも広げ、社会の実状を知る機会を設定する。
- ⑥ 新たな思考や新たな価値観、知的好奇心を育むために、大学や行政、研究機関、企業や社会貢献を行う団体等と連携した教育活動を実践する。
- ⑦ 生徒が主体的に進路選択できるよう、学びの振り返りを行う機会を設けたり、生徒の興味関心や、進路希望に応じた選択科目を設置したりし、きめ細やかな支援を行う。

1-6 求める生徒像、アドミッションポリシー

- ① 社会の諸事象に対して、興味関心を持っている生徒
- ② 仲間と協力し合い、答えのない課題に取り組むことに前向きな生徒
- ③ 「学際的な学び」に対し、好奇心をもって取組もうとすることができる生徒

1-7 実施教育課程

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33
1年	現代の国語	言語文化			歴史総合		公共		数学Ⅰ	数学Ⅱ	数学A	化学基礎	生物基礎		体育	保健	音楽Ⅰ 美術Ⅰ 書道Ⅰ		英語C.Ⅰ			論理表現Ⅰ (探究英語基礎)		情報Ⅰ	CROSSⅠ	クエ ィ シ ョ ンⅠ	H R						
2年	クリティカルシンキング (学校設定)	古典探究	文学国語 物理 生物	地理総合	日本史探究 世界史探究 化学	数学Ⅱ・数学C 数学Ⅱ・数学Ⅲ	数学B	物理基礎	体育	保健	英語C.Ⅱ	探究英語 (学校設定)	家庭基礎	CROSSⅡ	クエ ィ シ ョ ンⅡ	H R																	
3年	国語に関する 学校設定科目	古典探究	文学国語 数学C	日本史探究 世界史探究 化学	選択D・選択E 数学Ⅲ 数学探究A・数学探究B	数学探究B (学校設定) 地理探究	情報 (学校設定)	理科に関する 学校設定科目 物理 生物	体育	英語C.Ⅲ	英語に関する 学校設定科目	CROSSⅢ	H R																				

選択D、Eの科目 倫理、政治・経済、世界文化史(学校設定)、日本文化史(学校設定)、数学探究A(学校設定)

*開講科目・単位数等は、変更される可能性があります。

上記ポリシーの達成を実現させると同時に、探究的な学びを軸としながら、幅広い教科・科目を選択しながら受講することを可能とするため、このような教育課程を想定している。

1-8 先行実施事業

■クリエイション講座（STEAM 教育講座）

令和6年度から開講予定の科目「クリエイション I」を意識し、地域の企業や研究機関等と連携するとともに、それぞれのリソースを活用した教育活動をどのように展開するか、また、生徒のリアクションや学びはどのような点に関わる試行も含め、全11講座を展開した。

	講座名	実施日	講師
1	デザイン思考ワークショップ	8月1日 23日 29日	吉田大作氏 京都芸術大学 准教授
2	「インフラを守る」を仕事にする	8月 2日～3日	尾花弘教氏 ウエルアップ社長 他2名
3	生物多様性から海や山の環境を考える	8月 8日～10日	大西伸弥 本校理科教諭
4	imagination の練習ワークショップ	10月20日	玉木浩子氏 株式会社 528 社長 他2名
5	ほかの人におすすめしたくなる珈琲	10月20日	萩原英治氏 萩原珈琲取締役 他2名
6	実社会の課題をテクノロジーで解決！	10月20日	吉永隆之氏 UIJ ディレクター 他2名
7	ネスレ日本本社で地球環境保全について考える	10月31日	武藤寿旭氏 ネスレ日本株式会社 シニアアシスタントマネージャー 他1名
8	神戸の里山で探索！多様性とランドスケープデザイン	12月15日	今津修平氏 建築設計事務所 Muff
9	北野のカフェで想像する！架空のメニューづくり	12月15日	濱部玲美氏 株式会社 KUUMA 社長 他1名
10	非公開の建築に潜入する！みかげ建築めぐりツアー	12月15日	阿曾芙美氏 阿曾芙美建築事務所 他2名
11	子どもの可能性をクリエイトするデザイナーに学ぶ	2月6日	岡崎忠彦氏 株式会社ファミリア社長 他1名

■ビルドアップレクチャー

STEAM 教育講座以外のレクチャーについて、以下のような講座について先行実施した。

	講座名	実施日	講師
1	人生における夢・目標とはなにか？ グローバルリーダーって??	7月12日	椎木睦美氏 NPO 法人 Colorbath
2	世界で活躍するには	12月16日	椎木睦美氏 NPO 法人 Colorbath 他1名
3	世界の現状と今後の生き方～エチオピアをもとに～	12月16日	齊藤弘紀氏 GLCA 代表
4	科学と市民の関わりについて	12月19日	伊藤真之氏 神戸大学国際人間科学部教授
5	多様な生き方～わたしたちには何ができるか～	3月6日	東善仁氏 合同会社ユブネ共同代表 他1名

(他、ファシリテーション講座を計画していたが、当日に気象警報が発表されたため中止となった。)

■シンポジウム

本校では、「ことばのカシンポジウム」という行事を、総合人文コース独自の行事の中で最も大きなものとして位置づけ、7月に実施している。同シンポジウムでは、社会で活躍している卒業生をお招きし、基調講演をいただいた後、会場も巻き込みながらパネルディスカッションをするものである。今後は、新学科の生徒を対象とした行事としてリニューアルし、実施することを念頭に、探究成果発表を含めて開催した。また、今年度は、探究のフィールドを世界に広げて活動している方をお招きし、本校で身につけた課題のプロセスが「世界」を対象とした探究にも応用できるという視点でご講演をいただく「グローバルコンシャスデイ」を先行実施事業として3月に企画した。

1-9 探究成果発表会

■御影セッション（9月）

本校では、探究の成果を学年の垣根を越えて、全体発表会を実施したことがなかったが、初の大規模な探究発表会を実施し、生徒にとっても、教員にとっても、大変よい機会となった。

総合人文コースを除く2年生（全56班）にとっては、コロナ禍の影響を受けたため、昨年度に実施が叶わなかった探究活動の成果発表会の場となったが、普段部活動等の機会に接している後輩の前で発表するという点で、よい緊張感が生まれ、前向きに取組めた。1年生にとっては、先輩の発表を見て、カリキュラム改編に伴い、次年度（2年生時）に取組む探究活動のイメージづくりができる機会となり、食い入るように発表やポスターを見る生徒が多かった。また、総合人文コースの生徒（全7班）は、同コースの後輩に伝えられる機会であったことに加え、自分たちの学びを一般クラスの同級生に伝えることのできる好機として捉えられたようで、モチベーション高く取組むことができた。

一方、こちらの予想を上回る反響があったのは、教員からであった。「探究」の指導に携わったことがない教員や、本校の探究活動を知らなかった教員が、生徒の発表を聞き、どのよう

な活動を実践しているのか知ることができたという声とともに、特に発表した第2学年の生徒の普段とは違うよい一面が見られたという声も聞かれた。

■課題研究発表会（3月）

3月には総合人文コースの探究成果に関する校内発表会を実施し、地域の中学生らにも公開。

■校外での課題研究発表

総合人文コースの課題探究の成果を以下の発表会に参加して、発表した。

神戸大学主催 地域探究プロジェクト発表会	6月28日
関西学院大学総合政策学部主催リサーチフェア2022	11月19日
甲南大学リサーチフェスタ2022	12月18日
神戸市立葺合高等学校主催 KOBE AL ネットワーク事業 課題研究交流発表会	12月23日
兵庫県教委主催 高校生SDGs探究発表会	2月5日
神戸市東灘区役所×御影高校 意見交換会	3月20日

■県外高等学校（岡山学芸館高等学校）との交流発表会

教員は枠組みだけを調整し、その他は生徒が主体となって、計画・進行する交流会を実施。

第1回	本校会場	7月29日
第2回	岡山学芸館高校会場	3月13日

1-10 課題・次年度への展望

・カリキュラム開発会議について

初回の会議の前に行った事前打合せを含め、全8回実施ができたカリキュラム開発会議では、学科の目標をはじめ、探究活動の指導法、評価等、大変活発で建設的な意見交換の場となった。次年度も今年度に引き続き、有意義な会議となるよう心掛けたい。また、先行実施事業の成果検証に合わせて、特に、令和6年度より先行実施する学科独自科目のカリキュラムや、および、「CROSSⅢ」で実施する研究成果の論文化の実践方法について検討を加えたい。

・クリエイション講座の参加人数

全11講座実施したクリエイション講座は、すべての講座について、今年度初めての取組であったが、特に10月実施講座以降はコーディネーターの精力的な活動に支えられ、生徒の満足度も高く、想定していたゴールイメージと合致する講座も多く、大きな成果が得られた。しかし、一方で、希望者のみ参加する自由参加の講座が多く、期待したほど参加者が集まらなかった講座も多かった。次年度は、講座内容の精選・拡充に加え、広報の仕方を検討し直すとともに、令和6年度から新学科1年生全員の参加を求めることも踏まえ、総合人文コース1年生全員参加とすること等も視野に入れながら検討をしていきたい。

・クリエイション講座の講師とコンソーシアムとの関係性

今年度実施したクリエイション講座のうち、本校のコンソーシアムに入ってくださっている団体は一部にとどまっている。令和5年度は、コンソーシアム加入の団体の講座も実施しながら、コンソーシアムそのものの拡充を図りたいと考えている。

2 コーディネーターの配置および活動状況

本校では、本事業を円滑に進めていくにあたり、以下の2名のコーディネーターを非常勤（週7時間程度）配置し、特色教育推進部の職員として活動している。

2-0 コーディネーター

竹中 敏浩 氏	兵庫県立人と自然の博物館社会教育推進専門員。専門は地学。県立三木東高校・北摂三田高校長を歴任し、定年退職後、同博物館特任研究員を経て現職。博物館の生涯学習講座や大学・研究機関等とのコーディネートを担当。武庫川女子大学薬学部の非常勤講師も兼任。
東 善仁 氏	合同会社ユブネ共同代表。神戸・奈良・島根を拠点とし、地域プロジェクトの企画運営を担う。近年は神戸市西区のイベントの企画運営、兵庫県立大学通信の編集、奈良県宇陀市の地域プロジェクト「NCL 奥大和」のコーディネートを担当。

2-1 コーディネーターの業務分担

竹中 敏浩 氏	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの会議（運営指導委員委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）のコーディネート、ファシリテーション ・ビルドアップレクチャーの企画、運営 ・本事業や特色教育推進部会、特色づくり委員会での積極的なコミットメント
東 善仁 氏	<ul style="list-style-type: none"> ・クリエイション講座（STEAM 講座）のコーディネート ・クリエイション講座案内文作成 ・本事業に関わるメンバーの連絡ツールの整備、運用

2-2 コーディネーターの勤務記録

		竹中コーディネーター	東コーディネーター	
	時間数	主な取組事項	時間数	主な取組事項
6月	21	コーディネーター業務打合せ 特色づくり委員会出席 第1回運営指導委員会調整		
7月	32	先行実施事業への出席・分析 管理機関との打合せに出席 第1回運営指導委員会調整	27	業務連絡プラットフォーム整備 クリエイション講座調整 各社への挨拶
8月	33	第1回運営指導委員会運営 コーディネーター研修会出席 今後の会議の日程調整	14	クリエイション講座調整 各社への挨拶 授業計画シートの作成
9月	32	コンソーシアム会議調整 第2回運営指導委員会調整 カリキュラム開発会議出席	10	クリエイション講座調整 担当教員と業務打合せ
10月	32	コンソーシアム会議調整 第2回運営指導委員会運営 国際交流の在り方計画	24	書類作成 クリエイション講座への立会
11月	33	指定校ヒアリング出席	66	指定校ヒアリング・研修会出席

		コンソーシアム会議調整 コーディネーター研修会出席		クリエイション講座調整 講座告知チラシ作成
12月	30	コンソーシアム会議運営 カリキュラム開発会議出席 ビルドアップレクチャー調整	55	書類作成 クリエイション講座準備 クリエイション講座への立会
1月	11	第3回運営指導委員会の調整 カリキュラム開発会議出席	48	講座告知チラシ作成 クリエイション講座準備
2月	37	カリキュラム開発会議出席 第3回運営指導委員会運営	36	クリエイション講座への立会 今年度の活動の統括 次年度に向けた活動
3月	19	コーディネーター研修会出席 今年度の活動の統括 次年度に向けた活動		

2-3 課題・次年度への展望

コーディネーターは、今年度初めて本校内に配置することとなった。このコーディネーターの配置は、教員の業務負担の軽減につながるだけでなく、職員室に「新たな風」を吹かせ、新たな学科・取組に向けた機運を高めることにつながっている。加えて、コーディネーターから提案されるさまざまなアイデアは、学校既存の価値に捉われず、経験に裏打ちされた発想に基づいて出されるため、本事業を進めていく上で大変有益であった。引き続き、前向きに勤務を続けてもらえるような雰囲気づくりに努めたい。

両コーディネーターとも、本務との兼ね合いで、週1回以上の勤務が困難であるとの話もあり、令和5年度からは新たなコーディネーターを追加配置することも検討したい。

また、管理機関からの要請により、常勤コーディネーターの配置が困難な状況となっているが、令和6年度からは常勤コーディネーターの配置が可能となるよう引き続き働きかけていきたい。

3 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和4年3月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、普通科新学科設置の方向性を明確に打ち出し、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進している。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの中で、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数回にわたって調整を進めてきた経緯があることから、両校をそれぞれ学際領域に関する学科、地域社会に関する学科設置の実践モデル校として位置づけ、新学科設置に向け取組んでいる。

事業の実施にあたっては高校教育課内に学科構想・教育課程開発担当、及び探究推進に係る設備・備品担当を置き、両校の支援を行ってきた。

県立御影高等学校には、運営指導委員会等に高校教育課担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。

活動日程	活動内容
5月31日	運営指導委員会を組織
7月28日	学校管理職、担当教員、コーディネーターと、事業担当主事とによる打合せ・課題の共有
8月4日	第1回運営指導委員会 ・申請の経緯、事業方針を説明し、今後の授業内容に対し指導助言
10月21日	第2回運営指導委員会 ・新科目設定に向けた取組について協議し、今後の方向性について指導助言
12月2日	第1回コンソーシアム会議 ・これまでの取組の成果・課題について協議 ・今後の取組に向けた協力体制について打合せ
2月5日	高校生SDGs探究発表会（講演会とポスターセッション）を主催 ・生徒の探究成果発表の場を提供するとともに、教員、生徒の学びの機会を提供
2月16日	第3回運営指導委員会 ・今年度の取組について、成果・評価・課題を総括・指導助言 ・来年度の取組について、概要を説明し、協力体制について打合せ

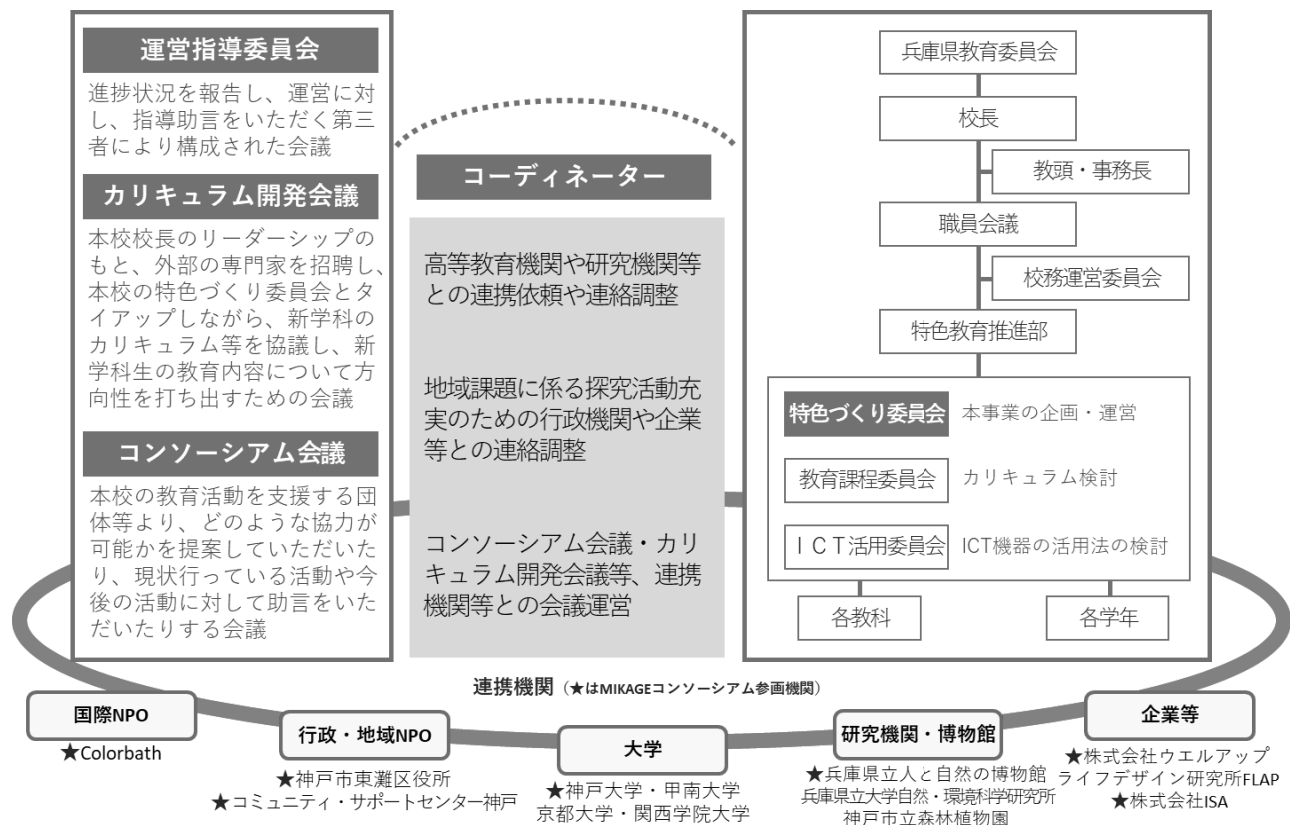
4 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

県立御影高等学校には、令和6年度の新学科設置に向けた支援として、探究活動を効果的に取組むことを目的とした「探究ルーム」の整備に400万円の支援を行った。また、本事業の国費に加え本県からも独自に50万円の予算措置を行い、より充実した取組となるよう支援した。

なお、令和5年度については学科開設準備にかかる支援として非常勤講師の時間数を増やすこととしている。

5 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

本校は校長のリーダーシップのもと、コーディネーターを活用しながら、以下のような組織を構築し、本事業について運営・管理している。特色教育推進部が中心となって本事業の運営を取り扱うが、その方向性を諮問するための委員会として、週1回「特色づくり委員会」を開催することで、各学年や各部署との調整が大変円滑に進んでいる。次年度もこの体制を維持するとともに、より多くの教員がコミット感をもって本事業運営に参加できるような仕掛けや、新学科設置に向けた体制づくりについても検討したい。



6 運営指導委員会の体制および取組

■運営指導委員会の体制

氏名	所属
(委員長) 甲元 一也	甲南大学フロンティアサイエンス学部 教授
(副委員長) 菊地 真	神戸大学文学部 准教授
前田 哲男	関西国際大学国際コミュニケーション学部 准教授
椎木 睦美	NPO 法人 Colorbath ディレクター
柳本 勇次	株式会社マルヤナギ小倉屋 社長
永野 喜久	神戸市東灘区まちづくり課長
新谷 浩一	兵庫県教育委員会高校教育課長

■運営指導委員会の取組

	実施日	実施内容
第1回	8月5日	<ul style="list-style-type: none"> 新学科のめざすべきゴールイメージにかかる指導・助言 現在の取組と今後の計画・ビジョンにかかる指導・助言
第2回	10月21日 ※対面、オンライン同時実施	<ul style="list-style-type: none"> 学校としての推進についての指導・助言 新学科名についての指導・助言 今後の推進についての指導・助言
第3回	2月16日 ※対面、オンライン同時実施	<ul style="list-style-type: none"> 学校としての推進についての指導・助言 来年度のカリキュラム、探究活動の進め方への指導・助言 新学科名についての指導・助言 現在の取組と今後の計画・ビジョンについての指導・助言

7 コンソーシアムの体制および取組

本事業の初年度の今年度は、まずはコンソーシアムを組織することを始め、各団体の代表者を12月2日、本校に招き、本事業について周知するとともに、今後どのような教育活動が可能であるかをディスカッションする「コンソーシアム会議」を開催することができた。

所属	氏名
神戸大学文学部	学部長 長坂 一郎
神戸大学国際人間科学部環境共生学科	教授 伊藤 真之
県立人と自然の博物館（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）	次長 石田 弘明
神戸市東灘区役所	区長 植松 賢治
国際NPO Colorbath	代表 吉川 雄介
株式会社I S A	社長 倉橋 勝
NPO コミュニティ・サポートセンター神戸	代表 中村 順子
株式会社ウエルアップ	社長 尾花 弘教
兵庫県教育委員会高校教育課	課長 新谷 浩一

8 管理機関における事業全体の成果検証、評価

令和4年3月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、普通科新学科設置については、「普通科コースからの改編、または発展的統合を行う学校への配置を基本とし、1学年1学級とする」と定めたところである。

県立御影高等学校については、普通科総合人文コースにおいて、探究活動に特化したカリキュラム開発を先行して進めていたことから、新学科（学際領域に関する学科）の令和6年度の設置に向けて本事業に取組むとともに、県単独の支援対象校としたところである。

運営指導委員会等に全て出席し、適宜指導・助言を行うことで新学科設置に向けた組織及び内容が整いつつあると評価している。

9 新学科の設置及び設置に向けた検討の関係者への説明の実施

学際領域学科の設置は令和6年度を目指しており、広報活動を令和5年度より実施する予定である。

10 成果普及のための取組

下記の通り、視察の依頼に対応するとともに、随時、本校ウェブサイトにて本事業に関わる活動の報告を積極的に広報した。視察のため来校した関係者とはそれぞれ情報交換を行い、各校の先進的な取組も拝聴し、本校の取組を検討する上での参考とすることができている。

■視察来校対応

実施日	所属	来校者数	主なご質問・視察事項
8月30日	ベネッセ教育総合研究所	1名	<ul style="list-style-type: none"> 実践している探究に関する課題感について 高等学校の普通科改革について
10月18日	兵庫県立川西緑台高等学校	2名	<ul style="list-style-type: none"> 現在の取組について 新学科創設について
11月1日	熊本市教育委員会 熊本市立必由館高等学校	3名	<ul style="list-style-type: none"> 新学科設置に向けた取組 運営指導委員会・コンソーシアムの実施体制 当該学科における特色・魅力ある取組

11月17日	北海道釧路湖陵高等学校	3名	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業にかかる取組状況 ・学際領域にかかる特色ある学校設定科目等 ・教育コーディネーターの役割、業務
12月1日	和歌山県立橋本高等学校	3名	<ul style="list-style-type: none"> ・学際領域学科設置までの準備 ・文理の枠を超えた学びを支えるカリキュラム ・校外の機関との連携内容
12月20日	大分県教育庁	3名	<ul style="list-style-type: none"> ・学際領域学科の取組内容と成果、課題 ・学際領域学科の進路確保の方向性と取組
12月27日	兵庫県立柏原高等学校	2名	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の取組状況 ・現状の課題感と今後の方向性
1月30日	神戸大学 V. School	1名	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の探究活動の現状（授業見学）
2月3日	和歌山県立新宮高等学校	2名	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の取組、推進体制 ・カリキュラム開発や探究的な学びについて
2月13日	福岡県立八幡高等学校	2名	<ul style="list-style-type: none"> ・本事業の概要、および取組状況 ・本事業にかかる予算執行
3月4日	和歌山県立橋本高等学校	2名	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究発表会の視察

Ⅲ 研究開発の内容

① 3つの会議（運営指導委員会、カリキュラム開発会議、コンソーシアム会議）

第1回 運営指導委員会

日 時：令和4年8月4日(木) 10:00～12:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 第1会議室

出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、椎木委員、柳本委員、永野委員、蔭木委員、森本校長、野原教頭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、委員長・副委員長の選出、資料説明（本事業説明）、協議

協議題：①普通科改革支援事業の学際領域学科として、御影高校がどのような学科を目指せばよいか
②そのゴールを目指していくための、現在の取組と今後の計画・ビジョンにかかる指導・助言について

協議要旨

橋本教諭 新学科や本事業に関する課題

①『「学際」とは何か』をどのように考えるか。

学問・研究の世界では「学際」といえば、「隙間産業」のような捉え方が先行しがちであるが、「超領域」的な学びとして捉えてみるとよいのではないか。

②学際的な学びのカリキュラムについてどのように組み立てていくか。

③教科を超えた学びの関連性をどのように形成していくか。

④「学際」的な学びと「受験」に向けた学びをどう両立するか。

⑤認知の度合いの低い「学際領域学科」をどのように浸透させていくか。

⑥新学科の名称は「文理探究学科」という名称でよいのか。

⑦MIKAGE コンソーシアムをどのように Win-Win の関係を保ちながら自走化させていくか。

⑧今年度の事業に関する目標を達成させるためにどのような取組を進めていくのがよいか。

⑨先行実施事業の生徒参加をどのように促進させるのがよいか。

柳本委員

・一般社会に出ると文系理系は関係ない。専門領域は一定の影響を与えて仕事選びに関係はするが、実際に一般社会で仕事を始めたら、文系理系は関係なく、生きていく上（仕事や対人関係など）で、人としてどのように考えるかが大事。文系理系を学ぶことが大事なのか、考え方を高めていくか。現状をどのように捉え、どう生きるか、何を幸せに感じるかが大事。プラス思考ができるような生きる力・人間力が求められる。

・限られた時間のなかで、いかに仕事のモチベーションをあげるかを考えている。ほとんど現場の仕事をしている人のモチベーションをどう上げるか。それを原動力にすれば仕事の効率は上がっていく。御影高校で何がモチベーションになるかを出していく。自分自身の生き方を考える時間があればよいのでは。

椎木委員

・日本でも世界でも人間力や主体性が大事。マラウイでは子供を子供としてみていない。一人ひとり役割がある。セルフリーダーシップが培われている。一方、日本の子供たちは受動的。例えば生

徒が先生になるなどの打ち出し方も面白い。（「知識は与えられるもの」という考えからの脱却）子供たちを信じて可能性を見出す。

・興味関心が高まれば勝手に学んでいく。高校生は忙しい。新たな取組も必要だが、現状あるものの捉え方を変えるとという方向性もあるのでは。たとえば、部活も探究であるという捉え方をしても面白い。好きなことが勉強につながる経験を積み立てる。OODA ループが大切。1年生の中でもリアルな実践、スパイラルがあればよいのでは。

永野委員

しっかりした生徒という印象。社会に出ると、指示待ちの大人（若者）も多く、増えてきているようにも感じる。自主性やポジティブさ・めげない心が必要。それがあれば社会に出ても伸びていく。

前田委員

・主体性、課題解決能力などは、どこの学校でも言っている。中身も素晴らしいと思うが、御影高校だから！というわかりやすい打ち出し方が必要。このままだとまた埋もれてしまうのではないかと思う。ほかの学校に無いものを打ち出したり、テーマや理念を深めたりしたほうがよい。グローバルな視点をもっとあってもいいと思う。ディベートやディスカッションでは「探究英語」にはならず、「探究英語」の内容を深めることが必要。英語を用いてファシリテーションをする取組などはどうか。

・リーダー育成やファシリテーション力をつける人材育成につながるのではないか。普通科との差別化にフォーカスしてはどうか。

甲元委員

・①他のところに無い新しいものをつくると言いつつ埋もれるかもしれないとの危惧はぬぐえない。かつての「総合学科」のように、竜頭蛇尾的にならないようにしなくてはならない。

②日本の教育の問題は教える一方。生徒は正しいことしか言えない。当てられそうになると目を伏せる。わからなくて知らないことは怖いから、チャレンジできない。しかし、本当は、答えがないところにアイデアを出していくことが大事。生徒が考えて自分です。そのような仕掛けを設ければ、自主性は養えるのではないか。

③学んだことが実践できない。（経済経営学出身の学生が起業して帳簿がつけられない）例えば、観光ファシリテーターをするような学びを通じて、教室で学んだことを実社会で生かすような活動をするとうよいのでは。（インターンシップを行っていく）

④「学際」について。「環境」が文理融合しやすい。文系と理系でそれぞれ問題点を見つけさせ、班の中に文理の生徒がそれぞれミックスする形で班編成をして、探究をさせていくと、「学際」というものを生徒が気づくようになるのではないか。生徒が気付くのが大事。どのような仕掛けをするか。教員がどのようにファシリテーターになるか。

・受験勉強に対する不安は保護者に強い。グローバルサイエンスキャンパスの取組もそうである。受験当日まで頑張るが、受験後大学入学後は、全部忘れていく。それでは学んだ意味がない。英語で他者とやり取りする中で、英語ができるようになる。学んだことを応用する過程を設けることで、子供たちは自発的に学ぶようになる。自発性を促す仕掛けの必要がある。

・カリキュラム開発で生徒が楽しくないとダメ。ゲーム要素（競争・遊びの要素）を最初の方に入れるとうよい。楽しいから入れた方が子供の自発性につながる。そして、楽しい体験の中から、学び

の必要性に気付ける仕掛けがあれば、とてもよいのではないか。

菊地委員

・県や文科省が、御影高校の今までの取組のどこを評価しているのか。「探究」や「学際」は10年後、当たり前になるので、この普通科新学科を最初に始める御影が何を主張してくか。生徒に何をどう気付かせるか、どう背中を押せるかという点で教員の力量が問われる。そもそも社会問題を文理を分けて考えていくことには意味はない。問いをどう立てるのは大学生ぐらいでできてくる。知識がないと問いは立てられない。

まとめ

「学際」の取組に関しては支持していただいた。しかし、「学際」をどう捉え、何をしてくか、どう広報していくかは課題がある。「文理探究学科」という名称以外の名称はないかということも課題。

第2回 運営指導委員会

日 時：令和4年10月21日(金) 15:00～17:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 セミナー教室

出席者：甲元委員、前田委員、吉川委員（椎木委員代理）、柳本委員、永野委員、蔭木主事、森本校長、橋口教頭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター【菊地委員より事前に意見をいただく】

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（事業進捗報告）、協議

協議題：①学校としての推進について

②新学科名について

③今後の推進について

協議要旨

橋本教諭 資料説明（事業進捗報告）

○クリエイション講座

・将来、国や地域の担い手として積極的に政策決定にかかわりたいですか。43%→87.5%

・国際社会の課題解決に自分も貢献したいと思いませんか。57%→79.1%

「はい」と答えた生徒が、昨年度の割合に比して増加。

・反省と振り返りとして、①講座の参加者が少なかった。②内容としてはどの講座についても新学科の取組に生きてくる活動が多いと考えている。

・次年度は夏休みを中心に複数講座を実施予定（総合人文コース1年生の受講）。

○御影セッション

・1、2年生全生徒が参加する研究発表会を実施。

・反省と振り返りとして、①後輩の前で発表するという点で、いい緊張感が生まれ前向きに取組めた。②コースの生徒が一般クラスの生徒に見てもらえて良かった。③教員が探究活動の内容を知る機会となってよかった。

○カリキュラム開発会議の進捗状況

・7/15 打ち合わせ、8/5 第1回、9/22 第2回、9/28 第3回、実施済み。

・どのような学びのことを「学際」とするか。

○新学科の名称、キャッチコピー、理念

発言要旨

柳本委員

- ・結局のところ学際とは基本科目以外の学びで実施され、目的は国や地域、国際社会に関心の高い若者を育てたいという認識で良いか。学校では、日本史や世界史だけ？現代史はあまり教えていない？政治的なものとはつながりのない過去の事実に基づいた授業展開がなされているイメージがある。社会問題についての関心をもって、学校ではあまり教えてくれないイメージがある。目的は非常に良いと思うが、今の若者は、自己実現と社会貢献というワードには敏感であると思うので、授業においても、社会問題に関することをもっと取り上げたほうが良い。テレビ番組の「プロフェッショナル」や「情熱大陸」などの題材を使いながら議論する機会を毎週作るとか…教材はいくらでもある。毎週ある事象についての議論を深めるということをするればよいのではないか。
- ・実学（実社会の諸問題を解決するための考え方）は、文理が分かれているのではない。学科の名前の付け方に関しては、文理分かれているのをクロスさせるという考えではなく、文理はもともと分かれていないものであるという認識（＝実学の側）から見た名称のつけ方が求められるのではないか。
- ・社会についての関心を持ってもらう講座で心の背骨をつくる。様々な人間の生き様を学ぶ時間があると良い。

甲元委員

- ・クリエイション講座が肝になる。広報活動を来年から始める。クリエイション講座のアンケート結果などをもとに広報していく必要がある。日頃の授業では感じられないものがあつたかどうか。これが重要。そのような感想を集めておく。自分たちがこういう講座を受けたいと生徒が思っているものを取り入れていきたい。将来、国や地域の担い手として積極的に政策決定にかかわりたいと思うようになった理由なども聞いておくべき。

前田委員

- ・よい試みができているように感じた。クリエイション講座が肝になる。文系理系の枠組みを越えて様々な学びを深めるという取組をシステムティックに構築していくことが難しい。文系理系という捉え方ではない言い方が必要。逆戻りした考え方。違った観点からの系統立て、くくり方。目新しいことをすることで、結局何がやりたいかが見えなくなることを避ける。今までと違う、わかりやすい学びの系統立てを考えてほしい。
- ・限られた教員の中で実施していくことは難しいことである。教員の興味関心のある題材を扱ってもらっては。やりたいことに関して、教員はどんどんやってくれるのではないか。教員も楽しめると良い。

吉川委員

- ・発展途上国の高校生と関わっていると、学習意欲について日本人よりすさまじいものがある。恵まれた日本でどのようにその意欲を高めるか。
- ①クリエイション講座…学校の教員ではなく、外部講師が授業を計画しているのかどうか。長くやっていくうえでポイントになる。先生が頑張りすぎて生徒がお客さんになると難しい。生徒が一番汗をかく活動になってほしい。

- ②発表会にあまり比重を置きすぎない方が良い。発表はあくまでも「次への学び・次の探究の出発点」として捉える。発表会で、新たなアドバイスをたくさん受けるように指導する。そうすることで、生徒の探究はより深まるはずだ。そうでないと、発表会が単なる発表の練習になってしまう。
- ③学際とのバランスを考えたときに、学科独自の学びを普通授業の学び方を変容させていく。通常授業との連動を考える。生徒募集する際に、選択科目を増やす、リモートを可にする、インターン2か月OKなど、大胆な取組を入れてみては。「引き算」しないと新しい学びができない。

甲元委員

・教えられることは受動的。自ら考えることが大事。カリキュラムをどう練るかが、クリエイションにつながる。直面した問題に触れる機会。カリキュラムで垣根をとるのが難しい。きっかけをどう与えるか。体験が一番熱を伝えやすい。今日習ったことが、何かの授業とつながりがありましたか？という質問を投げかける。(負担を減らしてきっかけを与える。)連動のきっかけを与えるために、メモを残すとか…

菊地委員 (ご意見を事前にいただきました)

・これまでの段階的な探究能力の組み立てと教科の分野ごとの探究学習をどう配置していくか、今までの事業にとらわれず組み直す必要がある。

橋本教諭

・社会で活躍する人と高校生の段階で会うことも大切。今のところ、系統立てて年間通じて…ということでクリエイション講座を立てることは考えられていない。最終的には、いくつかの単元を年間を通じて受講するというイメージ。

柳本委員

・社員から「勤務時間内に勉強させてほしい」という意見が多い。勉強に割いた結果、短くなった勤務時間で効率よく働けるように社員教育(モチベーションアップ)している。進路実現のカリキュラムを達成させながら、主体性を磨く。新しい体験をすることは気分転換になるが、生徒の「軸」をつくることにつながるか。

甲元委員

・学科名は対象に対してのメッセージ。時代に左右されない名称。カタカナではない方が良い。漢字ベースの方がぶれないし、分かりやすい。中学生が見て理解できる言葉が良い。クロスはわかりにくいかも。

前田委員

・名前は変えられないという前提に立つ。広報していくときに自分の腹に落とせる言葉。キャッチーなものでないほうが…気持ちがぶれない言葉。柱になる理念、キーワードを入れる。

・クリエイション講座を柱にするのであれば、そことつながる「創造」という言葉があったら良いのでは。例えば「創造科学」とか。

柳本委員

・普通科とは違って、人生の視野が広がる、モチベーションを高めるような学科として良い言葉が

ないか考え中。自己実現、やりがいとか…学際とか超領域にどんな意味があるか。

- ・「人生創造学科」「ライフクリエイション科」とか。

吉川委員

・言葉のチョイスは対象者によって変わるので、こだわりの理念と対象者を明確にしてから言葉選び。決め方のプロセスも大事。中学生や中学教員とのワークショップを経て名称を決めるのも良いのでは。

③今後の推進について

甲元委員

・本学主催のリサーチフェスタは方向性を決めないうえで、様々な学校と議論することで視野を広げることを目的としている。方向性を求めている。自分たちがしている探究が他の人にどのように影響を与えられているかを感じる場。意見が違う人と出会い、新たな考えを取り入れていくということが大事。

前田委員

・学科3年間の計画性をもつことが大事。学年ごとのステージ（時期的な目標）の意味合いを検討したほうが良い。

吉川委員

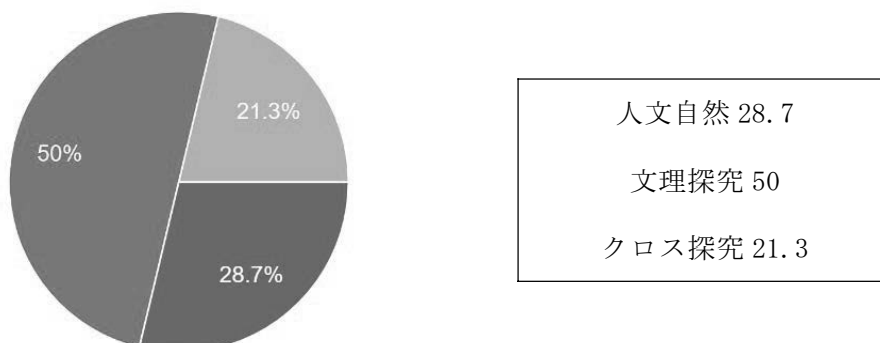
・日本の高校生は発表の練習をしている。準備している内容以外のことを聞かれると答えられない。決まった発表会を演じている感覚がある。それはもったいないので、「発表する場が出発点」という感覚を持ってほしい。緊張すると他の発表を聞いていない。発表者の想いや人間性が大事であるが、自分が発表すること「スピーク」しに行くことが大事なわけではない。学びに行くという位置づけ。
・立派な企業ほど「スピーク」に捉われている。「インタラクション」に重きを置いた方が良い。

※第2回運営指導委員会の意見から、本校総合人文コースの在校生を対象に、総合人文コース名称変更に関するアンケート調査を実施し、次のような回答を得た。

（ただし、学科への改編の発表前のことであったため、コースの名称変更として調査した。）

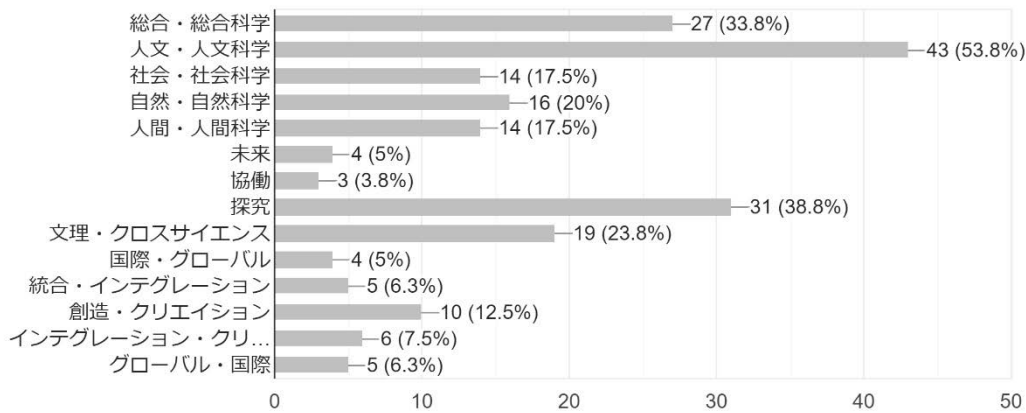
1. 次の3つの名称の中から選ぶとしたら、どれが望ましいでしょうか。一つだけ選んでください。

※これから受験する「中学生」の視点で考えてください。(n=80)



2. コースの新たな名称を考えるにあたり、コースの特色を踏まえた名称とするために、コースの名称にどの要素を取り入れるとよいと思いますか。

※これから受験する「中学生」の視点で考えてください。(n=80)



3. アイディアがある方は、コースの新たな名称を提案してください。

※これから受験する「中学生」の視点で考えてください。(n=80)

人文科学コース（複数）、共創探究コース、文理フロンティア、人文クロスサイエンスコース、文理総合型探求コース、グローバルアカデミック、アドバンス文理コース、探求、総合文理とか協働探求とか、文理創造コース、総合理学・人文コース、総合人間・人文科学、社会共創探究コース、人文創造、文理融合コース、未来創造コース、人文というニュアンスを残した方が本人たちも周りもわかりやすいと思う、コミュニケーション的な単語を入れればいいと思う

上記の結果を踏まえ、「特色づくり委員会」にて協議を進めた結果、

- ①これから受験してくる中学生にとって分かりやすいこと
 - ②新学科での学びの特色を端的に表していること
 - ③総合人文コースが15年以上続いてきたように、以後15年以上続けていく学科の名称としてふさわしいこと
- その他、名称が長すぎないこと、カタカナを排除すること…等の条件を鑑み、「文理探究科」を第1候補として県教委に提案したいという結果となった。

第3回 運営指導委員会

日時：令和5年2月16日(木) 14:00～16:00
 場所：兵庫県立御影高等学校 セミナー教室（対面とzoomとのハイブリッド開催）
 出席者：甲元委員、菊地委員、前田委員、蔭木委員、森本校長、野原教頭、橋口教頭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター
 内容：校長挨拶、管理機関挨拶、資料説明（事業進捗報告）、協議

協議要旨

■資料についての説明（報告）

①10月21日以降の学校としての推進について

- ・3月10日の文部科学省で行われる報告会で御影高校が発表することになった。
- ・カリキュラム開発会議7回を経て、探究のモデル図を作成。

- ・学びの先行実施として、県外との交流やクリエイション講座を行ってきた。
- ・3つの会議を軸としてうまく回ってきた。また、特色づくり委員会を週時程に入れることで、様々な観点で意見をいただきながら進めることができた。
- ・クリエイション講座のそれぞれの実施状況。学校の外に出て、学校の外の方に講座内容を考えていただくことに、クリエイション講座をすることに意味がある。

②カリキュラム開発会議の進捗状況

- ・探究活動の具体的な進め方について議論が進んでいる

③新学科名とテーマ

- ・新学科名の進捗に関して、生徒アンケートの結果や案を文理探究としたことなど。

■報告を受けて

③新学科名とテーマ

生徒の感覚が比較的固い。

甲元委員：漢字の方が良い。カタカナではない方が良い。

前田委員：高校生の池を取り入れたことが良い。在校生の家族に兄弟がいるだろうし、弟や妹が御影高校に入学したら…というような観点で考えられていて良いのではないかと。「文理探究科」は、理系と探究という要素が入っている点が良い。

菊地委員：「文理探究科」はとてもわかりやすい。

蔭木委員：今後教育委員会で検討。中学生にとってわかりやすい学科名という観点は県も同じである。

②カリキュラム開発会議の進捗状況

境界を越えながら広げていき、深めていく探究をする。それがモデル図に表れている

甲元委員：須磨友が丘高校の探究では、特定分野ではなくかなり幅広い場を提供して、様々な気づきを得ている。生徒たちが頭の中にはかなり自由な斬新な発想がある。ただ、型にはめようとすると過ぎてポスターの到着地点が低い。先輩と交流することで、先輩と同じことをすればいいと思ってしまうと危険。プレゼンテーションの指導は柔軟であるべき。

前田委員：螺旋だけではなく、そこからの広がりやリンクさせた「クロス」という言葉があったが、その通りだと思う。収縮と拡大の繰り返しというプロセスが大切と感じた。1年間のサイクルでおさめないといけないという枠に高校生が合わせようとしている。それは探究の学びとしてどうかと思う点もある。形だけ作ってやりました、ということではなくその先へ。長い目で見たカリキュラムを。教員の使命感が生徒に伝わりすぎてしまう。

菊地委員：地域探究プロジェクトは今後も神戸大学で連携していく。基礎的な力をつけて、高校生らしいベストなものにできるか、という点を重視して神戸大学は関わっていく。文系や理系の様々な学びがあってこそその探究。そこに高校生が気づけると良い。

①10月21日以降の学校としての推進について

甲元委員：クリエイション講座は今後どのような方針で進めるのか。

○単位認定をするため年間で35時間を履修する。夏休みに6コースも受けて、3日間程度受講する。

甲元委員：6講座の設定は今後検討すると良い。様々な分野が組み合わさった講座を考える。食わず嫌いにならないための工夫を施す必要がある。どんな講座も必ず気づきがある。

前田委員：探究的な学びの本腰を入れるために、実際に動く教員が楽しさを理解する必要がある。
先生方の気づきが大切で先生方が楽しくできるか。生徒と教員が楽しめるムードをつくる。

■協議

④学際領域学科の教育課程基準の趣旨を満たすための工夫について

- ・学校教育法施行規則
- ・県基準 趣旨について
- ・御影高校としての特色ある科目の設定

カリキュラム開発会議で課題になっていること。

○御影高校は理系に特化したこともないし、国の指定を受けたこともない。普通の普通科の学校である。

生徒たちには探究のプロセスを身に付けるためにできるだけ探究のプロセスを体験する。

→学校教育法施行規則が文部科学省令和3年3月31日に変更通知。「学校設定教科に関する科目及び総合的な探究の時間を6単位以上履修させること」とある。

→御影高校は学科独自の科目を14単位で考えていた。（クリエイションは時間外に設置を思案）

→「週時程の中で7単位以上の学科独自の授業を設定、それぞれの授業で5時間以上の外部講師を招聘するように」という県教委からの通知。7単位以上は県独自設定。

蔭木委員：学校設定教科を設定してから学校設定科目を設定する。令和7年度以降は文科省の支援がなくなるが、それを県が補填することはない。学校には自走を求めている。

○外部講師の規定が厳しくなれば、自走が困難となるのではないかと？

蔭木委員：コンソーシアムをより強化することが解決策と考える。

○施行規則に連絡調整を行う職員配置の項目もあり、コンソーシアム強化にはコーディネーターがいないと無理ではないかと思われる。自走を求めるのであれば、県が条件を強めようとする意図は何か。

○週時程内で7単位も可能であるが、外部講師を1単位当たり5時間というのは厳しい。クリティカルシンキング AB、探究英語 AB に来てもらうのは難しい。費用については裏付けがないのに、大学の先生などの招聘は難しい。せめて週時程外だとお願いしやすい。

前田委員：関西国際大では、昨年度35校87件の高大連携をした。9割が対面。1割がオンライン。オンラインやオンデマンドで実施することが解決策ではないか。

○オンデマンドでは単位認定できないという難点がある。

甲元委員：理系教授は日程調整が難しい。毎週講師を呼んで講義をすることは不可能。残念ながら、研究していない教授は呼ぶことはできるが、それでは意味が無い。次の策としては、大学と連携協定を結ぶとかが考えられる。

○高校が講師をお願いしたい時に、教授が行けないという問題は簡単に起こる。現実的な提案をしてほしい。

菊地委員：オンデマンドは厳しい。オンラインはある程度関係性がないと厳しい。

○今の流れで考えるのであれば、週時程の中で7単位、外部講師5時間以上は厳しい。令和7年度にこの部分を支援していただけない状況で広報も難しくなる。

○クリエイションが大きな目玉である。STEAM を体験できる、可能性を伸ばす講座で考えている。これも週時程の中で7単位、外部講師5時間の考え方に含めてほしい、と考えている。

第1回カリキュラム開発会議

日 時：令和4年8月5日(木) 9:00～12:00

場 所：兵庫県立御影高等学校 第1会議室

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、野原教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、土居教諭、作教諭、橋本教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、自己紹介、現在の構想とプロジェクトの進捗状況、協議

協議題：①学際領域学科とは？（何をゴールとするか）

②必要な学び、必要なカリキュラムとは？

協議要旨

【いただいたご意見】

- ・文理探究学科という名称ともかかわるが、探究のプロセスにおける「文系アプローチ」「理系アプローチ」という語については、粒度を少し細かくしておく必要があるのではないか。
- ・学問的な探究と、現実的社会課題に関する探究とでは、似ているように見えてずれていて、どちらかに絞る必要があるのかもしれない。
- ・特に2年で、地域探究とアカデミックリサーチの2本の探究を行うには、時間が短いのではないかな。
- ・広報的なことを考えると、チャンネルの多さは必要だと思うが、じっくりと探究を深める機会を設ける必要があるのではないか。
- ・地域探究プロジェクトの現状は、解決策を考えてみるが、「それで終わり」となっていることが課題。その解決策がその地域に限定されることなく、実は世界にも通用する・・・あるいは、その地域のその課題を解決することで、世界がもっとよくなる・・・のような、世界的な視野に広げられるような学びが欲しい。
- ・学問的な探究（＝自分の最も興味があることに関する探究）に向けて、探究のプロセスそのものの学びをするという点では、地域探究などを下敷きに、最終的に学問的な探究をすることは可能ではないか。
- ・今、総合人文コースで実践している課題探究での研究やその成果は、パツとしなかったとしても、確実に、生徒の主体性や協働性、言語表現スキルや課題解決能力は、ついているように思う。取組む前と取組んだ後とは、ぜんぜん違う。
- ・実は、地域探究だけで2年間探究をし続けることは、生徒のモチベーションの維持を考えると、しんどいのではないかな。また、広報的にも難しいのではないかな。
- ・学際的な学びに広げていくにあたり、多くの教員を抱きこんでいく必要があるのではないかな。1人1人の余力は足りない。
- ・一方で、今、総合人文コースで取組んでいることを大きく変えると、教員の負担が大きいのので、そのままペースは変えずにいきたい。そして、今までのメニューを続けていく中で、理系的なテーマの探究に取り組む生徒もいるし、従来通り文系的なテーマで探究をしている生徒もいるというのが、「学際」だという風に考えていけばいいのではないかな。
- ・テーマを「温暖化」「資源分配」「コロナ」などに絞ったうえで、事前に校内で共通理解をはかっておくと、各教科の授業で取扱う内容との重複が狙いやすいのではないかな。
- ・探究のテーマを決めずにスタートすると、探究活動の中心が情報処理になる。一方、テーマを決めてスタートしておくと、同じテーマを、文系や理系を超えたいろいろな視点で探究が進んでいき、それぞれの探究の発表を聞くことで、生徒の認識が深まっていくことにつながるのではないかな。
- ・探究を細切れにし、繰り返すと、「探究のプロセス」そのものの理解につながると考えている。ま

た、失敗や成功を繰り返すことで、探究そのものに取り組む姿勢をはぐくむことにもつながる上、探究活動の成果や深まりに目が行きがちであるが、実は、社会に出て本当に生きてくるのは、「探究のプロセス」そのものを、本当の意味で理解することではないかと考えている。

・探究のテーマを英語の夏休みの教材から引っ張ってきた班があった。各教科の知識が少しずつ探究に活かしている例はある。やはり、探究のテーマ設定には「知識」、「インプット」は必要である。

・知識に加えて、「クリティカルシンキング」が要になってくるのではないかと。対立する立場の考え方を両方知ることが大切。

・『わからないこと』から『答えを見つける』までが探究のユニットではなく、「『わからないこと』から『答えを見つけ、次のわからないことに気づく』まで」を探究のユニットとして捉えるべきではないか。

・探究の問いは、「自分事としての問い (me クエスチョン)」→「世の中の人にとっての問い (現代社会にとって解決が必要な問い)」に育てていく (=生徒自身が気づいていく) 必要がある。逆に、「世の中の人にとっての問い (現代社会にとって解決が必要な問い)」から「自分事としての問い (me クエスチョン)」を生み出す場面があってもよい。

・探究は「課題の設定」から「まとめ」まで一直線的に進めるのではなく、問いの修正や、問いに戻って再編成することが大切。

・探究テーマだけでなく、たとえば「三角ロジック」のような、探究の思考プロセスの手段を、教員間で共有すると教科間を超えた探究に結び付く学びが展開されるのではないかと。

・知識一辺倒、覚えればそれでよい、を脱出するには、構造として「問い→アンサー」になる構成の授業が毎回展開できるだけでも、探究のプロセスに生かせるのではないかと。

・学際領域学科というカテゴリーでも、地域的な学びを含んでもよい。

・探究においては、教員がツッコミ役・ファシリテーション役に徹すればよい。内容の知識は求められていないし、生徒も教員に知識の補完を求めてはならないという点について、生徒とも共有しておく必要がある。

・探究においては、生徒の学ぶという感覚（「学ぶ＝知識のインプット」）を解きほぐしていく（＝脱却させていく）ということが大切。

・卒業論文も書いたことがない大学生よりは、大学院生が探究に協力してくれるような仕組みを模索するのはどうか。論文の検索役だけでも買って出てもらえると、生徒の探究も深まるのではないかと。

・新学科の名称は、「文化自然探究科」を新仮称としたい。

・新学科探究イメージ

1年 1学期 御影のエエトコを「動画」や「ミニコミ誌」にまとめる。

※探究の基礎を学ぶことを目的とするが、

ゲーム要素（コンテスト形式？）で楽しんで学べるような仕掛けをする。

夏休み 夏季課題「学問リサーチ」

2学期 ミニ探究① テーマ「気候変動（仮）」グループ探究

3学期 ミニ探究② テーマ「地域×●●」個人探究

2年 1学期 地域探究プロジェクト グループ探究

2・3学期 リフレクション・フィードバック

アカデミックリサーチ（自分の最も関心のあることを探究する） 個人探究

3年 1学期 探究成果の論文化

※学期に1回は、自分の関心のあるテーマを発表する機会があると、自分が興味を持てるものを

見つけることにつながったり、モチベーションが保てたりするのではないか。

※クリエイションⅠⅡや教科の授業で、これが社会課題なんだということがらのインプットが必要ではないか。

・地域探究プロジェクトを、アカデミックリサーチの1講座として扱うこともできるのではないか。

【御影高校の学際的な学びの捉え方・再編集】

「学際」的に探究に取り組むということは、

①課題

②アプローチの手段、の2つのレベルで「学際」的に取り組むことであると言える。

したがって、その点について探究に関するイメージ図に反映させていく必要があるのではないか。

第2回カリキュラム開発会議

日時：令和4年9月22日（木）16：00～18：00

場所：神戸サンボーホール 第1会議室

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、橋口教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、土居教諭、大和教諭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内容：校長挨拶、協議

協議題：①御影セッションを踏まえ、今後の探究の在り方をどうするか。

②新学科における探究について（イメージ図の協議）

協議要旨

・昨年の文献調査をしたら？というアドバイスが反映されているグループがあった。

・発表の中で、サイクル1で新しい問いを立て、サイクル2で改善をしているグループがあり、よかった。

・サイクルを回す中で新しい問いを立てていく場合、 $\boxed{\text{①A}\rightarrow\text{A}'}$ $\boxed{\text{②A}\rightarrow\text{B}}$ の2つのパターンがあった。

①の場合、サイクル1の中で分かったこととわからなかったことが明確であり、探究がうまく進んでいる。②の場合、最初の問いがわからなくなり、まったく別の問いが立ったグループ。

・①のプロセスがうまくいっているのは、プラスチックストロー班。プラスチック→紙→シリコン…と地道に進んでいるのが良い。一気に答えに行こうとしておらず、調査・応答が非常に納得できる。ただ、結論が道徳的で自己批判的になってしまったのがおしい。一人一人が気を付けるしかないという結論ではなく、どういうシステムがあればどのような可能性が広がるかに目を向け、自分たちが主語ではない「〇〇するべきだ」という結論に導く必要がある。

・実は、こちらが想定しているような「よいポスター」がたとえできていなくとも、たとえば外部調査にでかけたり、自分の考えをまとめてグループの生徒に伝えたり、ポスター化する過程でまとめたり…、というプロセスこそが、（それだけでも、）生徒にとって良い学びになっている、かもしれない、という視点は必要だ。

★実態把握（～である）から、一步先の「〇〇するべきだ」にもっていくところまで今後もっていくのかどうか。自分たちに何ができるのかの限界が来ているのかもしれない。

・総合人文コースは、「〇〇するべきだ」にワンアクションがある。プロジェクト化を推奨してきた流れがある。

・社会人文科学は「～である」から「～べき」にもっていけるが、自然科学では「～べき」にはもっていきにくい。

・環境倫理学のほうに目を向けてみては良いのでは。SDGsに関連付ければ、結合性・包括性をもったアプローチをしやすい。(学際的になるのでは)

- ・「～である、～べき」の重みづけは問や思考のプロセスによって変わる。
- ・何のために研究をするのかに力点を置き、研究のための研究にならないようにする。伝える対象をクリアにして、誰に伝えたいのかの明確化が必要。そこに社会貢献的な意味を持たせる。
- 理系の探究は社会貢献を求められると難しいのでは。ダンゴムシ、アリ、カビ…
- 人が研究しないことという点で、意味や視野を広げられたら良いのでは。ここには要因の支援が必要である。
- ・「学際」が宙づりになってしまっている。

■探究の流れについて

- ・リサーチクエストに行くまでの時間を深めるべきだ。
- ・テーマをフリーにするかどうかは議論のポイントである。
例えば、「貧困」というキーワードを用いて、個人で考えを深めて、そのあとグループで共有してコンセンサスを得るといった流れはどうか。
- ・教員の支援は経験と知識を引き上げること。
- ・概念やキーワード(アカデミック)は、入門的な書籍から見つけるようにする。
- ・例えば、黙食の研究をしたグループは、なぜルールを破ってしまうのかという心理に目を向けていった。黙食を事例にして、どのようなルールがあれば良いのか、ルールの決定法を研究していくことも可能。
- ・結論への導き方は、テクニックが必要。論文化、ポスター化する時に型が必要だが、形にこだわらないようにしたほうが良い。
- ・生徒たちにとって必要なことは、誰かに会いに行ったり関わったりすることかもしれない。
- ・2本探究にするか1本探究にするかは今後の議論。
- ・新学科の取組は、普通科に取り入れたほうが良い。
- ・「～である、～べき」の実態把握(～である)に今まで時間をかけてきたが、考察・結論を深めるためのカンファレンスを深めることが今後必要ではないか。
- ・ストローと黙食の班は、事例として取り上げられる。

■新学科における「探究イメージ図」について

- ・次回9/28にかためていきたい。
- ・思考のプロセスのところを、「～である、～べき」に変更したほうが良いのでは。

第3回カリキュラム開発会議

日時：令和4年9月28日(水)13:20～14:10

場所：兵庫県立御影高等学校 音楽室 zoomにて実施

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、五島教諭、土居教諭、作教諭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内容：校長挨拶、協議

協議題：①新学科における探究(イメージ図の完成)

②探究カリキュラムについて

協議要旨

●新学科における「探究イメージ図」について

◎新しい探究イメージ図（提案）について説明（若松委員）

- ・図を3枚に分けた。（全体概略図、コミュニティのイメージ、探究の過程のイメージ）
- ・外向けに発出するのは、1枚にするか3枚にするかは校内で適宜相談のうえ決定してはどうか。
（→結果、まずは詳細な2枚を発出し、その後、収斂させていく予定）
- ・コミュニティの中で探究をしていくが、コミュニティも変化していく。それを図示した。
- ・継続的な探究とコミュニティの変容の図示（コミュニティの質も良くなっていくことも伝える）
- ・学際探究のゴールは、「確かな『である』から妥当な『べき』へ」とした。
- ・認識と探究の技法と共生の作法を学んでいくような学科にしていくのであればこの図に近い。

◎多層的な探究コミュニティと越境する個人・・・「越境していく」というワードが使えるのではないかな。

- 越境というワードをどのように使うか。重たいワードなので、使い方には注意が必要。
- ライトに使うかどうか。越境は「学校を飛び出してく」というようなイメージ。
- 哲学用語に聞こえないか。国語的に考えてしまうと・・・この言葉を使うことに危惧。
- 三菱みらい育成財団でもよく「越境」が使われる。生徒が学校の外に出たり、学校間交流を行ったり、学校にNPOが関わったりすることなども越境と捉えている。
- 「越境」という言葉は、文科省に対してはどんどん使うと良い。概念として使うのも良い。便利な言葉である。生徒に使う時には注意が必要。生徒に説明するときにはもっと使いやすい言葉が必要。
（越境というワードを使うことで生徒たちの行動や目標を立てる際に縛りが出てきてしまうため）
- 教員間の共通理解のために共有する言葉として「越境」を使って、生徒達には「一歩踏み出す」というような言葉を使う。

◎地域ってどこまで？

- 探究の範囲が地域。御影、神戸市、芦屋市、兵庫県というイメージ。広くとれば兵庫県内。地域外は大学、中学校、小学校というイメージだがそれらは県内、市内なのである意味地域。
- 生徒の感覚としては住んでいる地域をさす場合とそうでない場合がある。地域を地理的に説明すると区切りにくい。
- これまでの探究を考えると、今まで探究で関わってきた方々が地域、地域の外側の部分はまだ会ったことのない人というイメージ。

◎コミュニティと越境する個人？ コミュニティを越境する個人？

- 意図としてはコミュニティの説明をしたかったので、タイトルとしては「多層的な探究コミュニティ」とする。「越境」は図の中に書き込むといいのではないかな。

◎地域は曖昧にしないと難しい。「地域外の世界」を「地域外」と書き換えてはどうか。

- 「の世界」をカットしても良いかも。外部に説明するための図。暫定的にこの図を使いつつ、カリキュラムを深めていくやり方ではどうか。あまりこの図に引っ張られないようにした方が良い。

●新学科における「探究カリキュラム」について

- ・体系的に探究のプロセスを学ぶ＝積みあがる探究（メイン探究は2本実践する。）
- 全体の流れとして良いと思う。
- 3年生2学期は2年生のアカデミックリサーチのメンターをするのが良いのではないかな。自分たちの探究した経験をふまえ、それを言語化・一般化していくという意味でも、学年を越えた取組になるという意味でも、この実践はよい学びにつながると思う。テーマに関する教科横断型オムニバ

ス授業は、受動的な取組に戻ってしまうのではないか。

→テーマに関する教科横断型オムニバス授業は、探究を始める前（1年生）に持ってきても良いのではないか。

→受験勉強が本格化しはじめる時期に、メンターをすることは大丈夫なのか心配。

→学際的な探究のイメージを掴んだり、よい探究の例として扱ったりするという点でも、テーマに関する教科横断型オムニバス授業がとても良い。たとえば、良い学術論文の型は誰も教えてくれないので、自分で読んでイメージを掴んでいくことが大切なと同様に、よい探究の例を示していく必要もある。

・学際的な探究も、自分の興味関心に応じた探究も、両方できたら良いなという思いでカリキュラムを設定した。3年次2学期の進め方は今後も検討したい。

第4回カリキュラム開発会議

日 時：令和4年11月2日（水）13:20～14:10

場 所：兵庫県立御影高等学校 音楽室 zoomにて実施

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、金澤主幹教諭、五島教諭、土居教諭、大和教諭、作教諭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、協議

協議題：①新学科における探究（3年間のカリキュラム大枠の完成）

②新学科の名称案、目標案について

協議要旨

●新学科の目標案（グラデュエーションポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）を報告（橋本教諭）

●新学科のカリキュラム案（探究、実施教育課程）の策定

・軸としての総探は、総探以外の授業の中で深まっていくと思う。他の教科での学びが総探につながっていくことで学びが豊かになる。教科と探究の相互作用。新学科のビジョンに合った授業展開ができれば良い。既存の教科の授業変化が求められる。

・探究の学びが他教科に生かされることは、難しいという印象がある。しかし、新学科の軸として、それができれば、生徒へも浸透していくのではないか。

・委員の教員は学科のビジョンが頭に入っているが、それ以外の先生方にどのように浸透していけばよいのか。探究での学びをどのように教科に生かしていくのか。

・生徒たち自身が生活の中で問いを出していくという姿、「問い」を育てていくという発想を教科の中でもつ必要がある。「問い」と「応答」を意識した1時間の授業や単元の中であると良い。

・たとえば、ある中学校の歴史の授業でも、空欄を埋めていくことはできる生徒も、意見を問われる問題は答えにくそうだった。正答主義を感じた。発想を変えていくことが大事。

・3年生の2学期に2年生のアカデミックリサーチのメンターになるのはとても良い。

・教科書が大きく変化している。探究をしながら授業を進めていくスタイルになっている。自分の言葉で表現できるように考えられるような状況が生まれやすい。

・(兵庫型 STEAM の)STEAM の E (English) の部分をどう新学科に関連付けさせるか。本校の隣には国際科のある学校もあるので、御影の国際理解教育をどう推進するかがポイント。探究英語の扱いも含めて。台湾の高校と zoom でつながって、英語で探究発表を行う予定。

・英語のディスカッションは難しい。2年生の3月のほうが良いのでは。

- ・近隣の国際科高校の事例は？
- ALT が 6～7 人いる。英語の授業が英語で行われていることが多い。海外の生徒を集めて提言を作り上げるといったイベントを実施し、生徒たちもそれに向けて頑張ろうとしている。モチベーションはかなり高い。
- 英語の発表はできても、英語のコミュニケーションは難しい。
- 英語で表現することの抵抗感を減らす。課題研究の内容に目を向ける。
- ・クリティカルシンキングの内容を検討するうえで八田幸恵氏の『教室における読みのカリキュラム設計』は参考になるかも。
- 新学科の名称案を策定
- ・在校生のアンケートに基づいて検討していけばよいのでは。広報対象の中学生に一番近い高校生の感覚を大事にしたい。
- ・カタカナを使わずにわかりやすいものが良いのではないかと思う。
- ・カタカナのポップさも良いかもしれないし、内容がわかったほうが良いのか、どこを大事にするか。インパクトを重視するのか。
- ・クリエイション学科は？
- ・超領域にからめた学科名はある？トランス？
- トランスはあまり良いイメージがない。
- ・クロスと超領域は違う。クロスは 2 本が交わるイメージが強い。

第 5 回カリキュラム開発会議

日 時：令和 4 年 12 月 7 日（水）13：20～14：10

場 所：兵庫県立御影高等学校 音楽室 zoom にて実施

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、野原教頭、橋口教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、五島教諭、土居教諭、大和教諭、作教諭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、協議

協議題：①今年度の事業全体の進捗状況の確認

②次年度の探究の計画

協議要旨

- 新学科のカリキュラムの原案を提案・説明（橋本教諭）
- 来年度入学生の総合人文コースのカリキュラムをベースにして、学科ならではの科目を設定している。学際探究を行う CROSS I・II・III や、英語や国語で独自の科目を設定。
- 何を「学際」とするかという議論はこの場で進んできた。イメージ図についてはまだ外に出していない。学科の設置が認められたら広報していく。
- 学科独自の科目、探究活動、各教科の学びが往還するような学科。
- CROSS I とクリエイション I の内容について。
 - ・クリエイションの位置づけについて…学校の外に出ていくことに価値がある。学校以外での場、学校の外に目を向けて探究していくことが大事。今のクリエイションの形を続けたらいいと思う。
 - ・論拠のない探究が課題。各教科で「事実・論拠・主張」の認識のフレームワークを強化していく必要がある。
 - ・「対話型論証ですすめる探究ワーク」がオススメ。
 - ・クリエイションの内容が良い。ただ、生徒たちがその体験を 1 日 2 日で終わらせるのではなく、

日々の探究にどう生かすかが重要。自分自身の探究にどう生かすかが大事。この体験がどのようにいきているかを問うアンケートの質問項目が必要ではないか。

- ・ポートフォリオをうまく使う。
- ・本物の体験をいつ体験するのか。地域のリーダー論講座が2年生の中ごろに設定されているが、探究の初歩としても地域のリーダー論講座があっても良いのではないか。
- ・クリエイションは2学年混ぜて取れるようにしてはどうか。そうすると先輩が頑張ると思う。
- ・求める生徒像は2段階求める像が教員側に必要。「今身に付けてほしい力」と「未来に身に付けてほしい力」をもう一度整理する必要がある。
- ・論拠のない主張ばかりの探究にならないようにするには、探究の活動の中で、事実データ→論拠→主張という流れを学んでいく必要がある。最初に「型」を伝える。
- ・逆に事実、データばかりで主張がない探究発表もある。そういう場合は、「問い」を鍛えたほうが良い。問題意識がないので、事実に向き合えていない可能性がある。

第6回カリキュラム開発会議

日 時：令和5年1月25日（水）13：20～14：10

場 所：各自オンライン（zoom）にて参加

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、野原教頭、橋口教頭、土居教諭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、協議

協議題：①今年度のカリキュラム開発会議に関する報告内容の共有・確認

②次年度の先行実施の在り方について

協議要旨

●今年度のカリキュラム開発会議に関する報告内容の共有・確認（橋本教諭）

●次年度の先行実施の在り方について

新学科での探究を見据えた来年度の探究Ⅱについて

・課題について、解決策を考える前に、「なぜ現状そうなのか？」ということについて調べる。皆がやろうとしているのにできない『背景』の複雑さに目を向けられるようになると、探究活動に厚みが出る。

・誰もが思いつくような解決策は、なぜうまく機能していないのか、といった視点で情報収集していく。

・身近な課題を「入口」にして、世界へとつなげていく。

・前年度までの総探Bの課題探究では、確かに困っている人がいて、解決に向けての提案として高校生ができることがある、という課題を選択するように指導してきた。提案だけでなく、具体的に行動することが大切だとしてきたが、その結果、身近な問題が多く、広がりにくかった。

・身近なことから世界に考えが広がっていくこともあるので、引き続き大切にすれば良いだろう。高校生の行動も、例えば、「区役所の方に提案する。そのためには、どのようなプレゼンが良いのかを考える」といったことも含めて考えればよい。「身近」や「アクション」が広義にとらえていく。

・「行動してどう広めるのか」だけではなく、「なぜ広げられないのか」「どう広めていけば良いのか」といった視点が必要。

・情報を集めるにあたって、「どのような情報が必要か」ということと、「どのように情報を集め

るか」ということが大切である。Google Scholar や CiNii など、情報源を紹介するのはすぐできるが、動画等の手段で紹介した方が良さそうだ。

・情報収集については、授業の中で調べてみる経験までさせた方が良さそう。できれば夏休みより前に。初歩的なことにつまずいていることが多い。

対話型論証モデルについて

- ・はじまりは「問い」からの方が良い。問いへの応答がねじれないようにしていくことが必要。
- ・反駁の部分の反対意見は、ない場合も多い。「想定されるツッコミ」くらいの方が良い。
- ・論点が何かわからない場合は使いにくい。自分の主張を強化していくものであり、固執してしまう場合もある。
- ・「論点」という言葉は「問題意識」とするほうが良い。「社会って複雑だよ」「何が争われているの?」「誰と誰が何を争っているの」といったことを考えられるようにするために対話型論証モデルを使う。
- ・対話型論証モデルは、はじめに提示するのではなく、調べていく過程や、まとめて使うほうが良いかもしれない。
- ・生徒には提示せず、教員側がそれを意識しながら指導していく、という使い方もある。

今後の探究活動の在り方～昨年度の生徒ポスターをもとに～

合意形成のポスターについて

- ・文献調査をしている点は良い。ただし、調査2ではなく先にする方が良い。先に文献を読む方がラクである。
- ・「仮説」よりも「問い」の方が良い。「仮説」とすると固執してしまう。「仮説」を立てると、その「検証」になってしまい、そぐわないものもある。
- ・仮説から問いが生まれる場合もあるので、仮説はあっても良い。
- ・2回目の動機が問いの形になっている。「なぜ同調圧力が気になったのか」など、背景にはいろいろあるはず。問いになる前のモヤモヤを書いてほしい。
- ・合意形成のための手段としてすぐに思いつく「多数決」がうまくいっていないのはどういうところ?という問いのほうが面白い。
- ・ネット検索する際に、「多数決」という単語だけで調べてしまうと狭いものになる。「多数決は、民主主義との関連が深いよね」といったつながりを、教員側が提示できれば良いのだが、難しい。
- ・調査は文献調査のみでも、批判的に読めるのであれば可能である。
- ・文献調査には「広げる読み」と「深める読み」がある。「広げる読み」は、全員に必要なだが、「深める読み」をしていけば、アンケートなどがなくても良さそうだ。

プラスチックストローのポスターについて

- ・リサーチクエスチョンがあることは良い。
- ・仮説の書き方が難しい。仮説の焼き直しが考察になってしまっている。
- ・せっかく調査をしているのに、調査のまとめができていない。「今後、どうしていくのか?」といったことを深めていくために文献調査が有効である。
- ・そもそも、マイクロプラスチックの定義がない。

授業のためのオリジナル教材冊子について

- ・ワークシートなど、生徒に説明をしたり、生徒が考えを深めていくための部分と、振り返りのために記録する部分の両方が必要なのではないか。
- ・日々の記録をとにかく集めておくボックスをつくり、学期に1回程度はそれを整理して振り返り、語るという時間を取れば良い。成果を集めておくと、1年を振り返る時に達成感がある。
- ・ある程度まとめて振り返ったことを記録するページは、冊子にあっても良いかもしれない。
- ・ポスターなどでの探究の成果の発表だけでなく、同級生や後輩、先生たちに探究の過程について語り聴き合うという場面をつくるのも面白い。コミュニティづくりにもなる。
- ・記録に残す意味を実感できる機会をつくると良い。自己肯定感の向上にもつながる。

校長より

- ・探究は進路実現に使えるという視点もちろん大切だが、「楽しい」と思えることが大事である。学びを自走できる生徒を育てるために。

第7回カリキュラム開発会議

日 時：令和5年2月8日（水）13：20～14：10

場 所：兵庫県立御影高等学校 第1会議室

出席者：若松委員、鎌田委員、森本校長、野原教頭、橋口教頭、栗林主幹教諭、金澤主幹教諭、五島教諭、土居教諭、大和教諭、作教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、協議

協議題：①今年度のまとめ、②来年度の課題

協議要旨

- 今年度の振り返り（本会議の成果のうち、文科省事業の報告書において特筆すべき点について）
 - ・第1回のカリキュラム開発で出た意見から、第7回まで、かなり案が変わっていた。これは柔軟に会が進んでいったことの表れである。モデル図も検討を繰り返して深まり、形になった。ここまで柔軟に意見が交換できることは珍しいのではないか。
 - ・学際を一からとらえ直すところから始まったのが良かった。
 - ・カリキュラム開発会議の位置づけが良かった。
 - ・クリエイション講座については、日程調整の難しさや、時間外実施のため参加者が少なかったことが残念だったが、参加した生徒にとっては非常に良い機会となった。
 - ・クリエイション講座は「本物に触れる」という視点を大切にできたのではないか。地域に焦点を当てた講座展開ができた。社会科学の講座は立てやすい。
 - ・探究の力量をどうつけていくか、豊かな好奇心を耕すためにクリエイションは有効である。
 - ・クリエイション講座では普段したことがないこと（斧を持つ、木を切るなど）ができるところに価値がある。
 - ・御影セッションの後にカリキュラム開発会議を行うことができて良かった。生徒の発表を見たことで、議論に現実味が増した。

- 来年度の課題（今年度解決できなかった、あるいは、今年度明らかになった次年度に向けた課題について）

クリエイション講座について

- ・自然科学の講座を増やす。研究者の日常を見る機会があってもいいのでは。
- ・人と自然の博物館では、里山でブランコを作る講座もある。そのような楽しめる講座が必要。
- ・言語化でない心の動きをどう見える化をしていくか。
- ・クリエイション講座での生徒の変容を情報として出すことが必要。
- ・報告書では、数値を出すことも大事だが、生徒の変容の物語があったほうが、読み手に感動を与えるのではないか。
- ・探究のテーマが変わっていたその変容を報告書にまとめておく必要もある。
- ・クリエイションが生徒の土壌を育てるのに一番効果があるのではないか。変容は長期スパンで見ることがあるが、講座を受けることで問題意識が変わっていき、問題意識の質が高くなる。探究において、結論はどうであれ問題意識の質が高まることが重要。
- ・クリエイション講座を受けて、進路を考えるきっかけになっている生徒もいる。大学への学びにつながる、将来像を見つけていけるような講座であり、学科のアドミッションポリシーが必要。
- ・学科の理念を考える。(キャッチコピー)やはり、企業は企業理念を大事にしており、それを繰り返し口にしていく。御影高校もその理念が必要である。クリエイションの意義を教員側がしっかりと持っておく。その先の生徒の学び、感じることは自由度が高くて良い。計画できないものであって良い。
- ・生徒の学びについては、実際どうだった？と、生徒と会話をして、生の声を聴くのが一番良い。

課題研究と探究活動の違いについて

- ・「仮説」と「問い」は違っている。「問い」は、広く深く、仮説より大きい。
- ・仮説、検証にこだわると、バイアスがかかってしまい、探究が「検証できた・できない」で終わってしまうことがある。それを防ぐために、仮結論を立て、生徒と教員で話を深めて、問いに戻していく過程が必要。
- ・生徒の傾向として、問題意識があってもそこから問いを立てることが難しい。問題意識を問いに変換する力が弱い。(主張はあるのに問いが立てられていない。問いの形になっていないなど)
⇒探究ノートに常に問いを記入する欄をつくり、いつでも問いが目に入るようにしておく必要がある。

生徒の探究活動をより活発にするために

- ・子供たちの文化は変わってきている。省エネ傾向。
- ・グループの空気が大事。コミュニティ文化を学校で作っていく。(話し合いを深める方がかっこいい、おもしろいという文化)
- ・物事を「深める」ことの意味を、新しいことを横に増やしていくと思っている。一つのことを深掘りすると思っていない。物事を縦に深めていくことはしんどいので、それを避ける傾向があり、知的忍耐力をつける必要がある。
- ・問いを縦にとらえて、問いから結論に進み、また問いに戻るという思考を繰り返し、深掘りをしていく。
- ・生徒の姿の共有を教員間で行う必要がある。印象的な生徒一人二人で構わないので、見取りの共有を行う。
- ・探究の評価をしていくうえで、ルーブリックにこだわりすぎない必要がある。ルーブリックをつくるのが目的にならないようにする。
- ・探究活動に身体的な動きがあってもよいのでは。例えば、「今日はどこで作業をしてもいい日」な

ど、空間を大切に心身ともにリラックスした状態で活動をする。また図書館をしっかりと活用したほうが良い。探究に関する文献を図書室にそろえる。

- ・学校を離れて、街を歩いて町の問題を発見するのも良いのでは。空間が大切。
- ・生徒のニーズに合った進め方も必要。一人の時間、みんなの時間を計画的に取り入れる。教員は、ファシリテーターとして生徒と関わる。

探究ノートについて

- ・アラクトモデルを取り入れた振り返りを行う。振り返りの仕方を分ける。活動内容によって振り返りのバージョンを変えノートに記載してはどうか。
- ・アラクトモデルを取り入れるとかなり時間がかかるので、その要素を取り入れた振り返りを行うのはどうか。
- ・振り返りは毎時間行うが、3から5分程度でできるものにする。
- ・常に、「問い」を見える化しておく。

第1回コンソーシアム会議

日 時：令和5年12月2日（水）14：00～16：00

場 所：兵庫県立御影高等学校 第1会議室（対面での実施と並行して zoom を用い、対面と web とのハイブリッド開催）

出席者：藤澤委員（神戸大学文学部）、伊藤委員（神戸大学国際人間科学部環境共生学科）、石田委員（兵庫県立人と自然の博物館）、吉川委員（NPO 法人 Colorbath）、吉田委員（株式会社 ISA）、飛田委員（NPO 法人コミュニティ・サポートセンター神戸）、尾花委員（株式会社ウエルアップ）、蔭木主事（県教委）、森本校長、橋口教頭、橋本教諭、飯川教諭、竹中コーディネーター

内 容：校長挨拶、管理機関挨拶、自己紹介、資料説明（本事業説明）、協議

協議題：①これまで各団体・期間が実施していただいた事業の成果と課題

②新学科での取組に向けての協議－各団体・機関が実施可能と思われる事業や支援

③新学科設置に向けての要望・意見

協議要旨

- ・吉川委員

数年前から携わっている。

本校の生徒は、素直・主体的・グループワークにも積極的な印象。

生徒の態度は、普段の学校生活が反映されていると感じる。

中学生対象にアフリカと生徒だけで会話をさせてみるというプログラムも展開中。

中学生などからの問合せ、多少の「無礼」は気にならない。

ただ、課題を「やらされている」感でやらないことが大事だと考えている。

普段意識していることは、与えすぎないこと、余白を持たせること。

ワークショップは、「決めすぎず」何を話すかも含めて、生徒たちに投げる。

目的と手段をきちんと意識して取組ませる必要がある。

一方で、やりっぱなしではなく、共有していくことも大事。

大人が手を話していく＝余白がある方がいいかと思う。

マラウイで病院の活動の支援をしていると、英語の力だけでなく、生物や太陽光の知識や、算数の力を使う。

世の中の課題は、確かに単独の知識だけでは、解決し得ない。
多様な年代、多様な国や地域の方とコミュニケーションをとるという実習は必要。
どこまでが自分の世界とするか、当事者意識を持って関わっていきける世界を広げる後押しができる
とよい。

・飛田委員

7～8年間、本校に携わっている。
2年3年になってくると、ワークショップにも慣れてくる。
人と人をつなぐ中間のサポートをしている。
NPO法人は、東灘区100団体、灘区に80団体ある。
仲間を増やす、共感を広げることがwin-winになりうる秘訣。
現状、教育や医療、社会等、問題に直面している人は地域にもたくさんいる。
リアルに社会課題に接する人（たとえば、認知症の方への対応をしている人）にフォーカスした課
題研究を行っても良いのではないか。
多様な人と接しうる機会を提供してはどうか。地域に出て他流試合を行うイメージ。

・吉田委員

会社で扱っている学びのプログラムは、まさに御影高校が目指している方向と合致する。
頑張る状態、思いを続けさせたい。
最大瞬間風速は良くても、3日坊主を防ぐ必要がある。
何か少しでも動き出してごらんというメッセージを大切にしている。
セルフディスカバリーチャレンジ、ネクストジェネレーションチャレンジ、フューチャーリーダー
プログラムなどを展開中。
探究サイクル体験のタイミングで留学生に入れる環境を作るのが理想ではないか。
生徒をどう自走させるか。いかに自走する生徒を作るか。
受け身にしない。与えすぎない。罅線を引かずに白紙で渡す。
ポートフォリオ入試をうまく活用する。
自由にやらせてみて新聞に取り上げてもらう。eg シャッター街を復活させる取組

・尾花委員

今年度クリエイション講座を担当した。
ワークショップも実施したが、インプットが多かった。
全員が興味を持つコンテンツを用意できればよかった。
材料、あるいは、構造物のどちらかに絞ればよかった。
文理一統計、データサイエンス、コンピュータの活用が求められる。
今の子どもたち・若者は、「まず、やれない」のが問題。
興味があるところから始めて見るのが大事ではないか。
そして、誰が偉いというのではなく、誰とするかが大事。
リカレント教育にも携わっている。その重要性を感じている。
教えるということは、社員のスキルアップにつながるもので、ありがたい機会でもある。

・石田委員

本校の環境科学部によるキノコ展は、人気のコンテンツとなっている。
年々生徒の主体的な取組として実践できているように聞いている。
地域というのは具体的にどのような範囲を想定しているか。その範囲を広くしていくことで、普遍的な課題にアクセスできるようになるのではないか。
高校生が新入生に発表するような機会を設けてはどうか。
先進モデルになるような新しい取組をし、他の学校との差別化できる内容を新学科に期待する。

・伊藤委員

環境に関する研究の方法について、どういう範囲で許容するか。
自由度のある探究をさせてみると良いのではないか。
真理の探究を実施するのは、安直な考えではできない。根気が要る。
科学の中でのクリティカルシンキング、厳しさ、粘り強さを育ててほしい。
大学では3年4年で、具体的な課題に絞っていく。
4年でどのようにアプローチするかを決めていく。

・藤澤委員

地域探究プロジェクトに大学の授業の一環として関わっている。
教職科目として実践している現在の取組が、大学生にとっての地歴科教育論にとって大きな学びになるか。
先輩一後輩の教え合いというプロセスは双方にとって利があるのではないか。
今後、地域課題と理系的課題とを実施することとなれば、バランスについて懸念している。
文学部の学生が、理系の生徒にどうかかわっていくか。
アクティブラーニングが叫ばれており、教科書を教えるという文脈でないことが、貴重な機会となっている。
高校では基礎的な学びを詰め込む+考える機会も大事にする。
これらの学びは、大学での学びに、そして、社会での活躍につながる。
大学で問題意識を大事にしつつ、学べるようになるのではないか。

②先行実施事業（クリエイション講座）

■実施にあたって

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の採択校に選定されたことを受けて、新学科のカリキュラムで展開予定の「クリエイションⅠ」の実施内容を先行実施するため、令和4年度から開講する。新学科開設準備年度に当たる令和4年度はモデル講座として地域の企業や事業者等と連携し、通常授業の時間外に特別講座を設けて地域探究学習の検証材料とした。

■クリエイション講座の実施プロセス

0 特色教育推進部（御影高校担当教員）によるモデル講座設定

夏季休業中に実施したA～C講座、および、ネスレ社より高校に直接依頼があったG講座は、担当教員がコーディネートを実施した。

1 連携先候補の選定

担当教員の希望をもとにコーディネーターが神戸市内の企業を選定し、一覧表を作成した。

一覧表をもとに、担当教員とコーディネーター間で、交渉の優先順位を決定した。

※選定にあたっては、STEAM の各カテゴリーのバランスに加え、ナショナルブランドからベンチャー、個人事業主、老舗企業のバランスも考慮し、講師陣の多様性やキャリアモデルも提示できるよう選定した。

2 コーディネーターによる連携交渉

適宜、担当教員と一緒に連携先に訪問したり、コーディネーター単独で交渉したりした。

3 連携先との講座プランシートの共有

実施日等を含め、連携先の承諾が得られたら、依頼書を作成し、連絡した。その際、全体の事業設計における本講座の位置づけを説明するとともに、プランシートを講師に渡し、大まかな基本設計を依頼した。

その後は、講座プランシートをもとに、内容の目的を共有し、タイムスケジュールや準備物等実施に際する注意点等を把握し、担当教員と共有した。

4 講座プランについて、連携先と高校担当教員との調整

5 受講生徒の募集

講座内容がまとまったら、コーディネーターが作成した告知チラシを約1ヶ月前に配付した。なお、参加希望者を1年生全クラス、2年生全クラスから募ることとした。

※10月実施分までは、高校担当教員が告知チラシを作成した。

※一部、総合人文コースの生徒を対象とした

6 講座の実施・引率

7 受講生徒へのアンケート・検証

アンケートについては、高校担当教員が実施した。

■クリエイション講座の実施概要

A	デザイン思考ワークショップ	8月1日 23日 29日	吉田大作氏 京都芸術大学 准教授
<ul style="list-style-type: none">・場所 8月1日（御影高校）、23日（オンライン）、29日（京都芸術大学）・参加者 6名・概要 京都芸術大学吉田准教授をお招きし、探究にもつなげる「デザイン思考」を軸に展開する講座を実施。初日は概要に関する講義に加え、「デザイン思考」を踏まえた探究活動につながる実践的なワークショップを実施するとともに、次回以降の課題が提示された。2日目は、前回提示された課題の進捗状況の確認、および、指導をオンラインで実施していただき、3日目は、各自の課題の成果を京都芸術大学にて発表し、各自の発表に対する講評をいただいた。・学びのポイント 今後の社会で必要とされる人となるために、どのような力をつけることが必要かという点について根本から問い直し、今取り組んでいる探究活動がどのようにそれに寄与するのか、また、デザ			

イン思考がそれらにどのように関わるのかということについて考える機会となった。そして、アイデア創出に関する実践を通じ、情報収集力や企画力の向上にもつながった。

・生徒の感想（抜粋）

このクリエイション講座に参加して、今までには自分の中にはなかったような視点で物事を捉えられるようになったり、社会や自分の未来について見つめ直すことができたりした。今までの自分は、社会的に騒がれているような問題に対して自分一人が何かを行動を起こしても何も変わらないと思っていたが、実際に色々な現場でできることをしていच्छる先生のお話を聞き、身近なところで自分にできることをよく考えて行動することが問題解決の小さな一歩になると感じた。まずはそういったことを意識して生活できるようになりたい。（2年生徒）

B	「インフラを守る」を仕事にする	8月 2日～3日	尾花弘教氏 ウエルアップ社長 他2名
---	-----------------	-------------	--------------------------

- ・場所 8月2日（御影高校/国道2号）、3日（阪和自動車道 和歌山インター付近工事現場）
- ・参加者 11名
- ・概要

初日は、インフラや橋梁に関する講義のパートと、橋を造ったり、実際にコンクリートの調査を行ったりするワークショップのパートとを組み合わせながら展開。2日目は、NEXCO西日本の協力も得て、橋梁を最先端の工法で掛け替えている阪和自動車道の工事現場で見学会を実施。道中のバスの中でも、たくさんの橋梁を見ながら、それぞれの特徴に関する講義を実施。

・学びのポイント

「今も橋梁は造られ続けるが、現在ある橋梁の劣化は止まらない。今後は、今ある橋梁を守るという視点で仕事をしていくことが大切である」という話は、生徒に感銘を与えたようである。また、協働しながら、釘やねじを使わず、渡ることのできる橋が完成した際は、歓声があがった。工事現場見学では、普段立ち入ることのできない場所への訪問が刺激的だったことに加え、朽ちているコンクリートの現状を目の当たりにしたことでインフラの重要性を再認識するとともに、NEXCO西日本の若手職員から説明を受けたことが生徒のキャリア教育にもつながった。

・生徒の感想（抜粋）

今回の体験はとても思い出に残る2日間でした。1日目の実習では高校近くの地下道の状態を自分で点検する貴重な体験をして、地域の問題の実状を自分の耳で体感することができました。2日目は実際の現場に立って作業員の方の仕事の大変さを感じる事ができました。全体を通して1番印象に残っているのは2日目の解散後に尾花さんとお話しさせていただいた時のお話で、建築業のことについてどうすれば皆に知ってもらえるかを熱心に探究されている姿に感動したことです。この体験をたくさんの人に伝えていきたいです。（1年生徒）

※上記生徒はこの体験を自身が所属する新聞部発行の「御影高校新聞」にて記事にした。

C	生物多様性から海や山の環境を考える	8月 8日～10日	大西伸弥 本校理科教諭
---	-------------------	--------------	----------------

- ・場所 佐津海岸（兵庫県美方郡）
- ・参加者 10名
- ・概要

臨海実習をとおして、海の豊かさについて考える講座であった。海の生物を採集・観察し、生物多様性について学んだ。そして、海と山とのつながりについて深く考察した。また、ウニの人

<p>工授精実験をとおして、生物の初期発生について学びを深めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学びのポイント <p>この講座では「キレイな海」と「豊かな海」の違いを考えることによって、海の生物が暮らしやすい環境について考察した。また、生物多様性が豊かになる環境条件についても深く学んだ。また海と山はつながっており、山の環境を守ることが、海の環境を守ることに繋がっていることを学んだ。</p> • 生徒の感想 <p>多くの卵と精子から受精卵ができて、そして、育っていく過程で、多くの卵や精子が死んでいくことを学び、生き物が育つことの大変さを改めて実感した。また、釣りのときには多くの魚がエサに寄ってきているのが見えたけれど、簡単には釣れなかった。普段、スーパーに行けば色々食材が手に入るけれど、実際に食料を調達することは大変なことだと改めて感じた。それから、海の中には様々な海藻や魚がいて、近くの山には色々な草木が生えていて、自然の多様性の良さを実感できて良かった。（2年生徒）</p> 			
D	imagination の練習ワークショップ	10月20日	玉木浩子氏 株式会社 528 社長 他 2 名
<ul style="list-style-type: none"> • 場所 御影高校 • 参加者 30 名 • 概要 <p>神戸発のベンチャープログラム「アンカーKOBE」から生まれた会社 528 さんによるイマジネーションを広げる講座。知識や演奏としての音楽ではなく、既存の枠組みの開放や自己と向き合うための音楽としての実演である。例えば、音と聞いて感じたことを自由に色鉛筆で描くといった五感を横断した表現に取組んだ。現役高校生で経営者の一人である玉木カレンさんによる自分と向きあい思いこみから脱するためのワークショップも実施。</p> • 学びのポイント <p>音楽はこういうものだ、という既成概念から自分自身の想像力を解放する感性教育の機会となった。問いに対してアウトプットする内容に正解がない、あるいは自分自身が感じたことは全て正解であるという、体験を受け取り、味わう学び。また同年代の高校生が起業しているという事実もキャリア教育につながった。</p> • 生徒の感想（抜粋） <p>私にとって今回の体験は、自分について改めて考えることができた貴重な時間となりました。まずマインドの実験を行うときに、私たちと同年の女の子が堂々と前でお話しできていてほんとうにびっくりしました。またマインドが何かを調べている実験なのに、答えはわからないという結果を述べていた所が新鮮でした。次に音楽を聴きながら絵を見て、自分でお話を作るのは、人と被らないような素敵なお話を作らないといけないと勝手に思って難しく感じていましたが、自分が作りたいように作るべきだ！と思うとなんだか気持ちが軽くなって簡単に楽しく作れるようになっていきました。最後の this is me. では、2 時間で学んだ全てを凝縮させてみんなで楽しく表現できたのでとても良かったと思います。私にとってとても楽しい時間になりました！（1年生徒）</p> 			
E	ほかの人におすすめしたくなる珈琲	10月20日	萩原英治氏 萩原珈琲取締役

			他 2 名
	<ul style="list-style-type: none"> ・場所 萩原珈琲港島工場（神戸市中央区） ・参加者 18 名 ・概要 <p>御影高校卒業生が社長を務める萩原珈琲の取締役萩原英治さんと焙煎士による焙煎工場の見学ツアーとワークショップを実施。日本で初めて炭火焙煎を確立した萩原珈琲さんのレクチャーのもと焙煎や遠赤外線による効果が風味にどう影響するかを座学にて。また、珈琲豆かすの再利用やスマートボトルによる DX の事例、地域とコラボしたドリップ珈琲の企画などを紹介。ワークショップでは質問が多数挙がり意見交換が行われた。</p> ・学びのポイント <p>地元の老舗企業がどのように持続可能な経営を展開しているか？また企業の社会貢献が地域とどう関わりをもっているかを学んだ。同時に、普段見る機会のない焙煎工場で実際に工程を見ながら焙煎の専門職から科学的な解説を学んだ。</p> ・生徒の感想（抜粋） <p>テレビで見るような工場を実際に見るのは初めてで、匂いとか音の響きとか、現地でしか感じられない温度を体感できてとても良い経験になりました。コーヒー作り以外の面で、麻活などのことを萩原さんは小さなこととおっしゃっていましたが、一つ一つの活動に循環を意識している立派な活動だと思ったし、萩原さんの生物専攻が生きてるなと感じました。自分も、将来こうやって学んだことを社会に還元できるような思考力を身につけたいと思いました。（2年生徒）</p> 		
F	実社会の課題をテクノロジーで解決！	10 月 20 日	吉永隆之氏 UIJ ディレクター 他 2 名
	<ul style="list-style-type: none"> ・場所 御影高校 ・参加者 17 名 ・概要 <p>神戸市のプロジェクトから社団法人として独立したアーバンイノベーションジャパンさんによるテック思考をもとにしたワークショップを実施。全国の自治体の課題とそれを解決する IT ベンチャーとをマッチングする会社による課題解決事例を紹介。神戸市職員で地域課題と向き合ってきた秋田大介さんをオンラインでつなぎ、神戸市の水素活用の事例を紹介しながら環境問題の現状をレクチャー。その後複数班に分かれ環境問題を身近な取組に変換していくワークショップと各班からの提案発表を行った。演劇、動画、スライドなど発表方法は多彩であった。</p> ・学びのポイント <p>デジタルトランスフォーメーションにおける課題理解と目的に応じたアイデアの組立て方をロジカルに実践した。短時間でアイデアをまとめブラッシュアップし発表するという一連の流れを完遂。100%の完成ではなくとも決定し表現する大切さを学んだ。IT という手段を活用するための「考え方」の基礎を体感した。</p> ・生徒の感想（抜粋） <p>今日は予想以上に楽しい講義だった。今、地球に危機が迫っていることは知っているけれど、そこまでちゃんと考えられていない自分がいた。その問題に、秋田さんの話を聞いて再確認できてよかった。また、その話題をさらに広げ深めるペアワークでは、うまく自分の考えを引き出させていただき深い意見を出せた。そのあとのチーム活動ではあまり活躍できなかった。チームメ</p> 		

<p>イトと講師の方が中心として話を進めてくれてかたちになった。自分の意見をしっかり言わないとこういう活動の意味が薄まってしまうから、次は意識していきたい。発表は楽しめてできて、他の班の発表も笑いながら見られて、新たな発見もあって楽しかった。この経験を意味のないものにしないように授業では積極的に意見を出したいと思う。（1年生徒）</p>			
G	ネスレ日本本社で地球環境保全について考える	10月31日	<p>武藤寿旭氏 ネスレ日本株式会社 シニアアシスタントマネージャー 他1名</p>
<p>・場所 ネスレ日本株式会社 本社オフィス</p> <p>・参加者 37名</p> <p>・概要</p> <p>昨年度、探究活動の一環で、生徒がお世話になった神戸市環境局から連絡があり、神戸に本社を置く、ネスレ日本株式会社と神戸市がタイアップして取組んでいる環境活動（古紙回収）に、本校が協力をするという形で、講座が実現。ネスレ日本株式会社の本社オフィスにて、神戸市環境局の古紙回収の現状に関する講義やネスレ日本株式会社の取組についての講義の後、生徒のワークショップを実施し、グループごとに発表した。</p> <p>・学びのポイント</p> <p>本社オフィスのオープンスペースでワークショップができたということは、生徒にとっては大変刺激になった。新たなアイデアの創出には、場の設定も必要な要素であるということを確認できた。また、ワークショップの際には、ネスレ日本の方・神戸市環境局の方・本校教員が一斉に同一の班の指導を行う場面があった。それぞれの話を聞いた生徒にとっては、各々の立場から見た捉え方の違いについて考える機会となった。</p> <p>・生徒の感想（抜粋）</p> <p>僕は今日の活動で、神戸市は数年前までゴミの排出量が政令指定都市ワースト1位だったということを知りました。しかし、同時に、神戸市ではそれに対するゴミの分別などの対策で排出量を平均まで下げることができており、僕はみんなの努力次第でまだまだ排出量を下げることができると思いました。またテーマ発表では、大胆な発想で受け入れられないものでも実は政策に取り入れられていたので、たくさん案を出すことが大切だと感じました。（1年生徒）</p> <p>まず驚いたのはオフィスの綺麗さで、会議室のような場所を予想していたので、最初に部屋に入った時には今日はこんなところできるとか衝撃を受けました。いつもと違う環境だったこともあり、グループのディスカッションでは普段の授業よりも、みんながたくさん意見を出し合っていて、短時間だったけどけっこういい内容の発表ができたと思います。（1年生徒）</p>			
H	神戸の里山で探索！多様性とランドスケープデザイン	12月15日	<p>今津修平氏 建築設計事務所 Muff</p>
<p>・場所 IMAYAMA（神戸市北区）</p> <p>・参加者 15名</p> <p>・概要</p> <p>神戸市の建築家今津修平さんが購入し、開墾している「IMAYAMA」へバスで移動。なぜ山を購入するに至ったかまたその際に活用した市の補助金の内容、山を開墾してからの意識の変化等をお話いただき、実際に雑木林の間伐作業を体験。指導を受けた上で、どのような「山のデザイン」にするかを意識しながら作業を進めた。後半は間伐した材をファイヤーピットに運び、火起こし</p>			

と薪割り班に分かれて作業を進めた。起こした火で焼き芋をしこみ試食。さつまいもはこの山の畑で収穫したものである。帰校後に、講座の振り返りを行った。

・学びのポイント

空き屋問題、放棄地、放棄山林の問題を学ぶとともに、その解決案として「IMAYAMA」のようなプロジェクトによる活用があることや、山は手入れすることによりデザインされて生きた山となることを学んだ。また作業によるチームビルディングの側面もあった。

・生徒の感想（抜粋）

普段は眺めることしかない山がしっかりと管理されて維持されていることを改めて実感しました。ランドスケープデザインの中でも日頃から耳にする「空き家問題」「食料自給率問題」についても絡めて、これらの問題をより身近なものとして考えることが出来ました。また、神戸市が実際に実施している補助金の話など聞いてみないと分からないことも教えてくれました。山の良さを満喫しながら保全について考えられるいい機会になりました。（2年生徒）

I	北野のカフェで想像する！架空のメニューづくり	12月15日	濱部玲美氏 株式会社 KUUMA 社長 他1名
---	------------------------	--------	-------------------------------

・場所 カフェ汀

・参加者 6名

・概要

神戸市の編集会社 KUUMA のディレクターであり、食とアートの交差点「カフェ汀」のオーナーでもある濱部玲美さんを講師に架空のドリンクメニューづくりを体験した。まず昆虫をモチーフにしたアクセサリープロダクトやディレクターとしての仕事を紹介いただき、「もし昆虫がカフェのお客さんとしたら」というテーマ設定でどんなニーズに応えるかを想像するワークショップを実施。多種多様なシロップを素材にレシピを考案。実際にドリンクを試作して試飲した。

・学びのポイント

「編集」視点や、顧客志向の視点から想像を膨らませ、ものづくりを学んだ。あえて、昆虫をお客様に設定することで「正解のない」レシピづくりを通じた感性教育であると同時に、自分の考えをまとめ、言葉ではないドリンクという表現でアウトプットする経験を積むことにより、発想はもっと自由なものであってよいという多様な視点を獲得する機会となった。また、実際の店舗で実施したことにより、仕入れ業者の出入りや開店準備の様子も知ることができた。

・生徒の感想（抜粋）

ターゲットのことを考えてドリンクを考えるので難しかったが、紙に書いて構想を練ったり、味見したりして自分の手で実際に作っていくので、アイデアが沢山浮かび、楽しかった。質問をしたり自分の考えを発表することを即興ですることは緊張した。できる限り分かりやすく伝えようと努力したし、自分から話そうと主体的になれたので良い経験になったと感じる。また、新しいアイデアや視点を生み出すときに、既にあるアイデアを掛け合わせると良いという事など、お話のなかで普段の活動のヒントや自分とは違う新鮮な考えを知ることができ、興味深いと思った。（1年生徒）

J	非公開の建築に潜入する！みかげ建築めぐりツアー	12月15日	阿曾英美氏 阿曾英美建築事務所 他2名
---	-------------------------	--------	---------------------------

・場所 菊正宗酒造株式会社本社、鉄の教会、神戸市立御影公会堂（いずれも神戸市東灘区）

・参加者 4名

・概要

神戸市の建築家阿曾芙美さんと大阪公立大学の建築史家倉方俊輔さんの解説のもと、地元東灘区の名建築を巡った。菊正宗本社ではなぜ銀行建築が本社になったかの由来を聞き非公開の社内を内覧。鉄の教会では施主さんと実際に設計した木村さんの両方からお話をうかがった。御影公会堂では市民に開かれて活用されている生きた建築を内覧。学校に戻り建築家をまじえて感想会を行った。

• 学びのポイント

地元に残存して活用されている建築を知ることで地域の歴史の一端を学んだ。鉄の教会では建物ができるプロセスを施主の思い、予算や制約をどうアイデアで着地させたかという建築の基礎を網羅して学んだ。また建築は関わる人との協働作業であることや、使われ方に意味があること、その使われ方が意図して論理的に設計されていることを学んだ。

• 生徒の感想（抜粋）

今回は街の中にある、意志の強い建築を見学させていただいた。「意志の強い建築」と表現したが、今回のクリエイション講座で街の中にあるものは建築だけに限らず、それぞれに制作者をはじめとする関わってきた人の思いが込められているのだと学んだ。私は、身近にある大切でありながら大切さに気づかれづらいものを、人に共有するにはどうすれば良いか探究している。そのような探究をしている者として、街の中に人の思いが溢れていることに気づくことができとても良かった。今回学んだことを自身の周囲の人へ共有したい。（2年生徒）

K	子どもの可能性をクリエイトするデザイナーに学ぶ	2月6日	岡崎忠彦氏 株式会社ファミリア社長 他2名
---	-------------------------	------	-----------------------------

• 場所 株式会社ファミリア本社、および、神戸本店

• 参加者 18名

• 概要

神戸に本社がある株式会社ファミリアの社長岡崎忠彦さんに、ファミリアの企業理念、歴史、ものづくりへの思い、経営についてのご講演の後、オフィス見学を行った。ご講演や見学の中で、社員の方々のお仕事の様子をすぐそばで見て、その熱を体感することができた。最後は「『子供の可能性をクリエイトする』ことにつながる新しいサービスやアイテムを考えてください」という議題でグループディスカッションをし、社長にフィードバックをしていただいた。

• 学びのポイント

講演やディスカッションの中で、「会社は人でできている」という言葉を体感する機会となった。新しいことを探索する力と一つのことを深掘りする力の二つが必要であり、高校時代にイノベーションを起こす訓練をしておくことが大切だと学んだ。また、一つのテーマについて、意見を出し合い、協働する楽しさを改めて感じる機会となった。

• 生徒の感想（抜粋）

小さな頃から身近にあったファミリアを企業側の視点で見ることができて新鮮でした。グループで実際に自分に何ができるかを考えると想像以上に難しく、一つのアイデアを実現するのにもたくさんの工夫が必要なのだとわかりました。子どもの可能性は無限で、固定概念に縛られる前の子供の発想は純粋で自由で、斬新で、でもそれを発散できる場、受け止めてあげられる場は少ないように思います。今回だけでは具体的な案を導きだせなかったのが、少しずつ考えていきたいです。また、会社は人でできているというお話も印象的でした。部活等も一緒に、それぞれのビジョンや思いがあつての集団なのだと思います。1人では難しい事でも色んな人の多方面からの視点があればできる事もあるなと思いました。参加してよかったです。（2年生徒）

③課題研究成果発表会（校内発表会、校外での課題研究発表、県外高等学校との交流発表会）

■御影セッション（学年の垣根を越えた探究交流発表会）発表タイトル一覧

●発表タイトル/班番号

旧1年1組	班番号	発表タイトル	旧1年5組	班番号	発表タイトル
1班	11	地産地消	1班	51	地球温暖化を防止するには
2班	12	STOP!食品ロス second season	2班	52	綺麗な水をつくろう
3班	13	マスク依存症	3班	53	WITH ANIMALS
4班	14	LET'S GO 献血	4班	54	新型インフルエンザとコロナの比較
5班	15	ジェンダー平等の実現に向けて	5班	55	南海トラフ巨大地震への備え
6班	16	御影、タブレット使えるってYO”!!	6班	56	ポイ捨てがなくならないのはなぜか。
7班	17	なぜsnsの問題は起こるのか	7班	57	イノシシ被害を減らすには
8班	18	睡眠の質を上げるにはどうすれば良いか	8班	58	目指せ!最先端のチラス配り
旧1年2組	班番号	発表タイトル	旧1年6組	班番号	発表タイトル
1班	21	なんか課題多ない?	1班	61	食品ロスは世界を減ぼす!～食品を無駄にしないために～
2班	22	部活動別の効果的な筋トレに関する調査	2班	62	デマ(フェイクニュース)の拡散と心理
3班	23	プラスチックストロー!!そんな時代遅れだろ(笑)	3班	63	WHY JAPANESE PEOPLE!?
4班	24	制服改定論	4班	64	なぜ若者の政治に対する意識(投票率)が低いのか
5班	25	脱だらだらスマホ	5班	65	高校生が様々な相談機関を利用しやすくするためには
6班	26	授業中に眠くなる原因と対策	6班	66	廃れない商店街の条件
7班	27	人前で緊張しないためには	7班	67	安全な道にするには
8班	28	カギってる?盗難されない自転車を求めて	8班	68	高校生に北区の魅力を知ってもらうために何が出来るか
旧1年3組	班番号	発表タイトル	旧1年7組	班番号	発表タイトル
1班	31	LET'S GO 北区	1班	71	変えないと!!不安だらけのスマホ生活
2班	32	目上の方とのコミュニケーションを円滑にするためには?	2班	72	大丈夫!?あなたの街のゴミ事情
3班	33	黙食の探求	3班	73	nomore throw the garbage
4班	34	Stop信号無視 あなたの命無視しないで	4班	74	安全の領域展開!～二次災害を知る～
5班	35	知ってみよう!!政治について	5班	75	スマホ依存にならないためには
6班	36	SNS上のやり取りによるトラブルを減らすには	6班	76	色覚異常について
7班	37	睡眠とスマホの関係	7班	77	殺処分を減らそう
8班	38	地域清掃の効率化	8班	78	stopパワハラ
旧1年4組	班番号	発表タイトル	現2年8組	GS課題研究	発表タイトル
1班	41	Let's communication	1班	14:30	見直してみいひん?～自分のニーズにあった野菜の購入～
2班	42	合意形成	2班	14:40	若者の力で行政を動かせ!!
3班	43	ストレスへの対処の手引き～認知転換～	3班	14:50	Let's think 過剰包装
4班	44	理想と現実の違い	4班	15:00	コンポストで地球を救う!?!?
5班	45	「在日外国人」が快適に生活するために出来ること	5班	15:10	神戸市の子どもの体力低下について
6班	46	フードドライブについて	6班	15:20	御影高校生が自信を持って発表するには?
7班	47	御影高校の地震対策について	7班	15:30	おいしい給食～なぜ給食をおいしくないという生徒がいるのか～
8班	48	高校生やばくない!??～スマホに勝つ～			

■校外での課題研究発表

・ 6月28日(火) 地域探究プロジェクト発表会 (神戸大学にて)

発表タイトル (7件発表参加)

御影高校生が自信をもって発表するためには

Let's think 過剰包装

おいしい給食 ～なぜ給食をおいしくないという生徒がいるのか～

神戸市の子どもの体力低下について

コンポストで地球を救う!?!?

野菜が高すぎる?? ～価格と共に考える、食材の購入～

若者の力で行政を動かせ!!

・ 11月19日(土) 関西学院大学リサーチフェア (関西学院大学にて)

発表タイトル (3件発表参加)

見直してみいひん?～自分のニーズに合った野菜の購入～

若者と行政機関をつなげてみた～地域連携から課題の解決をはかるために～

人前で自信をもって発表するには?～自信アップ大作戦!～

・ 12月18日(日) 甲南大学リサーチフェスタ (オンライン)

発表タイトル (13件発表参加)

何がいけない?～上げたい投票率 上がらない投票率～【クリエイティブ テーマ賞 受賞】

「アドラー心理学」から学ぶ!～落ち込まない方法と立ち直るための考え方～

ハリーポッターとともに学ぶ翻訳

髪があたえる印象のちがひ

企業のキャッチコピーから各世代に効果的な言葉を考える

なぜ方言は「うつる」のか

聖地巡礼がもたらす経済効果

なぜ羅生門は教科書に取り上げられ続けているのか

会話文から見る役割語

なんでKOBEにこーへんの?

野球を世界に広めたい!!

なぜJpopは売れないのか

地域の歴史的・文化的特色を再発見し、継承していくためには

・ 12月23日(金) 葺合高校主催 課題研究交流発表会 (オンライン)

発表タイトル (3件発表参加)

何がいけない?～上げたい投票率 上がらない投票率～

なんでKOBEにこーへんの?

地域の歴史的・文化的特色を再発見し、継承していくためには

・ 2月5日(日) 高校生SDGs探究発表会 (兵庫県立兵庫高等学校にて)

発表タイトル (3件発表参加)

何がいけない?～上げたい投票率 上がらない投票率～
野球を世界に普及させるためには
兵庫県内におけるナラ枯れ被害状況

・ 3月20日(月) 東灘区役所×御影高校 意見交換会 (東灘区役所にて)

発表タイトル (1件発表参加)

若者と行政機関をつなげてみた～地域連携から課題の解決をはかるために～



地域探究プロジェクト発表会 (神戸大学)



岡山学芸館高校との課題研究活動交流会(7月)



関西学院大学リサーチフェア 2022



甲南大学リサーチフェスタ 2022

■ 県外高等学校との交流発表会～岡山学芸館高校との課題研究活動交流会要項（7月）

岡山学芸館高校×御影高校
課題研究活動交流会@御影高校

■ 目的 御影高等学校と岡山学芸館高等学校の課題研究活動に関わる生徒交流会として本会を実施する。1年生はこれまでの取り組みを紹介し、2年生の発表を聞くことで今後の活動の参考にする。2年生はお互いの課題研究活動の内容を相互交流することによって、春から進めてきた研究活動の方向性を探る会とする。

■ 参加者数

御影1年	御影2年	学芸1年	学芸2年	合計
40名	31名	23名	38名	132名

■ 実施日および会場 7月29日（金）14:00～16:00 @御影公会堂

■ スケジュール

開始	終了	時間幅	内容	備考
13:40	14:00	0:20	学芸館、御影公会堂に到着。	机椅子は各自で準備。
13:40	14:00	0:10	会場準備の後、集合 御影高校生が中心となり、準備します。	全体会のレイアウト 自分のイス等を準備
14:00	14:20	0:20	・御影高校校長挨拶 ・今回の主旨説明（教員） ・両校の学校概要・カリキュラム説明 （御影高校 生徒2名） （岡山学芸館高校 生徒1名）	・司会 （御影高校 生徒2名）
14:20	15:05	0:45	・御影2年生3班による代表発表 「野菜が高すぎる??～価格と共に考える、食材の購入～」 （御影高校 生徒2年生 4名） 「若者の力で行政を動かせっ！」 （御影高校 生徒2年生 5名） 「御影高校生が自信をもって発表するためには」 （御影高校 生徒2年生 4名）	全体を前にして発表 スクリーン投影 15分×3班：発表10分+ 質疑5分
15:05	15:10	0:05	・分散会のレイアウトに移動	
15:10	15:30	0:20	・御影1年生によるミニコミ誌の発表 ※ブースの場所は、会場図を参照。	17テーマ班別に発表 ミニコミ誌はA3サイズ 1テーマ3分+交代時間2 分=5分を4回転
15:30	16:05	0:35	・学芸2年生による中間報告 発表テーマごとにブースを用意 ※ブースの場所は、会場図を参照。	テーマごとに発表 手元資料を用意 同時に25ブースを設置 自由に発表を聴講
16:05	16:15	0:10	・振り返りフォームの記入 ・閉会の挨拶	・生徒代表で挨拶

■ 県外高等学校との交流発表会～岡山学芸館高校との課題研究活動交流会要項（3月）

兵庫県立御影高等学校 76・77回生 総合人文コース

コースフィールドワーク

岡山学芸館高等学校×御影高等学校
課題研究活動交流会 in OKAYAMA GAKUGEIKAN!

●ねらい

本校と岡山学芸館高等学校の課題研究活動に係わる生徒交流会として、お互いの課題研究活動の内容を相互交流することによって、1年生はこれから始まる本格的な課題研究に対して前向きな姿勢を育み、2年生は今までの研究活動を他者に発表することで、自身の研究をより明確にしていく。

●日時 令和5年3月13日(月) 7:25～19:00

●当日の持ち物 筆記用具・体育館シューズ・お金・飲み物・常備薬・その他必要なもの・発表に必要なもの

●午前の流れ

7:25 7:30	御影高校 バス内集合・点呼 出発（どのバスも高速道路経由）		
赤穂 FW(大型バス1号)	姫路 FW(大型バス2号)	岡山 FW(大型バス3号)	
07:30 学校出発	07:30 学校出発	07:30 学校出発	
09:00 赤穂到着	09:00 姫路城到着	10:00 岡山城到着	
11:15 バス出発	11:30 バス出発	12:00 岡山駅前集合	
12:15 一本松展望園(SA)	13:00 岡山学芸館高校 到着	12:10 バス出発	
12:50 バス出発		12:50 岡山学芸館高校 到着	
13:10 岡山学芸館高校到着			

●午後の流れ

13:15	体育館集合完了
13:25	開会式
13:35	アイスブレイク
14:05	分科会の説明、移動
14:15	分科会①(40分) / 発表10分(7分発表、3分質問) × 4人
14:55	休憩(10分)
15:05	分科会②(40分) / 発表10分(7分発表、3分質問) × 4人
15:45	分科会終了、移動
15:55	閉会式
16:00	バス乗車(三宮行と学校行に分かれて乗車)
18:30	三ノ宮駅周辺到着 解散 / 御影高校着 解散

④目標の達成状況、成果、評価（速報値より）

三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングが作成した「高校魅力化評価システム」のアンケート項目より

- ・「将来国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい」に当てはまると答える割合

	2022（目標値）	2021 年度 ※前年度
全校生徒	42.8%（45%）	44%
クリエイション講座参加生徒	90.6%（50%）	

- ・「国際社会の課題解決に貢献したい」に当てはまると答える割合

	2022（目標値）	2021 年度 ※前年度
全校生徒	58.9%（60%）	68%
クリエイション講座参加生徒	92.9%（70%）	

- ・「客観的な証拠に基づき、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる」に当てはまると答える割合

	2022（目標値）	2021 年度 ※前年度
全校生徒	49.4%（50%）	50%
クリエイション講座参加生徒	91.8%（55%）	

■本事業での目標指標、および、上記の結果に関する評価

計画書にも示したように、本事業については、様式が生徒の変容に関する評価となっているため、上記のような、生徒の変容の視点に関する成果目標を設定しており、「高校魅力化評価システム」のアンケートの中で、評価が低く、本校の課題であると認識できる3項目について、特色ある学びの先行実施を通じて、3年間の事業の実施によっていかに成果を上げることができるかを検証することとしている。

上記結果は、本事業の対象生徒とするべきところを「クリエイション講座に参加した生徒」と、「全校生徒」へのアンケート結果とを比較したものとなっている。特に、「クリエイション講座に参加した生徒」は、延べ172名であるが、このうち、複数の講座に参加した生徒について、複数回答した生徒の回答結果も含んでいるため、現在のところの速報値としている。なお、「全校生徒」の結果に関しては、クリエイション講座がまだ1度も実施されていない1学期末に実施したアンケート結果である。上記から、「全校生徒」の結果と比して、「クリエイション講座の受講者」は、「国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい」「国際社会の課題解決に貢献したい」「客観的な証拠に基づき、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる」という生徒の割合が格段に高いことが分かる。一方、上記には掲載していないが、アンケートの結果を詳しく検討したところ、クリエイション講座に参加した生徒が、もともとこのような回答ができるような生徒ばかりではなかったということも示されており、クリエイション講座で展開された講義やワークショップ等を通じて、自信が持てたり、スキルが磨かれたりしたという結果が数値となって表れているものと考えられる。この結果から、いわゆる「授業」として、普段から開講されている「学校の中だけで展開される学び」ではなく、「学校外で開かれた学び」が、子どもたちの資質・能力の向上につながっているということであるとも言える。この意味においても、「社会に開かれた教育課程」の実現の必要性や、新学科の軸に据えようとしている学びの必要性が導かれるのではないかと考えている。

IV 参考資料

① クリエイション講座募集案内

A course

京都芸術大学meets御影高校

「デザイン思考ワークショップ」



大学の先生をお招きし、ご講義をいたたく講座です。実際の企業からの「課題」に、「デザイン思考」を存分に発揮し、高校生として「探究」するワークショップに参加してみませんか。

[講師] 吉田 大作 氏
(京都芸術大学准教授)

[費用] 無料(定員20名)
※阪急御影から京都芸術大学までの交通費も本校が負担します。

■8月1日(月) 本校セミナー教室 対面キックオフ 3時間程度の導入WS 次回までの宿題提示	■8月23日(火) オンラインでの実施 調べた内容の共有 アイデア出し	■8月29日(月) 京都芸術大学で実施 プレゼンテーション フィードバック
---	---	---

※日曜とも午前あるいは午後の半日程度の実施です

こんな人におすすめ

最終日は京都芸術大学で開催!
市内観光もできますよ!!

- 実際の企業からの「課題」に対して探究してみたい!という人
- 探究活動に参加したことがないけれど、興味がある1年生
- 探究活動に参加した経験を活かし、実社会で活躍したいと考える2年生
- 「デザイン思考」に興味がある人

B course

株式会社ウエルアップmeets御影高校

「『インフラを守る』を仕事にする」



橋梁の整備を中心に、私たちの生活を支えるインフラを守る仕事に従事する尾花氏からのご講義や現場の見学、整備体験等を通じて、今後のインフラ整備について考えてみましょう。

[講師] 尾花 弘教 氏
(株式会社ウエルアップ社長)

[費用] 無料(定員20名)
※本校から現地見学会場までの交通費も本校が負担します。

■8月2日(火)午前 本校セミナー教室で実施 講義「インフラを守るから守るへ ～地域のインフラは地域を守る～」 ワークショップ「地域を守るために」 現地調査実習「石屋川橋」	■8月3日(水)8:30-14:00 御影高校からマイクロバスで移動 移動中に阪神高速の橋梁について解説 講義「NEXCO西日本工事現場と安全」 現場見学「NEXCO西日本の橋梁架設工 事一日当初の工法のモデル事業見学」
--	--

こんな人におすすめ

NEXCO西日本の協力で実現した日本初の工法見学
現場見学はレアな経験になること間違いなし!

- 実際の橋梁整備の現場を見てみたい!という人
- 昨年度尾花氏のお話を聞いて、インフラの整備現場に興味がある2年生
- 将来、橋梁整備に携わりたいと思う理系志望の人
- 起業や地域貢献に興味がある人

新たな学び体験“クリエイション”参加者募集

“CREATION”

MIKAGE High School STEAM Summer field works

C course

環境科学部presents

「生物多様性から海や山の環境を考える」



2泊3日で日本海に住むさまざまな生物を軸に地球環境を考える講座です。ウニの発生の観察等、さまざまな現地での実習を通じ、日本海に棲む生き物の様子を知らることから生物多様性の視点で持続可能な社会とは何か考えてみましょう。

[講師] 大西 伸弥 先生
(本校理科教諭)

[費用] 無料(定員10名程度)
※食費等、一部実費が必要です。

■8月8日(月) ウニの採集 ウニの人工授精 ウニの発生の観察	■8月9日(火) ウニの発生の観察 魚の採集 海に棲む生物の観察	■8月10日(水) 海と山の繋がりや、人と自然の共生について考える
---	--	---

こんな人におすすめ

さまざまな実習を落着いた環境で実施します

- 「ウニの発生」の様子を、実際に顕微鏡で見たい!という人
- 文系や理系を問わず、海や山、それぞれの環境保護に興味がある人
- 魚やキノコに興味がある人
- 海で泳ぎたい人、ウニの様子を海に潜って観察してみたい人

新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)とは

普通教育を主とする学科の弾力化(普通科改革)や教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を実現するため、各学校の新たな学びに向けた取り組みを推進するとともに、遠隔・オンライン教育等を活用した新たな教育方法を用いたカリキュラム開発等のモデル事業です。また、新たな学びや教科等横断的な学びを実現するために、地域、大学、国際機関等との連携協力を行いながら進めていくこととされています。

本校は、今年度、この「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」に、全国18校の中の1校として指定され、新たな学びを推進していくこととなりました。

その事業の一環として、この「CREATION～MIKAGE High School STEAM Summer field works～」を開催します。

新たな学び「STEAM教育」とは

「STEAM教育」とは、Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学・ものづくり)、Art(芸術・リベラルアーツ)、Mathematics(数学)の5つの単語の頭文字を組み合わせたもので、技術革新が進み、人工知能の影響で、世の中が大きく変化する中で生まれた教育概念です。兵庫県では、EiC English(英語教育)を含め、活動を展開しています。本校でも、今後、この「STEAM教育」を意識した活動を教育活動に取り入れ、実践していく予定です。

本事業「CREATION」に関するお問い合わせ

兵庫県立御影高等学校 特色教育推進部長 橋本
電話番号 078-841-1501

CREATION

MIKAGE High School
STEAM

Autumn field works

新たな学び体験 “クリエイション”

参加者募集

Oct. 20. 午後実施

2学期中間考査最終日の午後に実施します

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）とは

普通教育を主とする学科の弾力化（普通科改革）や教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成を実現するため、各学校の新たな学びに向けた取り組みを推進するとともに、遠隔・オンライン教育等を活用した新たな教育方法を用いたカリキュラム開発等のモデル事業です。また、新たな学びや教科等横断的な学びを実現するために、地域、大学、国際機関等との連携協力をいっしょに進めていくこととされています。

本校は、今年度、この「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に、全国19校の中の1校として指定され、新たな学びを推進していくこととなりました。

その事業の一環として、夏の開講に引き続き、「CREATION～MIKAGE High School STEAM Autumn field works～」を開催します。

新たな学び「STEAM教育」とは

「STEAM教育」とは、Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学・ものづくり）、Art（芸術・リベラルアーツ）、Mathematics（数学）の5つの単語の頭文字を組み合わせたもので、技術革新が進み、人工知能の影響で、世の中が大きく変化する中で生まれた教育概念です。兵庫県では、EにEnglish（英語教育）を含め、活動を展開しています。本校でも、今後、この「STEAM教育」を意識した活動を教育活動に取り入れ、実践していく予定です。

本事業「CREATION」に関するお問い合わせ
兵庫県立御影高等学校 特色教育推進部長 橋本
電話番号 078-841-1501

D COURSE

株式会社528 meets 御影高校

「imaginationの練習ワークショップ」

【講師】 玉木 浩子【Jesse】氏 【費用】 無料（定員30名）
（株式会社528社長）

AIに代替されない領域として、アートの世界が注目されています。音楽をはじめとするアートを使った「心を癒すアートを処方すること」をミッションとしている株式会社528の方々をお招きし、自分を見つめなおし、絵画や音楽を通して、人間にとってのアートの在り方について考えてみませんか。この講座は、本校の音楽室にて開催します。

E COURSE

萩原珈琲 meets 御影高校

「ほかの人におすすめしたくなる珈琲」

【講師】 萩原 美治 氏 【費用】 無料（定員30名）
（萩原珈琲代表取締役マネージャー） ※阪神御影からポートアイランドのラボまでの交通費は本校負担。

電子化・効率化が進む世の中で、老舗ロースターが守るアナログの世界。焙煎の仕組みについて科学・技術・工学分野の面から紐解きます。また、アナログの世界を生物学的視点からお伝えし、経営・経済・商学に限らず、どのような専攻でも将来に活かせることを伝えていただきます。ポートアイランドのラボにて開催！

F COURSE

U.I.J. meets 御影高校

「実社会の課題をテクノロジーで解決！」

【講師】 吉永 隆之 氏 他 【費用】 無料（定員30名）
（Urban Innovation.JAPAN ディレクター）

ITテクノロジーを使って実社会における課題解決する手法を学べる講座です。高校生のみなさんにとって想像が付きやすいテーマを題材に、御影高校校内で実施します。簡単なアプリのモックアップを作れるツールを使って実践します。アプリを実際に作ってみることに加え、ゲスト多数で、社会で活躍されているさまざまな方からの刺激あるお話やデザイン思考に基づくワークにも期待してください。

こんな人におすすめ

- 総合人文コースの学びに触れてみたい人
- 新しい分野の学びに取り組みたい人
- アートやサイエンス、テクノロジーに興味がある人

知っておいてもらいたいこと

- 各講座、定員があるので注意してください
- 先着順に締め切ります

MIKAGE High School STEAM Winter field works 参加者募集!

12/14 (水)

12/15 (木)

どちらも午後実施

「神戸の里山で探索！多様性とランドスケープデザイン」

H コース

【講師】 建築設計事務所Muff 今津修平氏

12/14 (水)

放置され荒れた山が増えている一方で、個人で山を買い取り自分の暮らしを自ら作るとうとする活動が増えています。神戸市北区の山を個人所有する設計事務所の今津氏を講師に迎え、「IMAYAMA」をフィールドに自然環境の探索や、この山をどのように活用すれば面白いかを考えるワークショップを開催！実際に木を切る、森を歩くなどの体験学習もあります。

定員
20名



「北野のカフェで想像する！架空のメニューづくり」

I コース

【講師】 カフェ汀 株式会社KUUMA 濱部玲美氏

12/15 (木)

カフェオーナーが考えていることを、実際に疑似体験しませんか？お店のコンセプトにそってどんなメニューや企画を考えているのでしょうか？商品開発や企画のプロセスには様々なポイントがあります。「食とアートの交差点」を掲げるカフェ「汀 migiwa」のオーナーで編集者の濱部玲美さんを講師にイマジネーションを広げて、ドリンクメニューをつくりまします。

定員
20名



「非公開の建築に潜入する！みかげ建築めぐりツアー」

J コース

【講師】 建築家 阿曾美美氏、
建築史家 倉方俊輔氏、建築家 木村博昭氏

12/15 (木)

御影高校がある東灘区。じつは素晴らしい建築がたくさんあります。全国から見学に来るほど有名な地域の建築から心地よい空間づくりについて考えます。また一般公開していない酒造 菊正宗株式会社本社を特別に見学し、「鉄の教会」設計者の木村さんや灘の建築家阿曾さん、建築史家の倉方さんから思わす人に話しなくなる建築の知識を学び、空間のデザインについてディスカッションします。

定員
20名



本事業「CREATION」に関するお問合せ

兵庫県立御影高等学校 特色教育推進部長 橋本 電話番号 078-841-1501

中央区

神戸市のインターネットアンケートに協力する市民と久元喜造市長が対話するフォーラムが4日、中央区・三宮のミント神戸で開かれ、初めて高校生5人が参加した。参加者は、市が進める駅前の再

整備について感じた疑問点を伝えたり、神戸がさらに発展していくためのアイデアを提案したりし、久元市長は具体的な施策を交えながら答えた。(小谷千穂)

御影高校生ら市長に提案

三宮再整備、まちの活性化策など

アンケートに協力する市と「思えない」などと指摘が上った。中央区の女性は「まちづくりで災害対策は考えているのか」と問うた。久元市長は、高層のタワーマンションは老朽化すると、安全面で不安が生じることなどに触れ、「三宮周辺では建設を規制している」と市の意見を基に、都心・三宮再整備▽駅前再整備▽公園等の地域拠点整備▽安全・安心なまちづくり▽観光・まちの活性化」をテーマに意見交換。駅前再整備については、参加者から「神戸電鉄鈴蘭台駅は、北区役所が駅ビルに入ったので近隣の飲食店に人が来なくなっ

た」「新神戸駅の再整備案はハープガーデンをコンセプトにするが、人が集まる

施策への疑問点も伝える



政策について久元喜造市長に質問する高校生
＝中央区雲井通7

同校総合人文コースでは、授業で生徒が主体となって若者と行政をつなぐ活動を広げてきた。これまでも公園について考える市のワークショップなどに生徒が出席しており、この日の参加につながった。フォーラムでは、事前の意見を基に、都心・三宮再整備▽駅前再整備▽公園等の地域拠点整備▽安全・安心なまちづくり▽観光・まちの活性化」をテーマに意見交換。駅前再整備については、参加者から「神戸電鉄鈴蘭台駅は、北区役所が駅ビルに入ったので近隣の飲食店に人が来なくなっ

施策を紹介した。

同校2年の辰巳菜々さん(16)は「市長はこの世代に向けて行政を展開していきませうか。若者が行動を起こせば受け取ってくれますか」と質問。久元市長は「出産育児費用を市独自に5万円支援するなど、これから生まれる赤ちゃんも含め全ての世代に向けている」としつつ、「若い世代がもっと意見を言えるような仕組みを考えたい」と伝えた。

■ネスレ日本株式会社プレスリリース (2022年9月1日) より



2022年9月1日
ネスレ日本株式会社

**アニメ監督山田尚子さんと mame さんなど人気イラストレーター25 名が
実話をもとにした“きっかけストーリー”をデジタルカードにイラスト化！
「キットカード」9月1日(木)より公開 (※1)**

～全国に先駆けて、兵庫県の高校で「キットカット」の紙パック回収を開始～

ネスレ日本株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役 社長 兼 CEO 深谷 龍彦、以下「ネスレ日本」)は、SNS 上で応募された「キットカット」が前向きな一歩のきっかけとなった実話をもとにした“きっかけストーリー”をアニメ監督山田尚子さんと mame さんや日菜乃さんなど人気イラストレーター25 名がイラスト化したデジタルカード「キットカード」(※参考資料を9月1日(木)より公開します。)(※1)山田尚子監督の「キットカード」は10月より公開予定

特設サイト:<https://naselle.jp/brand/kit/kitchin/>



ネスレ日本は、昨今の先行きの見えにくい時代において、伝えられなかった想いを伝える“きっかけ”や、夢に向けて気持ちを奮立たせて更なる一歩を踏み出せるような新しい可能性を切り拓く“きっかけ”に「キットカット」がなることを目指し、2022年2月21日(月)より、アニメ監督山田尚子さん、歌手 AI さんを迎え「キットカット」にて約4年振りとなるブランドキャンペーン“きっかけは、キットカットで。”を開始しています。(※2)

(※1)2022年2月配信プレスリリース https://www.nestle.com/japan/press/2022-02/20220221_kitkat.pdf

このたび、前にも進むことに躊躇している方が一歩を踏み出すきっかけや、大切な人へ感謝の気持ちを伝えるきっかけをサポートしたいという想いから、誰もが自由に活用できる「キットカード」を作成するとともに、“きっかけメッセージ”がパッケージにデザインされた「キットカット」4製品を9月1日(木)より発売します。

■「キットカード」について

事前に SNS 上で「キットカット」が前向きな一歩のきっかけとなった実話を学生部門、家族部門、仕事部門、未来部門の4つの部門で募集した結果、総数2,139の応募がありました。その中から50名の方の実話をもとにした“きっかけストーリー”を、山田尚子監督と mame や日菜乃さんなど人気イラストレーター25名が描きおこしたデジタルカードが「キットカード」です。「キットカード」を“きっかけ”に、大切な人へ想いを届けることができます。

◆使い方

- ①イラストレーターやイラストのタッチから選ぶ方法、選り内容やキーワードから選ぶ方法の2つの方法がありますので、どちらかの方法を選びます
- ②選択後、イラストレーターもしくはキーワードが複数表示されますので、気に入ったものを選択してください
- ③選択内容に沿って、「キットカード」が複数表示されますので、その中から、気に入った1枚を選択します
- ④イラストに入りたいメッセージを入力して、自分だけの「キットカード」を作成します
- ⑤完成した「キットカード」は、SNS 上や、画像をダウンロードすることで大切な人へ贈ることができます



◆特設サイト: <https://naselle.jp/brand/kit/kitchin/>

■ユニークなデザインの個性で、新しい想いを“きっかけ”をサポート

Twitter 上で投稿された多様な“きっかけ”と「キットカット」に関連するツイートを参考に作成した“きっかけメッセージ”がパッケージにデザインされた「キットカット」4製品を9月1日(木)より発売します。

「キットカット ミニ」には、友達や家族と話すきっかけ、「キットカット ミニ オトナの甘さ」には、仕事でのきっかけ、「キットカット ミニ オトナの甘さ 濃い抹茶」には気持ちを安らかせるきっかけ、「キットカット ミニ 金輪粉ビスケット in」には自分を励ますきっかけのメッセージがデザインされています。

ユニークなデザインの個性を選び、皆様の想いを伝える“きっかけ”をサポートしたいと考えています。



画像:「キットカット」個性デザイン 一冊

■「キットカット」の紙パックの古紙回収は開始、その一部が再利用され、リアル「キットカード」へと生まれ変わります

ネスレ日本では2019年9月より、「キットカット」の主力製品である大袋タイプ4品の外袋を従来のプラスチックから紙パッケージに変更し、海洋プラスチックごみの課題に向けた取り組みを推進しています。(※参考資料) それ以降、紙パッケージ製品のラインアップを徐々に拡大し、「キットカット」の全ての大袋タイプ製品の外袋を紙パッケージとすることで、2019年の取り組み開始以来、累積790トン(2021年度末)のプラスチックを削減しています。

「キットカット」の外袋の紙パッケージは、紙がみとして古紙回収に出せる素材で、紙資源になることから、回収ボックスを設置し、古紙回収を行い、その一部が活用されて紙製のリアル「キットカード」へと生まれ変わります。

まず初めに神戸市にある兵庫県立御影高等学校に9月から設置し、今後より多くの方にご協力いただけるよう、回収ボックスの設置場所を順次拡大予定です。




■兵庫県立御影高等学校コピント:

本校では、総合人文学部生が神戸大学生と協働して取り組む課題探究活動である“地域探究プロジェクト”等、Society5.0時代に求められる生徒を育てる学びを意欲したさまざまな実践を展開しています。

平素より古紙回収を実施しているため、「ゴミの減量・環境保護活動」は、本校生の探究活動においてもしばしば取り上げられるテーマですが、生徒の考案する独自の解決方法は、「目的の地域」にだけ着目したものとなりがちです。今回、本校生がこの取り組みに参加することで、企業の社会貢献の取り組みについて新たな知識として得ると同時に、「自身の課題の解決」が、社会に広く波及することで、「グローバルな社会課題の解決」につながるという取り組みから今後の学びにつながる新たな発見をしてもらいたいと考えています。

以上

◆参考資料

■「キットカード」の応募結果に参加イラストレーター(※参考資料)

mame、日菜乃、yudouhu、猫とろ、柳すえ、yasuna、げみ、らすく、宮下和、大津南乃、双森 文、中島ひり、イママキ、Shiho So、mashu、IORI KIKUCHI、an、黄身子、赤、慧子、アキオカ、りべるむ、きむら あんさい、北橋まゆ、深川 優、山田尚子



兵庫県立御影高等学校
Hyogo Prefectural Mikage Senior High School